真・恋姫†無双～姜維伝～

弾丸野郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双～姜維伝～

【Ｎコード】
Ｎ２５４３Ｘ

【作者名】
弾丸野郎

【あらすじ】
現代で生きていた少年は不慮の事故により命を落としてしまった。
だが、なぜか少年が意識を取り戻すと、そこは古代中国の三国志の世界だった！？

転生

突然だが、皆さんは生まれ変わり、または転生というものを信じるだろうか？

おそらく、この問いを聞いた人の大多数が「お前何言ってんの？」というリアクションを取るだろう。

それはそうだ。俺だって自分の友人がいきなりそんな事を言い始めたら同じ反応をする。

ただし以前の俺に限るがね。え？　今の俺はどうなんだって？

残念ながら、生まれ変わりや転生を肯定せざるを得ないね。なぜなら…

「俺が転生しちまったからだよーーーーー！！」
「朝っぱらからうるさいぞ！！」
「ごめんなさイダァ！！」

真・恋姫†無双～姜維伝～

「くっそ……おもいきり殴りやがって」

俺は母の拳骨を喰らい痛む頭をさすりながら、毎朝の日課になっている槍の鍛錬をしている。物心付く前に病で亡くなった父との約束を守る為だ。生前はとても優しい人だった父の最期の願いを叶える為でもあるが、別に鍛錬で体を動かす事は嫌いじゃないのでこの日課は特に問題ではない。

問題があるのは周りの環境だ。ここは涼州に位置する天水の小さ

な村で、今のこの国を治めているのは後漢第１２代皇帝の劉宏である。勘のいい人は気付いただろう？

そう、俗に言う三国志の時代なのだ。……なぜ俺はここにいるんだろうね？

ハッキリ言っておくが、俺はタイムスリップなんて未体験だ。電気もガスも水道も、もちろん車や携帯だってある現代で俺は普通の高校生として生きていた。だけどある日、学校帰りに信号無視の大型トラックが突っ込んできて俺は命を落とした。意識が薄れていく中で走馬灯だってしっかり見てしまったし、何より助からない事が何となく分かったからな。だから、俺が死んだのは間違いないだろう。

それなのに次に意識が戻ったらなぜか１８００年前の時代に生まれていて、今の母親の腕の中に居たんだぜ？

そりゃあ混乱もしたけど、もう転生とかを信じざるを得ないさ。

そのあと、さらなる衝撃の事実が発覚した。この時代の俺は、姓は姜、名は維、字は伯約ときたもんだ。

……まさかの伏竜の愛弟子ですよ！？

姜維ってことは戦に出たりしなきゃならないのか！？　つうか生まれるの早過ぎない！？　とか尋常じゃないくらいテンパった。

だけど『理由は分からんが、せっかく生まれ変わったんだ！！今度こそ孫に囲まれて幸せに最期を迎えてやる！！』と、決意を無理やり固めて、再び生きる事にした。

我ながらこの超ポジティブ思考があって良かったと本当に思う。

そして転生してから早１０数年……父との死別など悲しい事も沢山あったが、何とかここまで生きてきた。今は母の仕事である鍛冶屋を手伝いながら農作業をしたりして、それなりに幸せな人生を送っている。このまま静かに人生を送れれば、戦に出る事もなさそうだ。

「これで、５００っと…」

日課の槍の素振り５００回を終えて俺は手拭いで汗を拭き取る。ずっと思ってきたが、この回数は農民の鍛錬には多すぎる気がする。そりゃあ、昔は漢王朝の中でも1、2を争う程の武勇の持ち主だった元将軍の母には大した回数じゃないかもしれないが、元学生の俺には正直しんどかった。いつの間にか慣れた自分が恐ろしいね。

「さて、朝餉の準備をしなきゃな。そろそろ「こらぁ！　私は腹が減ったぞ！　早く朝餉を食べさせろー！」……やっぱりキレた……今から作るからちょっと待ってろー！」

家から響く声に怒鳴り返しながら槍を持って家に向かう。母は家事全般が一切ダメなのだ。父が生きていた時は父が全て家事を担当していたし、今は俺が家事を受け持っている。多分、俺や父がいなかったらまともな生活を送れてないんじゃないか？

「遅い！　お前は私が食事をどれだけ楽しみにしているか、本当に理解しているか？　早く支度をしろ！」

家に戻った俺に、開口一番で自分の食欲アピールしてくる目の前

の女性が、俺の母の姜華（きょうか）である。俺の頭髪と同じ色で腰の長さまである雪のように真っ白な白髪を一本結いにしており、見た目はお淑やかな人間に見えるが、中身は超男前な性格である。父が陰で『残念美人』と呼んでいたのを俺は忘れない。

「そんなに焦らなくてもすぐに出来るって。下準備は終わらせてから鍛錬してたんだしさ」

「なんだ、そうなのか。安心したぞ。今日は大物の注文がきているのに、朝餉無しで働かなくてはならないのかと思った」

会話をしながら朝餉の仕上げに取りかかる。今朝のおかずは川で釣ってきた魚だ。現代のように簡単に焼き上げる事は出来ないのが不便だが、この時代の生活様式には流石に慣れた。そんなに苦労せずに調理を進める。

「へえー、どんな注文なんだ？」

「董卓様からの発注でな、新品の剣３００本と刃こぼれした剣２００本を打ち直して欲しいってよ」

「はあ！？　いくら何でも多すぎないか！？」

「最近盗賊の数が増加してきてるらしいぜ。天水の辺りではそうでもないらしいが、青州や冀州に幽州、おまけに洛陽付近でも徐々にだが増え始めて来てるみたいだ」

「いつこの辺にも現れるか分からないから万全を期してってことか……」

「そういうこった」

董卓というのはこの天水を治める太守の名前だ。最初に董卓が天水の太守になったと聞いた時は、ここの暮らしがどうなるのか本気で心配して絶望さえしたが、蓋を開ければビックリするぐらい善政を敷いてくれていた。

前に注文がきたときに、城へ品物を納入する母に付き添って顔を見た事があるが、優しそうな可愛い女の子だった。配下の賈駆や呂布、張遼に華雄、陳宮といった人物も全員美少女だったし……この世界は俺の知ってる歴史とは違うらしい。

「どうした？　難しい顔をして」

「……いや、何でもない。もし盗賊が来たら嫌だなと思って」

「心配するなって！　仮に盗賊が来てもこの村くらい私が守ってやるさ！　それにお前だって私が直々に稽古を付けてるんだ。賊なんかに負けやしねえよ」

俺は自主的に行っている鍛錬以外にも、母と手合わせをしている。自称《元漢王朝最強の将軍》というだけあって毎回ボコボコにされているが、その分だけ実力が身に付いてきていると思う。前に張遼と城で手合わせしたときに初めて勝ったしな。

というか張遼の武人としての覇気もかなりのものだったが、我が母上に比べたらまだ何とか耐えられるレベルだった。息子にまともに立ってられない程の覇気を浴びせる母親がおかしいんだろうけど。

「……俺も簡単に殺される程、ヤワな鍛錬をしてるつもりもないけどさ。それでも人を殺す覚悟ってのが出来てないんだよ……」

「……」

俺は相手が盗賊だろうと、例えばどこかの将軍だろうと、本気で立ち合えばそう簡単に負けない程度に武に自信はある。それこそ相手が呂布レベルでない限りは。

だけど、それは立ち合いでの話であって命をかけたやり取りの話

ではない。戦のような殺し合いの中で、自分の命を守る為に相手の命を奪う事が出来るかと言われたら、今の俺には出来ないだろう。

「……今は無理にそこまで気負わなくていい。お前がこれから誰かに仕官するつもりなら、命を奪う覚悟と奪った命を背負って生きていく覚悟も決めなければならないだろうが、ただの鍛冶屋の息子が思い詰める必要もない」

「……」

「だが、これだけは覚えておけ。己のために敵を殺そうが、誰かを守るために敵を殺そうが、命は全て等価値だ。重さも軽さも存在しない」

そう言ってこちらを見る母の顔は、かつての将軍としての厳しさを残しつつも、俺を心配する母親の愛情を感じさせる顔だった。

「……分かった」

「……ならよし！　さあ、辛気臭い話はここまでだ！　早くご飯にしよう！」

「おう！」

多少強引ではあるが、明るい話題に切り替える。これでいつも通り、騒がしい姜家の食卓に早変わりだ。

「出来たぞ！　特製の塩焼きだ！」

「おおー旨そうだ！　さすが我が息子！」

「そんじゃ頂きますか」

「うむ！」

「「頂きます」」

2人で手を合わせて、普段より遅めの食事を取る。

「そういえば、昨日私が森で穫ってきた猪はどうした？」

「……あれは食べられないって」

「むう……残念だ」

実はこの規格外の母親、昨日猪を穫ってきたのだ。山菜を採りに行ったはずなのに、バカでかい猪を担いで満面の笑みで帰ってきた時は、村人全員がドン引きだった。

「そういえば昨日は詳しく聞かなかったけど、どうやってアレ仕留めたの？」

「蹴ったら動かなくなったぞ」

「……前に虎を仕留めた時はどうやったんだっけ？」

「ん？　殴ったら動かなくなった」

「……」

……父よ。貴方と交わした約束、守らなくていいかもしれない。『母をしっかり守れるぐらい強くなって俺の代わりに守ってあげてくれ』と言っていたが、この人俺が守る必要なくね？　猛獣を殴り殺したり蹴り殺すような人間、弓や剣で武装したくらいじゃ殺せないと思うよ？

「どうした？　食わないのか？」

「……食うよ」

「そうか。しっかり食べておけよ！　今日から大仕事になるからな！」

「分かってるって」

改めて目の前の人間の人外っぷりに変な感心をしながら、食卓の

風景は過ぎていった。

転生（後書き）

初めて書いた作品です

誤字や脱字、読みにくい文章構成等の欠点だらけの駄作になると思いますが、暖かい目で見守ってくだされば嬉しいです！

新たな生き方

「相変わらず賑わってるなあ」

久し振りに訪れた天水の城下町を眺めながら呟く。前に来た時も活気に満ちていたが、さらに町全体が発展したように見える。

俺が城下町に到着したのは、昼餉の時刻を少し過ぎたくらいの時間だった。威勢の良い呼び込みの掛け声、元気よく走り回る子供達の笑い声、そして溢れんばかりの民の笑顔がここにはあった。

そもそも、なぜ俺がこの町に居るかというと、先日董卓様から注文された品物が全て完成したからだ。数が数だけに大変だったが、十分胸を張って届ける事の出来る品物になったと思う。

本来なら母も一緒に来る筈だったが、『休み無しで働き詰めだったから疲れた!!　私は今日は休む!!』と言って家で爆睡している。

……いい大人なのに、あの責任感の無さはある意味凄いと思う。

そんなこんなで、俺は1人配送の為に馬車を進めてここに来たという訳だ。現代なら車でパパっと来れて楽なんだけどな。

「無い物ねだりをしても仕方ないか。とりあえず城に行って仕事を終わらせてから、適当な店で昼飯食おう」

この後の予定を何となく立てて、馬車を城に進める俺だった。

「それでは、こちらで少々お待ち下さい」
「分かりました」

城の衛兵に名乗り、品物を渡した後、俺は侍女の案内で城内の謁見の間に案内されていた。

何回も城に入った事はあるので、衛兵や侍女の顔見知りが、すれ違う度に挨拶してくれるのは嬉しかったな。

それはさておき、案内してくれた侍女が退出すると、俺は謁見の間に1人取り残される事になった。……この広い空間に1人ってのは寂しいぜ。

そんな風に地味な寂しさを感じていると

「姜維ー！！　久し振りやーん！！」

「うわっ！？」

見事にそれは吹き飛ばされた。

具体的には大声と共に抱きついてきた人物によって。

古代中国では有り得ない関西弁、背中に押しつけられている大きくて柔らかい2つの膨らみ、そして若干の酒臭さ……これらの情報を分析すると、こんな事をする人間は1人しか居ない！　謎は全て解けた！

「お久し振りです。張遼将軍」

「敬語なんて嫌やわ。ウチらの仲やろ？　いつも通りの喋り方でええって♪」

予想通り、飛びついて来たのは胸にさらしを巻いた袴姿の女性だった。

俺の胸にしだれ掛かってくるこの人こそ、泣く子も黙る張遼である。

……つうかマジで酒臭い。よく見れば顔も少し赤い。もう酔ってんなこの人。

「はあ、こんな真っ昼間から酒飲んでていいの？」

「別に構へんて♪ウチ午後からは休みやさかい、飲もうが飲むまいがウチの自由や。そないな事より、姜維は何で城におるんや？　もしかしてウチに会いに来てくれたんか！？」

「違うよ。今日は仕事で来たんだ」

満面の笑みで問いかけてくれる張遼には悪いが、正直に答える。

「なーんや……ウチと手合わせする為に来てくれたんと違うんや」

ああ！？　見る見るうちに笑顔が消えていく！　罪悪感がハンパないぞ！？

「い、いやいや手合わせするなら俺じゃなくても呂布とか華雄さんとか居るでしょ！？　相手に取って不足なしだと思うんだけど？」

「いっつも同じ相手やとつまらへんもん。それに、ウチ男に負けたん初めてやったし……今度は負けんように鍛錬したんやけどな」

寂しそうにそう呟く張遼。

正直言って、前回勝った事は俺が1番驚いた。周りで見ていた人達も一様に目を見開いていたけどな。

だけど、負けた側としては納得いかないみたいだ。

「ウチは全力で戦って負けたんや。せやから、次は絶対に勝とう思ってたんやけど……姜維はもう戦ってくれへんのやな……」

「そんな訳じゃ……また今度ね？　ね？」

「……」

いくら宥めても全く効果がない。むしろ尚更うなだれていく。

……仕方ない。

男なら、目の前で落ち込んでいる美少女を見捨てる事が出来るか！？

否！！　そんな者、男に非ず！！

「分かった！！　俺の仕事が終わったら、思う存分手合わせしようじゃないか！！」

「……姜ー維ー♪　姜維のそういうホンマ優しい所、ウチ大好きやで！！」

ヤケクソ気味に意志を伝えると、再び満面の笑みを浮かべて俺の頭を抱き抱える。

しかし、そうなると当然……

「苦しいって！　ていうか、む、胸！　顔に当たってるから！？」

「当ててんのや♪　遠慮せんでええで？」

「遠慮とかじゃなく！　本当にちょっと離してくれー！」

必死の願いが通じたのか、渋々離れていく張遼。

た、助かった。胸に挟まれて窒息死なんて恥ずかしすぎる。

酸素の大切さを改めて感じていると、服の袖を軽く引っ張られているのに気が付く。

もしかして

「……恋も戦う」

『呂布（恋）！？』

「ねねも居るのですぞ！」

そこに居たのは、赤髪で無表情の女の子《飛将軍》呂布と、呂布を敬愛する小柄の女の子で軍師の陳宮だった。

「いつの間に！？」

「……姜維が霞にギュッてされてたとこから」

「恋殿ある所にねねはありなのです」

「全く気付かへんかった……」

愕然とする俺と張遼。さすが《飛将軍》だ。

ちなみに、さっき呂布達がお互いの事を姓名とも字とも違う呼び方をしたが、それは真名という呼び名だ。

真名とはその人を表す神聖な名で、本人が認めた人物や親しい人間しか呼ぶ事を許されない大切なものだ。もしそれ以外の人間が許可なく真名を呼ぼうものなら、その場で首を斬られてもおかしくない位重要な名前なのである。

俺にも真名はあるがその辺は置いておこう。

「ええと、呂布？　戦うっていうのは？」

「……？恋も姜維と手合わせする」

俺の質問に不思議そうに首を傾げながら答える呂布。畜生！　可愛いじゃないか！

「ええやないか姜維。相手してやりいな」

「恋殿たっての希望なのです！　姜維、覚悟を決めて戦うのです」

「けど、呂布と手合わせってのは」

「……」

ああ！？　呂布が見る見るうちに落ち込んでいく！？

無表情なのに目だけはドンドン落ち込んでいくという器用な事をやってのける呂布。

……仕方ない。

男なら、目の前で（以下略）！！

「分かった！　張遼と手合わせしたあと、呂布と手合わせしよう！」

「……！！」

これまた無表情なのに、目だけを輝かせる呂布。ヤダ何この生き物、超可愛い！

「……姜維死んだな」

「せめて骨ぐらいは拾ってやるのです」

張遼と陳宮がヒソヒソ小声で何か話し合ってるけど、そんなの知るか！！　呂布を愛でる方が最優先だ！

「さっきから騒がしいと思ったら、全員揃ってたのね」

「ふふ、皆楽しそうだね。詠ちゃん」

「姜維！　私とも戦え！」

俺達が騒いでいると、そんな風に声を掛けられる。

視線を向けてみると、優しそうでおっとりした雰囲気の女の子を中心に、眼鏡を掛けた女の子と銀髪の女性が立っていた。

真ん中の子が天水太守の董卓で、眼鏡の子が軍師の賈駆、銀髪の女性が華雄である。

「ほらアンタ達、月が姜維に話があるって言うんだから少し大人しくしてなさい」

賈駆の一言で場の緩んでいた空気が引き締まる。さすが董卓軍の肝っ玉母さんだ。

「……姜維、今妙な事を考えなかった？」

「イイエ、マッタクナニモ」

何故バレる！？　曹操を史実で追い詰めた知略は伊達ではないということか！？

「まあ良いわ。今日は月……董卓から大切な話があるから真剣に聞

いて頂戴」
「分かりました」

どうやら茶化していい雰囲気じゃないな。改めて気を引き締め、董卓様の顔を見る。

向こうもこれまでに見た事がない位、真剣な顔つきだった。

「姜維さん、今回もわざわざ城まで配送して頂き、ありがとうございました」

しかし、真剣な表情から放たれた言葉は予想外のものだった。まさかお礼を言うだけで緊張していた訳じゃないよな？

「いえ、お礼を言うのはこちらの方です。片田舎の一鍛冶屋に過ぎない我々親子にいつも注文を下さるんです。その信頼に対して、こちらも我々なりの誠意で応えただけの事。大した事ではございません」

不思議に思いながらも、俺も真剣に言葉を返す。すると、董卓様も少し微笑みながら答えてくれた。

「そう言って下さると嬉しいです。それで本題なんですけど……」

董卓様は少し言いづらそうにしながらも、一度息を吸い再び口を開く。

「姜維さん、貴方の力を私に貸して欲しいんです」

『へ？』

意を決して発せられた、余りに予想外の言葉に俺だけでなく張遼や華雄、陳宮からも気の抜けた言葉が漏れる。

……これはつまり

「ええと、まだ少し混乱しているんですが仕官のお誘いって事ですか？」

「そうです。姜維さんの武と智を私に貸して下さいませんか？」

俺の目をしっかり見て紡がれる真摯な言葉。本気でスカウトしてくれているみたいだ。

「随分と突然なんですけど、理由を聞いても構いませんか？」

「はい。姜維さんもご存知かも知れませんが、最近大陸の各地で暴動が発生しているんです」

「母から聞きました。特に青州や幽州の方で被害が酷く、洛陽やその近辺でもチラホラ見受けられるようになってきたとか」

母から聞いた話を思い出す。確証はないけれど、ここが三国志の世界と言うことを考えると、この暴動が広まって《黄巾の乱》に繋がるんだろう。

すると今まで黙っていた2人の軍師が口を開いた。

「ええ。幸い涼州や益州、それと荊州なんかは今の所被害は無いけれどね」

「涼州では西涼の馬騰と月が善政を布いているのですし、益州は治めている劉璋が暗愚なれど中央から離れているので無事なのでしょう。荊州の劉表は良い評判はあまり聞きませんが、それなりの政は行っていると耳にするのです」

軍師達に続いて将軍達も口を開く。

「こうやって考えてみると、暴動が何処で起きてもおかしくないんやなあ」

「ふん。董卓様の治める土地で暴れる連中が出たならば、そんな連中全てまとめて私が叩き潰してくれる」

「……恋も頑張る」

何つうか、軍師組とは違って血の気が多いな。予想通りっちゃ予想通りだけど。

「霞の言うとおり、この大陸で暴動が起こらないと断言出来る場所は存在しないと言ってもいいわ。もしかしたら、この天水でも発生するかもしれない。今の平和な日常を守る為にも、少しでも多くの優秀な人材がボク達には必要なの」

「確かに、姜維の発想通りに町の警備隊の詰め所を配備した結果、警邏隊の負担も少なくなり効率が良くなったと報告がありますし、治安も更に安定したのです。悔しいですが、ねねや詠にはない発想力がありますし頭脳も悪くない……文官としても十分に働ける能力はあると思うのです」

「せやなあ。恋には適わないとはいえ、ウチや華雄と互角に戦える武も持っとるし、戦いぶりを見る限り冷静な判断も出来そうや。良い将になれると思うで」

武芸に関してはこの世界で身に付けた力だから褒められて悪い気はしないけど、警備の改善案に関しては前世の知識を活用した提案だから褒められても複雑だ。

「……恋も姜維が一緒なら嬉しい」

「私としても良い鍛錬相手になりそうだからな。董卓様の役に立ちそうだし、仕えるというなら構わんぞ」

俺が仕官する事に皆賛成みたいだな。

だけど正直言って、俺は誰かに仕える事にあまり乗り気はしない。

俺が姜維伯約として転生して前世の知識と母に鍛えられた武がある以上、誰かに仕えればそれなりに功績は立てられるだろう。

だが、元は現代で普通の学生だった俺に、戦場で人を殺める事や味方部隊を指揮する覚悟もない。文官として仕えたとしても民の生活を左右する立場になるならば、そんな責任を背負えるとも思えない。

何よりも一度失った命だが、もう一度生きるチャンスを得たんだ。天寿を全うするまでは静かに生きたい。

その望みを叶える為なら、今ここで誘いを断るべきだ。

……だけどそれでいいのか？

「もちろん無理にとは言いません。今まで親子2人で平和に暮らしてきた姜維さんを、命を落とすかもしれない戦場に誘う上、沢山の重荷を背負わそうとしているんです。この誘いが私の我が儘だという事も理解しています」

「そんな事は」

「ないとは言えません。それでも、私は私を太守として認めてくれている民の為に、私を主として仕えてくれる仲間の皆さんのために、姜維さんの力を貸して欲しいんです」

目の前の少女の民を想い、仲間を想う真摯な願いを拒絶してまで、自分を優先するのか？

目の前の少女の命を奪う為に、将来大規模な連合軍が結成されるのを知っていながら見過ごすのか？

……そんなの情けなさすぎるだろ。

俺の武が誰かを守れるなら、俺は守りたい。

俺の智が誰かを支えれるなら、俺は支えたい。

俺の記憶が少女を過酷な運命から救えるなら、俺は救いたい。

だったら答えは１つだ。

「分かりました。どこまで役に立てるかは分かりませんが、力の限りを尽くします」

「…！　ありがとうございます！」

俺の意思を伝えると、途端に眩しい位の笑みを見せてくれる。

何かもうこの笑顔だけで、小難しい理屈抜きに仕えたいって思っちまうな。

俺の返答に安心したのか、周りの皆も力が抜けたみたいだ。

「ふうー、良い返事で安心したわ。早速これからの扱いを考えなくちゃ。武官として使ってもいいけど、まずは武の実力を兵に見せな

くちゃね、でも文官も足りないしそっちが優先かも。うーん……」
「いよっしゃあ！　これで正式にウチらの仲間やな！　これからよろしくな！」
「良い鍛錬相手が増えたな。負けぬように明日からの鍛錬を増やさねば」
「……姜維、ずっと一緒」
「恋殿！？　その言い方はあらぬ誤解を招きますぞー！？……ぐぬぬ、姜維！！　仲間としては認めるですが恋殿に手を出したら許しませんぞ！！」
「……は、はは」

皆、思い思いの表現で喜んでくれる。

喜んでくれるのは嬉しいけど、もしかしたら自分で寿命を縮めたかもしれない。

過労で死ぬかもな。

「姜維さん、貴方に私の真名を預かって貰いたいんですけど構いませんか？」
「え？　構いませんが、良いんですか？」
「はい。これからは仲間ですから」

董卓様が笑顔のまま提案をする。

やけにアッサリしてるけど本人がいいならそれでいいんだろう。

賈駆や皆も預けてくれるみたいだ。

「私の真名は月です。これからよろしくお願いしますね」

「ボクは詠よ。仕えて早々で悪いけど、馬車馬のように働いてもらうから覚悟しておきなさい」
「……恋は恋」
「ねねは音々音なのです。ねねで構わないのです」
「ウチは霞や。改めてよろしくな！」
「悪いが私には真名がないのだ。預けられなくて申し訳ないが……」
「気にしないでください、華雄さん。皆さんも俺の真名を受け取って下さい」

俺は臣下の礼をとり、真名を預けられた礼儀として俺も真名を預ける。

前世の両親から名付けられた過去の俺の大切な名前、そして今の両親から貰った大切な真名を。

「姓は姜、名は維、字は伯約、真名は新（あらた）。これよりは月様の家臣として、我が身を存分にお使い下さい」

こうして、俺は将として生きる道を選んだ。

新たな生き方（後書き）

会話をここまで書いたのは初めてなので疲れました。

誤字脱字、原作キャラの喋り方がおかしい箇所があればご指摘下さい。マッハで修正します（笑）

とりあえず、文章がグダグダ長くなってしまいました。

展開が急な所はホントに急だし…次は読みやすい文章構成を心がけますので今回はご容赦を…

愛槍と愛馬

将として月様に仕えると決めた当日、俺は生まれ育った村に向けて馬車を進めていた。

真名を交換し合った後、母や村の人達にしっかりと挨拶をしてから将として働きたいと提案してみた所、２つ返事で許可を貰えたからだ。オマケに１週間の長期間で。

手合わせ？　もちろんしっかりしましたよ？

霞と最初に戦って相変わらずの攻撃の速さに舌を巻き、華雄さんと戦って一撃の重さに手を痺れさせ、恋と戦って宙を舞った。

あれ？　思い出したら視界が滲むぞ？

「……うん！　俺は強い子負けない子！　これは涙なんかじゃないよ？　目から汗が出てるだけさ！！　だから別に辛くなんて……ぅぅ……グス……怖かった……死ぬかと思った……」

テンションを上げる事に見事に失敗した。

「そうだ、村に帰ろう。優しい皆に会って平和に暮らそう。もう手合わせ地獄がない世界で生きていこう。うん、それがいい……アハハ……ハハ」

静かに、だが確実に俺はぶっ壊れていった。

俺を慰めるように小さく鳴いた馬の鳴き声を聞きながら……

「いつまでも壊れていられないな。ちゃんと事情を説明しよう」

村に到着した俺は村人達への帰宅の挨拶もそこそこに、我が家の前に立っていた。

生みの親であり唯一の家族に別れを告げる為に。

「只今戻りました」

「遅い！」

いつもより丁寧な口調で帰宅を告げた俺に向けられたのは、いつも通りの母の怒声だった。

「どれだけ私を空腹に耐えさせれば気が済むんだ！！　もう夕餉の時間だぞ！？　いくら何でも時間かかり過ぎだろうが！！」

「ごめん。皆と手合わせをしていたもんで」
「それでもだ！　あんなヒヨッコ共、瞬殺してみせんか！」

そんな真似が出来るのは貴女だけです。

「夕餉の支度はすぐにするから置いておいて。母上にかなり大事な話があるんだ」
「？　何だ、言ってみろ」

意を決して話を切り出す。

「実は……月様、董卓様に仕官する事にした」
「そうか、頑張れ」
「もちろん反対される事は分かってる。それでも……って、へ？」

なんか聞き逃してしまったが……今なんて？

「あの母上、今なんと？」
「そうか、頑張れ」

律儀に2度繰り返してくれる母上。……アッサリし過ぎじゃない？

「反対とかしないの？」
「おう。お前が自分で考えて自分で決めたんだろう？」
「うん、俺の意思で決めた」
「なら反対する理由がないさ」
「……そうですか」

何か拍子抜けだけど、まあいいのかな？

「それにお前はこの私が直々に鍛えてやったんだ。頭の回転も早い方だし、目を掛けない方がおかしいだろ？」
「……ソウデスネ」
どうも全部本気で言ってるっぽいな。
俺の決意を返せ！！
「なら話はここまでだ。早く飯を出せ！　さもないと暴れるぞ？全力で」
「大至急用意しますので、それだけは勘弁してください！」
母の物騒な発言を聞きダッシュで調理場に向かう。
暴れた母を止めるのは俺には無理だ。
キレたケン◯ロウやカカ◯ットでも止められるかどうか……それぐらい暴れる母は恐ろしい存在なのだ。
俺は城での手合わせとは比べ物にならない程の恐怖と闘いながら、食事の支度を進めていった。

「……」

母の顔がどこか沈んだ表情なのに気付かないまま。

「う……朝か？」

窓から差し込む明るい日差しに顔を歪ませながら、俺は目を覚ました。

「あー、頭痛え……」

昨夜は俺の仕官が決まったという事をどこからか聞きつけた村人達が集まり、我が家を舞台に大宴会が始まってしまった。

周りを見れば、酔い潰れたまま眠り続けている村人達が転がって

いる。

俺も酒には相当強いはずだったが、さすがに潰れていたらしい。

兵どもが夢の跡か。

「ってアレ？　母上が居ない」

アホな事を考えていると酒を飲んだ次の日は必ず、自ら起きる事がない母の姿が見当たらない事に気付く。

「厠か？」

珍しい事もあるもんだ。

そんな呑気な事を考えていると

「うおお！？」

裏の物置の方から、母の叫び声が聞こえてきた！

「……！？　母上！！」

急いで立ち上がった俺は、壁に立て掛けてあった剣を掴むと物置に走っていった。

そこで俺が見たものは……

「何だこりゃ」

古ぼけた剣や鎧、昔俺が作った失敗作の作品に埋もれた母の姿だった。

なんて人騒がせな。

「母上？　何してんの？」

「あ？　新か。ちょっと手伝ってくれ。自力じゃ出れん」

「しっかりしてくれよ」

母の上の物を全てどかす。

すると、古ぼけた武具の山の中で割と新しめな槍を2本掴んだ母が現れた。

「その武具は？」

「これか？　これは私と槇(しん)が昔使ってた槍だ」

「母上と父上の！？」

槇というのは俺の父の真名だ。ちなみに母の真名は玲(れい)というらしい。

「おう。この村で生活するようになる前、私と槇が漢王朝の将軍だったのは昔話したろ？」

「うん、聞いた」

そう、俺の父も実は将軍だったらしい。母とは同僚で、お互いに武功を競い合っていたとか。

単純な武力だと母のボロ勝ちだったらしいけどな。

「私がお前を身ごもった時、2人でいつも話していたんだ。『将来、子供が成長して誰かに仕官する道を選んだなら、その時はお互いの武具を使って道を切り開く武器を作ろう』ってな」

「そんな約束が……」

生まれて初めて聞いた話だった。

衝撃を受けると同時に、俺の事を本当に大切に想ってくれていた亡き父、そして母に感謝の気持ちが沸いてきた。

「ありがとう、母上」

俺の全ての想いを込めた言葉を受け取った母は、一瞬キョトンとしていたが直ぐにいつもの表情に戻って

「なーに、親として当然の事さね」

と男前の笑みを浮かべた。

両親の意外な過去を聞いてから1週間。ちょうど今日が帰省期間の最終日である。

俺は大勢の村人に囲まれながら村の出口に立っていた。

皆別れを惜しんでくれているらしく、口々に「死ぬなよ！」とか「たまには顔を見せろ！」といった言葉をかけてくれる。

正直言って、心遣いに泣きそうになる。

だけど、皆も泣きそうになりながらも笑って見送ってくれるんだ。俺が泣く訳にはいかない。

だから、俺も笑って別れを済ませていく。

中には言葉だけじゃなく、贈り物をしてくれる人までいた。特に、近所の行商人をやっているオッチャンの贈り物には驚いた。

「本当に良いの？　こんな立派な馬を貰っちゃって」

「おうよ！　他でもないお前のためだ！　惜しくも何ともねえよ」
「ありがとう」

艶のある真っ黒な毛並みのキレイな馬をくれたのだ。

何回か乗ってみたが、その辺の馬より断然速いし体力も馬力も比べ物にならない位優れている。何よりも乗り手の言うことを良く聞いてくれる本当に賢い、まさに名馬なのだ。

これは感謝してもしきれないな。

「そういや新、その馬にもう名前は付けたのか？　せっかくの本場、西涼生まれの名馬なんだ。名無しは可哀想だぞ」
「うん、もう名前は付けてるよ。コイツの名前は黒王だ。宜しくな、黒王」

元ネタは世紀末覇者の愛馬さんです。

その名が気に入ったのか大きく鳴く黒王。

「おお。コイツも気に入ったみたいだな。まあ、馬に負けない立派な将軍になれよ」
「最後の最後にヒドいよオッチャンー」

俺とオッチャンのやり取りに笑いが起こる。

そんな風に、寂しくも明るい別れの時間を過ごしていると

「新ー！！　出来たぞー！！」

母上が大きな荷物を抱えながら、走ってこちらに向かってきた。

俺の武具が完成したみたいだ。

この1週間、母は飲まず食わずで武具の製作に励んでいた。俺も手伝おうとしたんだが最後まで手伝わせて貰えなかった。

つまり、俺もどんな武器になったのか知らないのだ。

みるみるうちに、母は俺の前まで来ると自慢気に笑って完成品を見せてくれた。

「どうだ!!　これ以上はない最高傑作の完成だ!!」

「おお…これは…」

俺だけでなく、周りの人達からも感嘆の声が上がる。

蜻〇切じゃねえか！！

マジでか！？

けど何で蜻〇切!?　しかもゲームの戦国〇双シリーズのデザインなの!?　せめて、そこは史実通りの普通の槍デザインにしとこうぜ!?　つうか何でゲームのデザイン知ってんの!?

俺が未だかつてない位パニクってると、それを感動していると勘違いしたのか

「うんうん、言葉も出ないだろう。私もここまで素晴らしい武器になるとは思わなかったね。急に閃いたんだが、私の閃きも馬鹿にできないな」

などとドヤ顔で言い放った。

俺の母親に電波流したの誰だー!?

信じられねえ。マジで何だよこの世界…

「ほれほれ、いつまでも惚けてないで素振りして見ろ」

混乱状態の俺を正気に戻したのは母のそんな一言だった。

……気にしたらダメだ。ここはそういう世界だと納得しなくちゃ。

気を取り直して、俺は蜻〇切を振るう。

突き、横薙、唐竹割り、袈裟切り…

一通り振るい終わると、俺は別の意味で惚けていた。

「凄い手に馴染む……」

「ふふん、そうだろそうだろ♪」

何年も使い続けた武器のようにシックリ来るのだ。

「ありがとう、母上」

こんな武器、恐らくこれから一生かけても巡り会えないだろう。

そんな武器を作ってくれた母に、再び心からの感謝を送る。

すると、母は一瞬頬を緩ませた後、真剣な表情になりこう言った。

「いいか新。お前が戦場に出てその槍を振るえば、多くの人間の命を奪う。そして、お前が殺した相手にも愛する人や家族が居るだろう」

「……」

「お前はそれだけの人間を不幸にするかもしれない。それは十分理解しているな？」

「……はい」

俺が武の修行をしている時、いつも言われていた言葉だ。

「その事を忘れるな。そして、命を奪った相手に対して後悔したり謝罪をするな。盗賊だろうと兵士だろうと、死んだ者を侮辱する事になる。人を殺すっていうのは殺した相手の命も背負って生きるという事なんだ」

「……肝に銘じます」

もしここが平和な現代なら、命を奪った事に対して謝罪でも後悔でもするだろう。

だけど、この戦乱の時代で仕官して生きるという事は、少なからず命を奪う覚悟をして生きる事を示す。相手を殺さなければ、自分が命を落とす状況もあり得る時代なのだから。そもそも人を殺す覚悟が無いのなら、仕官などするな。

そういう事を言いたいのだろう。

俺は今まで迷っていたが、その覚悟を決めた。あの時、月様に力を貸すと決めた時に。
そして、その道を死ぬまで歩くという事も。

「良い男の眼だ。さすが槇と私の息子だ。最後に1つ大事な教えがある」

そう言って母は俺を抱き締めた。

「な!?　母上!?」
「絶対に死ぬな。必ず生きてこの村に帰ってこい」

母の体は震えていた。それもそうだ。唯一の家族が命を落とす危険性がある戦場で生きる覚悟を決めたのだから。

ましてや、自分も戦場の厳しさを嫌という程知っているのだ。

だけど、俺は胸を張って抱きしめ返す。

「大丈夫、俺はそう簡単に死なないよ。なんてたって、父と母にいつも守られているんだから」

そう、俺にはかつて両親と共に戦場を駆け抜けた最強の槍がある。

「それに、頼りがいのある主君も仲間も一緒だからね」

「……そうだな」

震えが収まった母が身を放す。そこにはいつも通りの強い母がいた。

「よし！　なら行ってこい！　私よりもずっと強くなって必ず帰ってこいよ！」

満面の笑みの家族や村人達の顔を見ながら、俺も笑顔を見せる。

そして槍を黒王に括り付けると、俺も黒王に跨がる。

皆の方を振り向きながら旅立ちの言葉を言い放った。

「それじゃあ……行ってきます！！」

別れと再会を誓う言葉を残し、俺は天水の城に向けて黒王を走らせた。

愛槍と愛馬（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
相変わらずの駄文です。
多分改善はされないと思います（笑）
それでも構わんという心の広い人は応援して下されば嬉しいです。

ではまた次回

初陣

「行くぞ！　姜維！」
「いつでもどうぞ！　華雄さん！」

城の中庭で、俺と華雄さんは互いの得物を構えて睨み合う。

「ふっ！」

先に動いたのは華雄さん。

一息に距離を詰め、上段に構えた大斧を振り下ろす。

俺は蜻〇切改め、修羅（しゅら）の刃先で斧を受け流し、返す刃で薙払った。

しかしさすがは猛将華雄、慌てる事なく斧の柄で受け止めると直ぐに距離を取る。

その瞬間、修羅のリーチを生かして連続で突きを放つが全て受けきられる。

それればかりか、突きに怯む事なく逆に斬撃を仕掛け戦闘の流れを引き寄せようとしてきた。

だが、あの程度の刺突で倒せると考えていなかった俺も冷静に攻撃を見極め、袈裟切り、切り上げ、横薙の全てを捌く。

そのままお互いに得物を振るい、真っ向から打ち合う。

……このまま打ち合ってもなかなか勝負がつきそうにないな。

４０合程打ち合い、そう判断した俺は、華雄さんの攻撃を受け損なったように見せかけ、わざと体勢を崩す。

「もらったあ！！」

華雄さんは当然その隙を見逃さず、決着を付けようと斧を大上段から振るう。

だが俺はすかさず体勢を立て直し、修羅の刃先とその根本から延びている左右の刃の部分の僅かな隙間を利用して斧の柄を挟み、修羅を思いきり捻る。

「何！？」

この行動が予想外だったのか、斧を落としはしないものの華雄さんに大きな隙が生まれる。

当然、それを見逃すつもりはない。

「これで一本……ですね？」

「……ああ、参った」

華雄さんの首に修羅の先端を突きつけ、降参を促した俺は大きく息を吐く。

「ふうー、危なかった」

「むう、これで勝ち星はお互い五分か」

俺達は手合わせ十本勝負をしていたのだ。

俺が今一本取り戦績はちょうど五分五分だ。

「やっぱり華雄さんも強いですね！　ほとんど全力でやったんで、あわよくば勝ち越せるかも……なんて思ってたんですけど」

「私とて鍛錬を欠かしてはおらんからな。そう簡単に負けるつもりもないぞ」

俺も華雄さんも清々しい表情で会話をしている。

やっぱりお互いに全力を出し合ったからだろうな。

ちなみに今日と同じ方法で霞や恋と戦うと、相手が霞なら華雄さんと同じく五分五分くらいで、恋ならば3本取れれば良い方だろう。

……飛将軍マジ飛将軍。

いつか恋に勝てるくらい強くなりたいって思ってるけど、まだまだ先は長そうだ。

「よし姜維！　もう一度勝負だ！　次こそは私が勝つ！」

「あ～、すいません華雄さん。実はこの後に詠に呼ばれているんですよ」

俺が正式に月様に仕えはじめて数週間、武官と文官の二足のわらじの生活が続いていた。

初めは、俺のような新参者が政に口を出す事に難色を示したりする人も勿論居たが、最近は俺も認められたのか頼りにされる事が増

えた気がする。

皆には黙っているが、前世の知識を生かしながら月様に詠やねね、他の文官達と政策について頭を悩ませたり、恋や霞、華雄さんといった武官達と訓練に励む生活にも慣れた。

その毎日の中で、今日のように鍛錬の後に文官として働く事も珍しくはないのだ。

「そうなのか。つまらん」

「でも、そろそろ恋が調練を終えて戻ってくるだろう「呂布と試合をしよう！！」から……さいですか」

あっという間にハイテンションになり、元気に素振りを始める華雄さん。

……霞の言うとおり猪だなあ。

「じゃあ俺行ってきますね」

「ああ！！」

一言かけて、俺は詠が居るであろう執務室に向かった。

【執務室】

「姜維です」
「どうぞ」

入室の許可を得てから執務室に入る。

室内には月様と詠の他に、霞の姿もあった。

ねねは恋と一緒に調練をしているから不在なのは分かるが、霞が居るのは想像していなかった。

「霞も呼ばれてたの？」
「そうなんよ。詠に急に呼び出されてなあ」

てっきり文官の仕事で呼ばれたと思ってたけど、霞も呼ぶって事は違うのか？

「お二人を呼んだのには理由があるんです」

首を傾げる俺達に月様が話しかける。

「この天水の領地に野盗が出没したと報告がありました」
『！？』

野盗？　治安が良いこの天水で？

「といっても天水の民じゃないわ。どうやら益州から流れてきたみたいなのよ」
「益州からって、どういう事や？　詠」
「知っての通り、益州は劉璋が治めているわ。だけど、お世辞にも有能とはいえないみたいで、自身は酒や女にかまけて民達は苦しい生活を強いられているの」
「劉璋さんの家臣の中でも、心ある人達は何度も諫言してるらしいですけど、本人は全く取り合っていないみたいなんです」
「……酷い州牧もおるもんやな」

益州の現状を苦々しく話す2人に、霞も暗い顔で同意する。

「今回の野盗達も、元々は益州の民みたいなのよ。だけど、さすがに略奪行為を見かねた劉璋が軍を動かして」
「討伐されて追われ、治安の良いこの天水に流れてきたと。そういう事ですね？　詠」
「おそらくね。おまけに、放っておくとこの天水の民にまで被害が及ぶかも知れない」

頭で理解してはいたけれど、これがこの世界の常識なんだろうな。

……待てよ？　てことは俺と霞が呼ばれた理由は

「だから、最悪の事態を防ぐ為に霞と新で部隊を率いて討伐して欲しいの。新にも戦場を知ってもらわなきゃならないし」

やっぱりか。これが俺の初陣って事だな。

「もちろん、いきなり新に部隊を率いろなんて言わないわ。だから今回は霞を大将に副将として新を付けるつもりだったんだけど」

「ウチは構へんけど新、戦えるか？」
「うん。もう覚悟は決めてる」

人を殺すことになっても後悔しない。

そういう道を歩く覚悟を決めたからこそ、母から貰った鎗に修羅と名付けたのだから。

「俺は大丈夫です。だから月様、俺も出陣させて下さい」

そう言って俺は頭を下げる。

「……分かりました。霞さん、新さん。この天水の民を守る為に、部隊を率いて野盗を討伐して下さい」
『応！！』
「霞、いざという時は新を宜しくね。その為に華雄でも恋でもなくアンタを選んだんだから」
「任せとき！」

こうして、俺は前世を含め初の戦場に赴く事になった。

【天水近辺の街道】

「あ～確かにおるなあ。火を使うてるわ」
「そうだね。普通に考えて、あんな山の中であれだけ煙が上がるのはおかしいし、十中八九賊じゃないかな？」

俺と霞は、野盗が発見された街道沿いの山の近くへ進軍していた。

国境線の兵からの報告通りだ。

「このまま攻めても勝てるやろうけど、どうするかなあ。山で戦うと討ち漏らす可能性もあるし」
「出来るだけ逃がさないように決着は着けたいよね」

討ち漏らすと、近くの村が賊に襲われる可能性も出てくる。

その最悪の事態を避ける為にも、ここで全滅させるなり投降させるなりしたい。

何かしら作戦があった方がいいな。

「こんなのはどう？　まず兵を二手に分けるんだ。分けた部隊の１つを俺が率いて正面から攻める。多分、向こうもこっちの兵数が少ないと分かったら攻めてくる筈。そこで、賊が出てきた所を霞が伏兵として挟撃する」
「それなら何とかなるかも知れんけど、新が危険やで？　向こうの数を見る限りこっちと同数ぐらいやし、兵を分ける分だけ囮の隊に負担がかかる」
「大丈夫だと思うよ。こっちの兵は皆しっかり訓練を受けてるし弓もそれなりにある。賊が弓まで用意してるとは考えにくいし、何よ

り統率も取れてないだろうしね。初陣の俺に伏兵の指揮は無理だしさ」

「……う～ん」

霞は悩んでいたが、他に良い方法も浮かばなかったみたいだ。

「仕方ないな、それで行こ。その代わりに新、死ぬんやないで」

「うん。俺も皆ともう会えなくなるなんて嫌だしね」

俺が少し笑って見せると、安心したのか霞も部隊を分けて兵を伏せに行った。

……霞が居なくなった途端、戦場の空気と恐怖で体が震える。

偉そうにあれだけ言っておいて情けないな。

「っと。大丈夫だよ、黒王」

俺が未知の不安と恐怖に呑まれかけていると、励ますかのように黒王が鳴く。コイツだって初陣だろうに、主人想いだな。

そうだ、俺は将の道を生きると決めた。董卓軍の皆の為に。

だったら、ここで臆しちゃいられない。

俺は後ろの兵士達に向き直った。

「皆、聞いてくれ！！」

これまでに体験した事のない人数に注目される。

「俺は戦場で戦うのは初めてだ！　命を奪った経験だって無い！　こんな新米が副将で不安に思う人もいるだろう！　それでも、俺にも皆と同じく守りたい人達が居る！　その人達の為に必死で戦おう！　だから、皆も俺の為ではなく、皆の守りたい人達の為に力を振るってくれ！！」

気後れを感じながらも、必死で声を張り上げる。

皆の心に少しでも届くように。

『オオー！！』

兵の雄叫びを聞き指示を出す。

「前進！！」

野盗の集団の前に隊列を組ませる。弓兵隊を先頭に、すぐ後ろに歩兵隊という布陣だ。

案の定、野盗達は兵の数を見て与し易しと思ったのか、山から打って出てきた。

殺気立った人間の集団に恐怖を感じるが、歯を食いしばって耐え、攻撃の指示を出す。

「弓隊構え！！……撃てー！！」

号令の下、何百という弓矢が飛び、賊の群れに矢の雨が降る。

賊は一瞬怯んだ様子だが、それでも尚剣を構え突っ込んでくる。

目の前で大勢の人間が死に、吐きそうになるが必死に堪えて愛鎗の修羅を構える。

「歩兵隊前へ！　全隊抜刀!!!　突撃!!」

両軍がぶつかり合う。

黒王と共に俺も自らの命を守る為、修羅を振るう。

相手の剣が届く前に修羅を突き出し、薙払い、命を奪っていく。

賊を貫く度に肉を裂く感触が、賊を吹き飛ばす度に骨を砕く感触が伝わる。

それを堪えて更に相手の腹を突き、喉を切り裂き、敵を屠る。

両親の想いが込められた鎗が返り血で染まっていく。

それでも俺は戦い続ける。

黒王の馬上から鎗を振るい、近づく敵の首を斬り飛ばす。

……どれだけの命を奪ったか数えきれなくなった時、

「行っくでー!!　張遼隊、突撃や!!」

右翼から霞の隊が現れ、賊を蹂躙していく。

圧倒的な強さで敵を斬り伏せる霞と急に現れた伏兵に混乱し、勢いを失っていく野盗達。

チャンスとばかりに声を上げ、更に勢いよく鎗を振り回す。

「この好機を逃すな！　全軍奮起せよ！」

猛然と賊に斬りかかる兵士達。

とうとう野盗達は戦線を支えられなくなり、降伏するものが現れ始めた。

「よっしゃぁ、この戦いウチらの勝ちや！！
勝ち鬨をあげろー！！」

勝利を喜ぶ兵士達。

だが俺の心は沈んでいた。

この戦いは俺達の大勝利だった。

殆どの賊が降伏するか討ち取られ、逃げ延びた者は皆無だろう。

だが、こちらにも被害がなかった訳ではなかった。

霞の部隊に比べて、俺が率いた部隊の方がやはり死傷者が多かっ

た。

……覚悟していたとは言え、自分の立てた策で人が死ぬのはキツいな。

死んだ兵士達にも家族がいて、悲しむ人がいると思うと挫けそうになる。

「大丈夫か？　新」

「霞……」

俺が自分の手を見つめていると、その手を優しく包んでくれたのは霞の手だった。

「良く最後まで頑張ったな……大したもんやで」

「……俺さ、人を殺す覚悟はしっかり決めていたから何とか耐えられたんだ。人を貫いたり、斬った瞬間は吐きそうだったし、まだその感触が残ってるけどね。でも、自分が選んだ道だから後悔はしない。奪った命を侮辱する事になるから」

霞は手を包みながら黙って聞いてくれる。

「だけど、自分の策で味方が死ぬ事だけは耐えられないかも知れない。もっと良い方法があったんじゃないか、もっと俺が敵を倒してれば死者は少なかったんじゃないか、ってそればっかり考えてる」

「……新は良くやったで。初陣なのに策を立てて、人を殺す重さにもちゃんと耐えて」

俺の手をさすりながら霞は言う。

「新の策のお陰で死者をここまで抑えれたんやで？　普通に戦っとったら、もっと沢山死んどったわ。せやから、1人で気に病む必要は無い。死んだ連中かて、死ぬ覚悟を決めて兵士になったヤツらや。新を怨んだりせえへんよ」

俺の目を見て、優しく微笑みながら霞は言葉を続ける。

「ウチらは神様でも何でもない。死んだ人間を生き返らすなんて出来ん。せやから、死なない為に訓練するんや」

「……」

「生き残った人にしか出来ん事。それは、同じ理想の為に戦って死んだ人間を誇りに思いながら前に進む事や。せやないと死んだ人間も浮かばれんで？」

「霞……」

霞の言葉で少し心が軽くなった気がする。

「ありがとな霞」

「……！！　ズルいわ、この流れでそんな笑顔何も言えへんやん……」

「どうしたの？」

「な、何でもないわ！！　さ、弔いの準備したら隊をまとめて帰るで！」

「……？　うん」

顔が赤いけど、本人が何でもないっていうなら心配ないか。

生き残った者がすべき事。何となくだけど分かった気がする。

俺に取って初めての戦闘は、沢山の考える事を俺に残した。自分

なりの答え、早く見つけなくちゃな。

こうして、俺は将としての第1歩を本当の意味で歩み始めた。

初陣（後書き）

初の戦闘シーンです。
書くのなかなか大変ですね。
上手い人を尊敬します。

色々と突っ込み所満載ですが、楽しんで頂けたなら嬉しいです。
とりあえず演説の件とか霞の件とか支離滅裂の文章になった事はご勘弁下さい。
頭が働かなかったんです（笑）

天然チャームはご愛嬌って事でｗｗ

誤字脱字があればご一報を。

平和な日常

「それじゃあこの辺で一息入れましょうか」

詠の一言で執務室に張り詰めていた空気が一気に弛緩する。

俺も朝食を食べて以来、ずっと座りっぱなしで政務を手伝っていたから結構疲れたな。

「では、各自昼食を取ったら午後からまたお願いしますね」

月様の言葉に各々返事をしながら文官達がゾロゾロと部屋を出ていく。

俺も昼飯を食べに行くか。けど1人ってのも味気ない。

「ねね、恋も誘って一緒に町に食べに行かないか？」

「恋殿が行くのならば、ねねも当然行くのです！　たまには新も気の利いた事を言うのですな」

「たまにで悪かったな！」

サラッと馬鹿にされたので、仕返しに帽子ごとねねの頭を撫で回す。

「子供扱いするなです～！」

「ハッハッハッ！」

案の定、目をつり上げ両手を振り上げて怒りを全身で表すが、可愛らしい印象しかうけない。

どう見ても子供だ。

間違っても本人には言えないけど。

「どう見ても子供じゃない」

……言いよった……こやつ言いよったで。

俺でさえ口にしなかったのに、躊躇いなく言い切りやがった！

「な、ななな何ですと～！？　え、詠だって体格だけ見たら子供ではありませんか～！」

「何ですって！？　もう一回言ってみなさいよ！」

「詠も子供なのです！」

「本当に言ったわね！　許さないわよ！　ねね！」

そう言って執務室を飛び出していく2人。

何というか…

「どっちも子供だなぁ」

「その台詞、2人の前で言っちゃダメですよ新さん」

思わず出た呟きに、微笑みながら応えてくれる月様。

……癒しだ。

「どうしたんですか？」

「はっ！？　いえいえ何でもないですよ！」

しまった！　余りの可愛らしさに思わずトリップしてしまった。

「ええと、もし宜しければ月様もご一緒にどうですか？」
「そうですね。新さん達が宜しければ私も一緒に行きたいです」
「大歓迎です。なら詠も誘って皆で行きましょう」
「はい」

俺と月様は笑い合いながら2人の後をのんびり追った。

「どうしてこうなった」

俺は昼食を食べに入った店で頭を抱えていた。

執務室を出たあと、中庭でいつものように鍛錬していた霞と華雄さん、家族の動物達に囲まれて昼寝をしていた恋を誘い、未だに追いかけっこをしていた詠とねねを宥めて、俺と月様を合わせた7人で町に出掛けた。

恋の食べっぷりにほわ～っとしたり、華雄さんや霞と武について語り合ったり、月様と料理について話したり、詠とねねをからかって痛い目を見たり、楽しく食事をしたさ。

そこまでは良かったんだ、そこまでは。

問題はその先だ。

「何で俺と月様以外、金を持ってきてないんだよ！？」

そう、7人中5人が財布を持たずに食事をしてたのだ。

恋が、見た目からは想像も出来ないくらい大食いだって事は知ってたから多めに金を持ってきてたけど、どう考えても足りない。

「金を持ったまま鍛錬など出来るか！」

「開き直らないで下さいよ華雄さん！」

「酒代に使いすぎて金ないんよ」

「霞は少し自重しろ！」
「……？」
「恋、まず両手の肉まんを降ろそうか」
「悪かったって言ってるでしょ！？」
「何で俺が詠に怒られてるんですか！？」
「……先日恋殿の食事代を支払ってから、ねねは無一文なのです…
…」
「いや、何かごめんな？　ねね」
最後に可哀想な子がいたが、皆反省の色がない。
「あ、新さん……どうしましょう？」
月様も困り果てている。
領地を治めてる太守とその部下の軍師、将軍が無銭飲食で逮捕な
んて笑えないにもほどがある。
「うわ、めっちゃ良い笑顔でおばちゃんがこっち見とるで」
霞の言う方を見ると
「……《ニッコリ》」
もの凄く怖い笑顔でこっち見てた！！　超怖えよ！！
……俺が何とかしなきゃ。
「月様。確か月様と詠は午後も政務ですよね？」
「はい、そうです」

「詠。俺は午後の政務の予定って元々入ってないですよね？」
「ええ。アンタは午後から非番の筈よ」
「ねねは恋と一緒に調練だよね？」
「そうですぞ」
「……恋もお仕事」
「華雄さんと霞の予定は？」
「私達は城外で模擬戦だ」
「せやねん」

午後から暇なのは俺だけか。

「なら皆は城に戻って下さい」
「新はどうするんや？」
「俺は、ここで殿を務める」
「アカン！　新だけ置いていくなんてウチには出来ん！　ウチも残る！」
「ダメだ！　これは……俺がやらなきゃならない事なんだ！」
「新……」
「だから……行くんだ、霞！」
「新～～！！」

「それで？　結局どうするのだ？」
「何や～ノリ悪いで華雄」

俺と霞の即席コントはウケなかった。少しお笑いも勉強しよう。

「新さん、どうするんですか？」
「とりあえず皆仕事があるんですよね？　仕方ないんで、俺が体で

払っときます」
『な!?』

あれ?変な事言ったか?
恋以外の皆が真っ赤になってるけど

「へぅ〜」

……ヤバい。月様超萌える。

顔真っ赤にして頬に両手を当てて『へぅ〜』は反則だろう!
そんな事を考えていると、詠とねねが凄い剣幕で詰め寄って来た。

「ア、アアアンタ何言ってんのよ!?」
「こ、こんな昼間から何言ってやがるのですか!?」
「ええ!?　何が!?」

そんなに真っ赤に怒るほどの事言った覚えはないぞ!?

「新、それはアカン。どうせなら相手はウチが……」
「待て張遼!　それは聞き捨てならんぞ!」

霞と華雄さんも何か話し合ってるし……どうしたんだ?

「俺だけ残って皿洗いとか店の仕事を手伝ってそれで勘弁してもらおうと思ったんだけど、ダメでした?」
『……』

俺が自分の考えを述べた途端、一瞬の空白。

そして一様に溜め息。

本当に何なんだ？

「恋、皆どうしたのか分かる？」

「……分からない」

「だよね」

俺と恋が不思議に思っていると、ようやく皆が口を開く。

「それならそうと言いなさいよ」

「へぅ～……驚きました」

「紛らわしいヤツなのです……」

「何やそういう事かいな……」

「人騒がせな……」

一気に疲れきった表情になってるな。

「仕方ないわね。手持ちじゃ全然足りないみたいだし、ただ働きで許して貰えるか分からないけど、まず店主に話をしてきなさい」

「分かりました」

いち早く気を取り直した詠の言葉に従い、店主さんに許可をもらいにいく。

交渉は難航するかと思ったけど、すんなり許可はもらえた。

優しい店主さんで良かった。

「今日一日店を手伝えば勘弁してくれるらしいです。俺が残るんで月様達は先に城に戻っていて下さい」
「でも……」
「元々皆を誘ったのは俺ですしね。それに家事は結構得意なんで大丈夫ですよ」

月様は完全に納得している訳じゃなさそうだったが、それでも妥協してくれたみたいだ。

「分かりました。お詫びとお礼はちゃんとしますね」
「気にしないで下さい。文官さん達もそろそろ集まる頃でしょうし、早く城に戻った方が良いですよ」
「はい。それではまた後で」
「その、悪かったわね新」
「そこまで気にしてないんで大丈夫です。詠も午後の政務頑張って下さいね」

月様も詠も、申し訳そうにしながら店を出ていった。

「ウチらも模擬戦の準備せなあかんから行くな。スマンかった新。今度ウチ一押しの酒奢るから堪忍してや」
「お前は酒代を抑える方がよほど良いと思うがな。姜維、スマン」
「楽しみにしとくよ霞。華雄さんも模擬戦頑張って下さい」

霞と華雄さんも出ていった。

霞は酒代マジで抑えてくれ。華雄さんは財布を持ち歩く習慣を身に付けましょう。

それはともかく、あとは恋とねねだけだな。

「……新」

「ん？　どうしたの、恋？」

「……恋も残る」

「え！？　ダメだよ。調練あるんでしょ？」

「ねねがやるから大丈夫。……恋が沢山食べたからお金払えなかった。だから恋も残って新のお手伝いする」

「気持ちだけ受け取っておくよ。だから恋は仕事しておいで。それに俺は恋が美味しそうに食事してるのを見るの、結構好きなんだ。また今度一緒に食事しような」

「……ん。分かった」

「ねねも調練頑張ってな」

「はいなのです。新もサボらずに手伝い頑張るのですぞ」

最後に残った2人を見送る。ねね、貯金始めた方が良いと思うぞ。

それじゃあ皆を見送った事だし、俺も手伝い始めるか。

「やぁぁってやるぜ！！」

気合いの雄叫びと共に、俺は猛烈な勢いで皿を洗っていった。

「疲れた……さすがにキツかった」

俺がただ働きから解放された時、周りはすっかり夜の帳に包まれていた。

「腹減ったけどこんな時間だし、今日はもう寝よう」

空きっ腹はしんどいが、疲労感には勝てず自室に向かおうとした所で

「おお、姜維。戻ってきていたか」

「どうしたんですか？　華雄さん」

華雄さんとバッタリ出くわした。

「賈駆がそろそろお前が戻ってくる頃だろうから連れて来いと言ってな」

「俺をですか？　何の用事だろう」

心当たりが全くない。何かやらかしたかな？

「まあ着いてくれば分かる。ひとまず食堂に行くぞ」

「はあ」

華雄さんに腕を取られ、半ば引きずられるように食堂へ向かう。

そこで俺が見たのは予想外の光景だった。

「うわ凄い……どうしたんですか？　この料理」

テーブルの上に所狭しと並べられた料理の数々。

ヤバいどれも超うまそうだ。

「新さんに食べて欲しくて作ったんです。今日ご迷惑をかけてしまったので……」

「気にしなくて良かったのに」

て言うか月様が全部作ったのか？　凄いな。

「なら、私達からの感謝の気持ちとして受け取って下さい」

「……ズルいですよ。そういう言い方は……」

そんな言い方をされたら受け取らざるを得ない。

まあ、ここまでされて嬉しくない訳がない。

「分かりました、ありがたく頂戴します。正直夕餉を食べてなかったんで、かなり腹減ってたんですよね」
「ふふん、ボクの読み通り飲まず食わずで働かされたみたいね」
「そもそも、詠が財布を忘れなければ新が働く必要もなかったのです」
「ねね！　うるさい！」
「へぅ～、詠ちゃんもねねちゃんも喧嘩はダメだよ」

昼と同じ様に騒ぎ始める詠とねね。それを止めようと奮闘する月様。……ご苦労様です。

「まああの2人は放っといて、新。約束の酒や。一緒に飲もうな」
「……料理も冷める」
「うむ。せっかくの董卓様の手料理だ。早く頂くがいい」
「そうですね。けど流石に1人でこの量は食べきれないんで、皆も少し手伝ってくれませんか？」

将軍組に勧められ、料理に手を付ける。

恋達も食べてみたかったらしく、俺の許可を得て思い思いに食べ始める。

「あっ！？　何で恋達まで月の手料理を食べ始めてるのよ！？」
「ズルいのです恋殿！　ねねも食べたいのです！」

俺達に気付いた軍師組が更に騒ぎ出す。

本当に子供だなあ。

「ちょっと張り切って作りすぎたみたいですね。ごめんなさい新さ

ん」
「いえいえ、それだけ気持ちが籠もってたって事ですよね？　素直に嬉しいです。ありがとうございます」
「へぅ～」
俺も感謝の気持ちを素直に伝える。
照れてるのか、再び真っ赤になる月様。
……鎮まれ！　俺の右腕！　いくら撫でたくなるくらい可愛くても月様は主君なんだぞ！？　撫でちゃダメだ！　撫でちゃダメだ！
「え？」
しまったあああ！！　ついつい近くに居た詠の頭を撫でてしまったあああ！？
みるみる顔が赤くなっていく詠……これはマズい。相当怒ってるな。
「ち、違うんです詠。これは」
「何すんのよこの……変態～～！！」
「グハア！？」
見事なガゼルパンチを喰らいダウンする俺。
月様の心配する声、詠の罵倒、皆の爆笑を聞きながら薄れゆく意識の中、俺は思った。
……そんなに俺の事嫌いでしたか？

詠の予想以上の拒絶に軽く心が傷つきながら、俺は意識を手放した。

こんな風に騒がしくも楽しい日常がこれからも続くと、俺は信じていた。

だが、この日常はあっさりと崩れ去る。

俺の前世の記憶通りの出来事によって。

この日から数日後、朝廷から使者が届き俺達に乱世の始まりを告げた。

内容は『大規模暴動の発生と鎮圧の要請』

後世に言う『黄巾の乱』がここに発生した。

漢の現実

「そろそろ洛陽か」

月様の元に朝廷からの使者が到着して数日後、俺達董卓軍の面々は洛陽に向かい軍を進めていた。

先鋒が恋と霞、軍師としてねね。中軍に月様と詠、護衛として華雄さん。後詰めが俺という配置の総勢２万５０００の軍勢だ。

そうそう、一応俺も騎馬隊を率いる将軍になったんだぜ？　初めは調練や隊の統率に四苦八苦したが、副長や他の将軍達に助けられながら何とか形になってきた。こないだの模擬戦では初めて詠に褒められたしな。あの時は泣きそうになったね。

それはともかく、使者から伝えられた勅令の内容は、簡単に言えば『暴動鎮圧のための派兵要請』だった。

勅令うんぬんを抜きにしても、罪なき民が苦しむのを見過ごす訳にはいかないという事で、俺達も出兵した。月様は兵士の命が失われる事を悲しみながらも、戦う覚悟を決めたみたいだ。…あの娘のために戦うと決めた俺の決断は正しかったようだ。

「伝令！」
「どうした？」

俺が娘の成長を喜ぶ父親のような気持ちになっていると、先行していた部隊から伝令兵が向かってきた。

「賈駆様の御命令です！　『洛陽に到着次第、董卓様と賈駆様、並びに護衛として華雄将軍と張遼将軍は少数の兵と共に宮廷へ向かうので、姜維将軍は呂布将軍・陳宮様と共に陣を敷き待機せよ』との事です」

「了解した。下がって休んでくれ」

伝令を聞き、兵を休ませる。

やはり、詠も洛陽に長居はしたくないみたいだな。もっとも、軍をすぐに動かせるようにとの配慮もあるんだろうが。

今の洛陽は、十常侍と何進の権力闘争の真っ只中のはずだ。

十常侍とは、霊帝の代に朝廷で最も権力を握った１０人の宦官の総称で、張譲という宦官が筆頭になっている。

何進とは妹が霊帝の寵愛を受け、皇太子を授かった事で大将軍まで出世した人物だ。

黄巾の乱の終息後、霊帝が崩御して、この十常侍と何進の間でお互いに皇太子を擁立した権力争いが表面化する。結果的には何進も十常侍も共倒れになるが、２人の皇太子が行方不明になり、袁紹による宦官の皆殺しも相成って朝廷は大混乱に陥る。

この混乱を収めたのが、皇太子の２人を保護した董卓である。しかし、董卓も己の欲のままに朝廷を牛耳り洛陽で暴政を振るう。

そのあまりの董卓の専横に怒った曹操が檄文を各地の諸侯に届け、袁紹が盟主となり劉備・孫堅・馬騰・袁術といった有力な諸侯が集結した反董卓連合軍が結成される。

これが俺の知っている大まかな歴史の流れだ。

だけど、この世界の董卓である月様が朝廷を牛耳るなんてあり得ない。そもそも、反董卓連合軍が本当に結成されるかどうかは分からないが、黄巾の乱が発生した以上おそらく避けられない。

なら、考えられる結成理由は1つ。朝廷の権力争いに巻き込まれた結果、連合軍が結成される事になるんだろうな。

未来の記憶なんて持ってるはずがない詠だが、それでも朝廷に月様を近づかせたくないと考えているはず。詠ほどの軍師なら、簡単に宦官に出し抜かれたりしないだろう。それでも、歴史を知っている俺としても対策は考えておくか。

今後について考えを巡らせていると、洛陽の城壁が見えてきた。漢の都なだけあって堅固な造りをしている。

注意深く城門の方を見ていると、少数の部隊が洛陽内へ向かうのが見えた。あれが月様達だろう。

「よし、俺達も先行していた部隊と共に陣を敷こう。各自用意をしてくれ」

『は！』

俺の指示通りに動き始める兵士達。…こんな新米将軍の言う事をしっかり聞いてくれるなんて、ホント良い仲間達だよ。

「すぐに食事の用意をするから、もう少し我慢してくれよ？　黒王」

天水からここまで乗せてくれた愛馬から降りて、体を優しく撫でる。くすぐったそうにしながら、黒王も頭を擦り付けてきた。…可愛いヤツめ！

「将軍、天幕が完成しました。少しお休み下さい」
「いやいや、皆だって疲れてるだろ？　俺も手伝うからさっさと全員分の準備を終わらせよう」
「しかし、将軍にそのようなことを……」
「いいからいいから」

声をかけてくれた兵士を半ば強引に引っ張り、陣幕の用意を手伝い始める。こういう作業って割と好きなんだよな。俺が手伝おうとすると、皆遠慮するんだけど。

「姜維将軍って不思議な人だよな」
「なあ。普通の将軍だったらこんな作業をわざわざ手伝ったりしないぞ？」
「董卓軍の誇る猛将達と互角に戦える武、軍師様からも一目置かれるほどの頭脳があるのに偉ぶったりしないし」
「人付き合いも良いもんな」
「こういう人の命令なら聞きたくなるよな」

（わ～い。キャンプしてるみたいだ～）

童心に帰ってノリノリで陣幕を張り続けていた俺は、兵士達の会話に全く気付かなかった。

「姜維様、董卓様がお呼びです。軍議を開くので出席せよとの事です」
「分かった。すぐに向かう」
陣を敷き終わり、黒王に食事を与えている最中に月様から呼び出しを受けた。
宮廷から戻ってきてたのか。
「副長、今から董卓様の天幕に行ってくるから何かあったらよろしく」
「了解しました」
指示を副長に任せて月様の天幕に向かう。
さて、洛陽の様子はどうだったのかね？
「姜維です、失礼します」
一声かけて中に入る。そこには、俺以外の全員が集合していた。
俺が席に着いたのを見て、詠が月様に合図を送った。

「それでは新さんも到着したので、今後の私達の方針について説明します」
「ボク達は明日、司州河東郡に向かって出陣するわ。河東郡で確認されている賊軍の兵数は2万よ。ここの賊軍を殲滅すれば、洛陽の背後の安全を確保出来る。大事な戦になるから、心してかかりなさい」
「任せておけ！　全て私が粉砕してやる！」
「ウチらとほぼ同数かいな。騎馬隊で蹴散らせば、さぞ気持ちええやろうなあ」

敵軍の情報を聞いた瞬間、目が爛々と輝き出す華雄さんと霞。根っからの戦闘狂だな…

「落ち着きなさい。河東で戦闘して終了じゃないんだから、出来るだけ兵の消耗は抑えるわよ。ボクとねねで策を考えるから、突撃なんてさせないわ」
「霞さん、華雄さん。私達が守るべき民はたくさんいるんです。そのためにも、明日は詠ちゃんとねねちゃんの作戦に従ってくれませんか？」
「月っちに言われたらしゃあないなあ…」
「董卓様の願いとあらばやむを得ん…」

月様の懇願を受け、渋々といった様子で納得する2人。ううむ、この軍の最強は月様なのかもな。

「詠、策を考えるのは構わないですが、どのような策にするのですか？」
「具体的な内容は明日考えるわ。河東に布陣したら、すぐに偵察を出せるように準備しておいてちょうだい」

「御意なのです」
「…ねね、頑張って」
「お任せ下さい恋殿！　ねねの策略で必ずや恋殿に勝利をもたらせて見せるのです！」

ねねさん。恋だけじゃなく、俺達も勝たせてくれよ？

「月様、河東郡で戦闘後はどうするんです？　洛陽へ帰還するんですか？」
「いえ、一度弘農郡で補給した後、各地の官軍の状況によって援軍に向かうという形になると思います」
「おそらく、援軍へ向かうとしたら荊州の宛になるでしょうね。許昌より東部では陳留の曹操が連戦連勝しているらしいけど、荊州では官軍が苦戦中だそうよ」
「という事は、早めに斥候を宛に向けて出しておいた方がいいですね」
「はい。お願いしてもいいですか？　新さん」
「御意です」

それにしても曹操がね…やっぱり、英雄はどんな世界でも英雄って事か。どうせ女性なんだろうけど。

「ところで1つ聞きたいんですけど…洛陽の内部はどんな様子でしたか？」

俺が気になる様子を聞いた途端、月様と詠、霞と華雄さんの表情が一気に曇る。

ただならない様子に留守番をしていた俺と恋、ねねは顔を見合わせる。

「…そんなにひどかったの？」
「…酷いなんてもんじゃなかったわよ。街に人通りなんてほとんどなかったし、民も皆死んだような眼をしていたわ」
「ハッキリ言って、ウチらの天水の方が比べもんにならんくらい活気に溢れとるわ」

恋の質問に吐き捨てるように詠と霞が答える。

「だが、宮殿だけは豪勢な造りをしていたな。宦官共も将軍共も、自分の事しか考えていない事がよく伝わってきたぞ」
「もっと民に目を向けて政治を行うべきだと思うんですけど…陛下も張譲さんの言いなりになっているみたいです」

華雄さんが憤り、月様が悲しそうに瞳を伏せる。…予想以上に漢の腐敗は進んでいるみたいだ。

「何進大将軍は何もしていないんですか？」
「ええ。少し顔を合わせたけど、そんなに気骨のある人間には見えなかったわ。張譲との権力争いに忙しいんでしょうね」

やっぱり何進もダメか。詠が見てそう感じたのなら、霊帝崩御後の混乱は避けられないな。

「こうやって話を聞く限りですと、各地で暴動が発生するのも仕方ない気がするのです」
「ねねの言う通りや。ウチかてもし虐げられる立場やったら、多分暴れとったで」
「漢の都でさえあの惨状だ。地方だと更に酷い場所もあるだろうな」

ねねの意見に霞も華雄さんも同意する。

「……ですが、力無き人々を苦しめる行為を見過ごすなんて出来ません」

「月の言う通りね。悔しいけど、ボク達には全ての人間を助けられる力なんてない」

「だからこそ、自分達に出来る事を全力でやるって事ですか」

俺の言葉に頷く月様。

「少しでも多くの民を救うために、皆で力を合わせて頑張りましょう」

「当たり前よ。ボクは月の軍師なんだから」

「任せとき！　月っちの願いはウチらがしっかり叶えてみせるで」

「董卓様、ご安心下さい！　我が武にて道を切り開いてご覧にいれます！」

「…恋も守る」

「恋殿にかかれば敵は無しなのです！　月殿は大船に乗ったつもりでいるのです！」

「もちろん、俺も全力を尽くしますよ」

月様の願いを聞き、全員がそれに答える。

「ありがとうございます」

「なら、今日の軍議はこれで終了よ。各自は部隊の最終確認を怠らないように。明日の早朝には出発するからね」

軍議が解散し、各々が自分達の天幕に向かっていく。

俺も自分の部隊を確認しておくか。

翌日の早朝、方針通り洛陽を出発した俺達は司州の河東郡に到着し、黄巾軍と対峙する事となった。

漢の現実（後書き）

久しぶりの更新です。

いつもより多少短めですが、楽しんでいただければ幸いです。

相変わらずの急展開ですが、優しく見守ってやって下さい

飛将軍の力

「管亥様！　官軍がこの先で陣を敷いてますぜ！」
「何だと！？　数は？」
「おおよそ１万ってとこです！　旗印は華と呂！」

河東郡で黄巾軍を率いている将、管亥の元に側近の武将である高昇から官軍襲来の一報が入った。

「たった１万だと！？　俺達も随分舐められたもんだな」
「華と呂なんて朝廷の将軍も聞いた事がないですし、あんな連中敵じゃないです。さっさと皆殺しにしちまいましょう！」

冀州からこの司州まで南下してくる間、管亥と高昇は幾度となく官軍を打ち破ってきた。

それゆえ目の前に布陣している敵軍をさして脅威に思わなかったのも当然の事だろう。

今の漢王朝に優れた将軍が存在しないのは、これまでに官軍を自分達が打ち破ってきたという事実が証明しているのだから。

「当たり前だ！　高昇、テメエが先陣になって連中を蹴散らしてこい！！」
「へい！！」

高昇に指示を出すと、高昇は勇みながら部隊を連れて出陣した。
その兵数は約８０００。

高昇隊の出陣を確認した後、管亥自身も残った1万2000の兵士達を集結させる。

「聞け、テメエら!!　性懲りもなくまた官軍の連中が俺達を打ち取ろうと剣を向けて来やがった!!　だがビビる事ぁねえ!!　俺達は何度もヤツらを皆殺しにしてきたんだ!!　俺達に適うヤツはいねえ!!　愚かな漢王朝のクズ共に、黄巾党の強さを再び思い知らせてやろうじゃねえか!!」

管亥の檄を受け、大地を震わせるような雄叫びを上げる兵士達。

それを満足げに見届けると、管亥も馬に跨がり出陣した。

前方を見ると既に高昇隊が戦闘を開始しようとしていた。

怒声を上げながら進撃する黄巾党。その士気は高く、自分達が負けるなどとは微塵も思っていない。

そんな集団の前に立ちふさがったのは官軍の兵士ではなく、方天画戟を携えた赤髪の少女と金剛爆斧を構えた銀髪の女性。

天下無双の呂布と猛将華雄である。

だがこの2人の事を黄巾党は知る由もない。

「どけえ小娘共!!　死にたくなけりゃあすっこんでろ!!」

高昇が吠えるが呂布と華雄は微動だにしない。まるで黄巾党など眼中にないと言わんばかりに。2人の後ろで隊列を組んでいる兵士達も同様だ。

その様子を見た高昇と兵士達は明らかな憤怒を顔に浮かべ、更に進軍の勢いを上げた。

そして今まさに高昇が呂布に斬りかかろうと剣を構えた瞬間――

――――

「……遅い」

呂布の方天画戟の一撃で高昇は数十人の兵士と共に吹き飛び、地に落ちた時には既に骸と化していた。

黄巾党の兵士達はこの一瞬の出来事が信じられず、ここが戦場である事を忘れて僅かに動きを止めてしまう。だが、戦場では一瞬の隙が致命的な命取りになる。

華雄はこの隙を見逃しはしなかった。

「我が一撃にて、天下を乱す貴様ら賊徒を冥府へ送り込む！！」

金剛爆斧を振るい華雄は黄巾党に斬り込んでゆく。一閃すると首が複数宙を舞い、また一閃すると血を吹き出しながら人が地に伏す。華雄は猛将の名に相応しい武を存分に見せつけていた。

「……お前達弱い」

呂布も天下無双の力を遺憾なく発揮している。風切り音を鳴らしながら方天画戟を振るい、黄巾党を数十人まとめて吹き飛ばしていた。人間業とは思えない高さまで打ち上げられた兵士達は地上に落下する前に事切れる。

それを意に介さず、呂布の戟は勢いを増していく。時折背後から迫り来る剣を人間ごと叩き斬り、槍をかわしてはまた吹き飛ばす。まるで無人の野を駆け抜けるが如く、黄巾党を蹂躙していた。

呂布と華雄の力に黄巾党が翻弄されている間に、隊列を組んでいた兵士達も戦闘を始めていた。日頃から厳しい訓練を受けているだけあって連携がしっかり取れており、味方の被害を最小限に抑えながら確実に敵を討ち取っていく。

「こんな連中に適いっこねえ!!」
「に、逃げろ!!」

もはや黄巾党に勝ち目はなかった。たった2人の人間に仲間が次々と討ち取られ、敵兵の強さも今まで撃破してきた官軍と比べものにならない。

早々と武器を捨てて降伏する者、命だけは助かろうと我先に前線から逃げ出す者と戦場は大混乱に陥った。

「待て！　誰が逃げていいと言った!?　数じゃあこっちが有利なんだ!!　戦え!!」

無論、それは管亥の部隊も例外ではなかった。あまりに常軌を逸した敵将の強さ、訓練が行き届いた本物の軍隊の恐ろしさを目の当たりにして、刃を交える前から逃げ出す兵士が続出していた。

管亥が必死に怒声を張り上げても混乱は収まらない。

また、この最悪の状況で更に追い討ちをかける出来事が発生した。

「管亥様！　両翼から突如騎馬隊が現れ、こちらに向かって突撃してきます！！」
「落ち着け！！　弓を使ってこれ以上接近させるな！！」

騎馬隊の挟撃を受け、管亥の部隊は完全に浮き足立ってしまった。慌てた管亥が指示を出すも、１万を超える混乱した人間達には届かない。

見る見るうちに距離を詰められてしまう。

この騎馬隊を率いているのは神速と呼ばれる用兵術を持つ張遼と、張遼と共に董卓軍の騎馬隊を担う姜維の両名だ。

「うらぁぁ！！　死にたいヤツだけかかってきい！！」

右翼の騎馬隊の先頭に立っていた張遼が飛龍偃月刀を振るえば、次々と兵士が鮮血を吹き出し斬り裂かれていく。

「邪魔だ！！　道を開けろ！！」

左翼の騎馬隊を指揮する姜維が修羅の連撃を放つと、眉間や首を貫かれ血飛沫を上げながら兵士が次々倒れる。

馬に踏み潰され絶命する者、馬上からの攻撃で命を落とす者など甚大な被害が管亥隊に広がっていく。

「この……どけぇ！！」

部隊が壊滅していく中、管亥はただ１人奮戦して戦場を駆けていた。どうせ死ぬならば敵将の１人でも道連れにしてやろうとしてい

るのだ。

２０人ばかりを斬り伏せて駆け回っていると、ようやく将らしき人物を見つけ出した。

「我が名は管亥!!　地獄への手土産にその命もらって行くぞ!」
「いい度胸や!!　張文遠の首、取れるもんなら取ってみい!!」

管亥が見つけたのは張遼だった。

残る力を振り絞り張遼へと突進していく管亥。それを迎え撃とうと同じく張遼も突進する。

両者が乗る馬が交錯し剣と飛龍偃月刀が閃く。

その次の瞬間、管亥の体が馬から転げ落ち大地に投げ出されていた。

「敵将管亥、張文遠が討ち取った!!」

声高く張遼は勝ち名乗りを上げる。それを聞いた董卓軍の兵士達は歓声を上げ、逆に黄巾党の兵士達は悲鳴とも呼べる声を出した。

そしてわずかに抵抗していた黄巾軍の兵士達もとうとう諦めたのか、遂に武器を投げ出して降伏した。

「見事に詠とねねの策が的中したな」

戦闘終了後、部隊の被害状況を確認していた俺は改めて董卓軍の軍師の優秀さを実感していた。

今回の戦闘は万を越える軍勢同士が激突する規模の大きい戦になったが、想像以上に味方の被害は抑えられていた。

やっぱり2人共一流の軍師だな。

ただ、それでも味方に死傷者は多少出ていた。俺の部隊からも死者はいるし、怪我人だって死者の倍はいる。

やっぱり自分の仲間達が死ぬっていうのは戦に何回出ても慣れない。勿論慣れたくもないが。

「……後悔したり悲しんじゃダメだ。彼らは自分達の信念で兵士になったんだ。生き残った俺達が出来るのはただ1つ」

初陣の時に霞と話して感じた事、月様達と話して学んだ事、そして俺なりに考えて決意した事。

改めて心に刻み込んで、後ろ向きだった思考を振り払う。

「彼らの分まで戦って平和を築く」

この信念だけは何があっても揺るがない。

もう一度自分の信念を確認した後、俺は月様の天幕に向かった。

全軍の被害状況、降伏した捕虜の処遇、弘農郡での補給程度など確認しなくてはならない事はたくさんある。

「おっ、恋とねねじゃん。今から月様の天幕に向かうのか？」

「その通りなのです」

「……一緒に行く？」

「勿論」

途中で恋とねねにバッタリ出くわしたので一緒に天幕へ向かう。

……それにしても、こうして普通にしていると大の男を何十人も吹き飛ばしていた人間と同一人物には全く見えないな。

「……どうしたの？」

「なんでもないよ。恋は怪我とかしなかったか？」

「……大丈夫。敵の攻撃は遅かったから当たってない」

「恋殿は黄巾党に遅れをとる御方ではないのです。新も分かっているはずですぞ」

「それもそうだ」

俺や霞、華雄さんの攻撃ですらまともに当たらないもんな。……多分この世界の関羽とか夏侯惇でも勝てないだろう。

「そう言えば、ねねと詠の策もズバリ的中したな。さすがだよ」
「ふふん、当然なのです。冷静に効果的な作戦を考えるのが軍師なのですからな」
「……ねね偉い」
「恋殿～！　なんとありがたいお言葉！　ねねは感激にうち震えているのです！！」

軍師さんや、冷静さはどこにいったよ？

「ほら、着いたからとっとと入るぞ」
「……ねね落ち着く」
「恋殿～！？」

じゃれつくねねを力技で無理やり引っ剥がす恋。……なかなか容赦ないっすね。

3人で一緒に天幕に入ると、中には既に月様達が揃っていた。……デジャブだな。

俺達が席に着くと月様が喋り始めた。

「皆さん揃ったので軍議を始めます。まず各部隊の被害状況の確認から」

華雄さんから始まり、霞、俺、恋の代わりにねねという順番で報告をしていく。

「なんとか最小限に死傷者は抑えられたかしらね？」
「この規模の戦闘でここまで被害を抑えれれば上等やと思うで」

全体の死傷者数を確認した詠に霞が答える。

「これなら弘農での補給も大して時間がかからないはずですぞ」

「次は荊州に向かわねばならないからな。あまり時間をくう訳にも行くまい」

ねねに続いて華雄さんが意見を言う。

「何にしても、ひとまずこれで洛陽の安全は確保出来ましたね」

「はい。洛陽に駐留している官軍も行動出来るようになったと思います」

俺の意見を月様が補足してくれる。他の官軍ってどの程度戦えるのかね？　洛陽の軍が動かなくても各地の諸侯が奮闘すれば終息するだろうに。

「……降伏した人達は？」

「とりあえず弘農までは連れていくわ。ボク達の行軍速度について来れるならそのまま軍に編入させるし、脱落者が出たら兵糧を持たせて帰すわよ」

「兵糧は余裕があるのですか？」

「天水から詠ちゃんの指示で多めに持ってきてたから大丈夫だと思います。弘農郡でも大商人の人が支援してくれるらしいですし」

恋の疑問に詠が答えて、ねねの質問には月様が答える。

「そこまで詠は見通してたんですか……さすがですね」

「別に大した事じゃないわ。黄巾党の中には元々賊だったりする人間も少なからずいるはずだけど、大多数は生活に困った人間達で構

成されてるだろうから、食事が用意出来る環境さえあればボク達の力になると思っただけよ」

確かに天水からの兵力だけでは行動にも限界があるからな。その点、降伏してきた人達を編入出来れば戦力増加は間違いない。

「だが降伏してきた連中など戦力になるのか？　元は農民だろう？」

「大丈夫よ。ある程度の戦闘経験はあるだろうし、相手も同じ農民だもの。調練を重ねながら進軍して、実戦では策も絡めれば立派に戦えるようになるわ」

「……民同士での戦なんてさせたくありませんけど、私達の元々の戦力だけでは乱を収めるなんて厳しいですから」

「こればっかりはしゃあないなあ。ないもんねだりをしても状況は変わらんし、今更言葉で分かり合うっちゅうのも難しそうや」

華雄さんと詠の会話を聞き、月様が辛そうな表情になるが俺も霞の言う通り仕方ないと思う。

そもそも言葉で解決するようなら、こんな暴動まで発展しないはずだ。

「話しを戻すわよ。まず、今回の戦で降伏してきた黄巾党はボク達に追従させるわ。配置としては恋と華雄の部隊になるから、華雄とねねは調練しっかりね」

「うむ」

「任せるのです」

何で恋の部隊の調練をねねがやるのかって？　恋が口下手過ぎて調練に向いてないからだよ！　でもかわいいから許される！　かわいいは正義だ！

「新さん、宛に向けて出していた斥候はまだ帰って来てないんですか？」
「まだ戻ってきてないですね。多分弘農を出発するまでには帰って来ると思いますが」
宛は確か荊州黄巾賊の根城になっていた場所だ。相当数の黄巾賊を相手にしなくちゃならないな。
「ひとまず今は弘農へ向かいましょう。戦死者の弔いもしなきゃならないし」
「それではこれで解散します。弘農に向けて出発するので皆さんは部隊の準備をお願いします」
軍議の終了を月様が告げる。
俺は霞と話しながら天幕を出た。
「そういや新、ウチが一騎打ちしとったのちゃんと見てたか？」
「見てたよ。神速の名に恥じない見事な一撃だったな」
「せやろ！　相手もなかなかの太刀筋やったけど、新や華雄に比べたら大した事なかったわ」
「恋と比べないのか？」
「恋は別格や」
確かに恋の強さは俺達とは異質だ。野生的って言うのかな？
「……新、恋も頑張った」
「恋の事もちゃんと見てたよ。本当に凄かった」
「……ん」

こういう風に頭を撫でられて目を細めてる女の子が天下無双だなんて誰も信じられないだろう。

飛将軍の凄まじさを改めて戦場で感じた戦だった。

穏やかな夜に

「くそっ！　まだ向かってくるのか！」

愛槍の修羅を振るい群がる黄巾党を薙払っていく姜維だが顔には疲労の色が浮かんでいる。

雪のように真っ白な白髪も敵の返り血で赤く染まっており、全身にも所々傷が見受けられた。

愛馬の黒王も疲労が色濃く、少しずつだが走る速度が落ちてきている。それでも尚姜維の為に走り続けているのはさすが西涼の名馬と言えるだろう。

周りを見渡してみると部下の兵達も奮闘してはいるがあまりの数の違いに徐々に押し込まれている。

呂布や張遼、華雄の部隊も未だ健在だが苦戦しているようだ。

「そろそろ撤退しないとマズいぞ……」

呟きつつも、斬りかかってきた黄巾党の首を逆に斬り飛ばす。背後からは槍を構えて姜維の不意を突こうとした者もいるが、動物の本能で主の危機を感じ取った黒王の後ろ足により顎を蹴り砕かれた。

姜維は黒王の横腹を蹴り、さらに黄巾党の集団に斬り込む。左右に乱れ突きを放ち、血飛沫を巻き上げながら戦場を駆け抜ける姜維の槍術は、ある種の舞を思わせるものだった。

しかし、人馬一体とも言える働きを見せるが圧倒的な数の不利は覆せない。

その時、撤退の合図を知らせる銅鑼の音が本陣より響いてきた。

「姜維様、退きましょう！！」

「わかっている！　姜維隊、退却するぞ！！

連携を取りながら負傷者を援護しろ！！」

騎馬で駆け寄ってきた副長に返事をしながら撤退の指示を出す。

波が引くように馬首を返し、姜維隊は撤退していく。騎馬隊で構成されている部隊だけあって退却も素早いが、負傷している馬に跨がっている者や騎乗者自身が負傷している者はそうもいかない。

追撃を仕掛けてくる黄巾党の刃に掛かりそうになるが、そこは訓練されているだけあって互いに助け合いながら退却する。

姜維は部下に迫る黄巾党を突き殺し、副長も得意の弓術で敵を射抜く。

何とか黄巾党を振り切り退却自体は成功したが、董卓軍の負傷者はまたしても増えていた。

宛の戦場から退却し、ある程度野戦場から距離を取った地点に俺達は陣を構えていた。

陣内は怪我人で溢れ、皆苦痛に顔を歪めており、馬達も疲弊しきっている。

俺も多少の傷を負ったがどれも大した傷じゃない。

「黒王も疲れたろ？　今はゆっくり休んでくれ。また戦になったら頼んだぞ」

戦場で何度も俺の背後を守ってくれた愛馬を撫でて労ると、静かに一鳴きしてすり寄ってくる。……本当にかわいいなあ。

もう一度撫でて水と食事の用意をした後に俺は天幕へと戻った。

「お疲れ様でした、姜維様」

「副長もお疲れ様」

天幕で一息つき、髪に着いている返り血を濡れた手拭いで拭き取っていると副長が中に入ってきた。

つい最近知った事だが、副長の名は高順というそうだ。……通りでやけに優秀過ぎる人間だと思ったよ。呂布の配下で《陥陣営》と異名がついた人物なんだもん。そりゃあ優秀だよ。

やはり女性だが武芸も秀でており、特に騎乗したままでの弓術は董卓軍随一だ。それ以外にも剣も得意と言うんだからチートだろ。

「……どうかなさいましたか？」

「いや、何でもない」

マジマジと見ていたから不思議がられてしまった。綺麗な髪を揺らしながら小首を傾げる副長に返事をする。

「ならいいのですが。それでは部隊の状況を報告します」

そう言って副長は負傷者数、死者数などの報告を開始していく。

「主な我が隊の報告は以上となります」

「……そうか。ありがとう」

お礼を言うと、お気になさらずと微笑みながら返される。とりあえず立ち話もなんなので、席を勧めると恐縮しながら俺の向かいに腰掛けた。……別に畏まらなくてもいいのになあ。

「それにしても今回はかなり被害が出たな」

「仕方ありません。荊州の黄巾党の主力を私達だけで相手どらなくてはならないのですから」

実は副長の言う通り、俺達董卓軍だけで荊州黄巾党１５万人を押さえつけなければならないのだ。

なぜこうなったのかと言うと、河東郡で戦闘を終えた俺達は当初の予定通り弘農郡で補給を終えた。ちなみに、弘農郡で支援してくれたのは張世平という大商人だった。……義勇軍を発足したばかりの劉備を援助した有名人の登場にシャウトしてしまい、詠のボディブローを受けたのも今ではいい思い出だ。彼はこれから幽州へ行商に向かうと言っていたから、劉備達もそこで登場するんだろう。

……話を戻そう。その後、弘農郡を出発した俺達は宛に向けて進軍していた。その途中で洛陽出発時に宛に向けて出していた斥候が戻ってきて、宛の官軍が撃破され黄巾党の追撃を受けていると火急の報告が届いた。

友軍の危機を見逃す訳にはいかない。そう判断した月様と詠の指示に従い、機動力に優れる霞と俺の部隊が先行して追撃を掛けていた黄巾党を追い払った。その後、後方から追いかけてきていた月様達の本隊も合流し、敗走していた官軍と協力して黄巾党を打ち破ろうと提案したんだ。

……そこまでは良かった。問題はその後だ。

あろうことか官軍の大将は、負傷者が多くて戦えないだの、自分も戦闘で矢傷を受けたから指揮は取れないだのグダグダ御託を並べてさっさと洛陽に帰還してしまった。……帰還前日まで酒を浴びるほど飲んで酔っ払っていたくせに口だけは達者なヤツだった。

おまけに俺達董卓軍に黄巾党を殲滅しろと偉そうに命令していきやがった。

そのバカ丸出しの命令が出た瞬間、華雄さんと霞がその大将に食ってかかりあまつさえ殴り飛ばそうとしたので、俺と恋が2人を羽交い締めにして押さえ込んだ。

大将はもちろん逆上して2人を処罰しろと騒ぎ立てたが、月様が必死に庇い立てをしたので事なきを得た。……正直言って、月様があんな人間に頭を必死に下げているのを見て俺や恋も暴れそうになったが、あんなに月様を大切に想っている詠が歯を食いしばって耐えているのを見ると、とても暴れられなかった。

その後、官軍は退却したが俺達は残って黄巾党の相手をしている訳だ。何度か戦闘を重ねたが、兵数の差が影響してこちらの被害ばかりが増えている。詠やねねも必死に策を練ってはいるが、河東郡での降兵を合わせても５万に満たない兵力では１５万の敵を撃破するなんて難しい。……恋だけは元気に暴れているけど、こちらの士気は徐々に下がってきている。そんな状況でも脱走兵が出ずに戦い続けている時点で十分凄いんだが。

以上が大体の事のあらましである。

「……あの大将め。今思い出しても腹が立つな」

「あのような人物が軍を率いていたのでは勝てる戦も勝てませんよ。兵士の練度も低かったですし……」

「朝廷にまともな将はいないのか？」

確か、皇甫嵩という名将がこの時代にはいたはずだ。

「皇甫嵩将軍と朱儁将軍は数少ない名将として名を轟かせていますよ。何でも両者ともに不敗の将だとか」

……驚いた。朱儁も有名なのか。今の漢を象徴するような人物だと思っていたが。

「へえ。そんな将達が援軍に来てくれたら頼もしいけどな、多分無理だろう」

「そうですね……おそらく洛陽の守備に就いているでしょうし、今の朝廷にいる人間の中に自分達の身の安全を後回しにしてでも民を優先する人間がいるとは思えません」

だよなあ。こうなるとこの近辺にいる諸侯に期待するしかない。

そんな俺の心を読んだかのように副長が言葉を続ける。

「この辺りの諸侯ですと荊州の劉表殿と淮南の袁術殿が上げられますが、恐らくこちらの援軍は無理でしょう」

「……なんで俺の考えてる事が分かったのかな？」

「私は姜維隊の副長ですから」

……理由になってませんよ高順さん。

「まあいいや。なんでそう言い切れるの？」

「劉表殿は荊州南部で蛮族と戦闘中らしいです。もちろん黄巾党への警戒も怠っていないそうですがそれも新野辺りまでで、宛までは手が回らないんでしょう。袁術殿は子供ですからね、きっと周りの状況なんて見えてないですよ」

袁術って子供かよ。名門の跡取りがそんなんだと我が儘放題の子供になってそうだ。

「なら孫堅殿は？　あの人も荊州にいるんじゃないのか？」

「孫堅殿なら先頃戦死したそうですよ」

「はあ！？」

もう戦死したのか！？　確か孫堅が戦死するのは反董卓連合が解散した後のはずだ。

この世界は時系列が滅茶苦茶だな。

「ということは今の孫家を率いているのは孫策殿か？」

「そうです。ただし孫堅殿が亡くなってからは勢力が衰退して旧臣や家族共々バラバラになり、孫策殿は僅かな家臣と共に袁術殿の客将になっているそうです」

てことは反董卓連合で敵になるのは孫策か。他の家臣は周喩、黄蓋、程普、韓当辺りかな？

「姜維様、どうしたんですか？　そんなに難しい顔をして」

「……今の状況の過酷さを再確認していただけだよ。援軍も期待出来ずに2倍以上の兵力差を覆さなきゃならないんだから」

本当は違う事を考えていたが、あながちこれも嘘じゃない。

「それでも簡単に諦めるつもりはないけどな。俺達がここで踏ん張って黄巾党を殲滅しないと、荊州だけじゃなく洛陽も危なくなるかもしれない。もうこれ以上の悲しみを増やす訳にもいかないから」

ここに来るまでに黄巾党に襲われた村の姿を俺達は見てきた。男も女も老人も子供も関係なく虐殺され、家も何もかも焼き払われていた。

……あんな光景をこれ以上広げさせてたまるか。

「姜維様だけではなく董卓軍の全員がそのように思っていますよ。だからこそ、どれだけ数で劣っていようが戦えるんです」

「……霞と華雄さんはただ暴れたいだけの気がするけどな」

「……否定出来ませんね」

「だろ？」

軽口を叩きながらお互いに笑いあう。

「そう言えば副長。やけに諸侯について詳しく知っていたけど何でだ？」
「乙女の秘密です」
得意気にウィンクをかます副長。……乙女って凄いな。
俺が変に納得していると、兵士が血相を変えて慌ただしく駆け込んで来た。
「ほ、報告します！　後方より砂塵が発生しています！　部隊が接近してくる模様！！」
俺も副長も即座に思考を切り換える。
「旗印は！？」
「未だ確認がとれておりません！」
兵から報告を聞くが詳細な事は分からない。……後方って事は洛陽方面からか。黄巾党はいなかったはずだがな。
「よし、お前は董卓様に報告を！　副長は俺と一緒に念の為に迎撃用意！」
『御意！！』
指示を出すと、副長はいつの間に用意したのか既に弓を構えていた。
兵が天幕を飛び出すのを確認すると、俺も修羅を持ち陣の後方に向かう。

「黄巾党でしょうか？」
「さあ。洛陽方面には黄巾党はいないと思ったけどな」

走りながら会話をして到着すると、そこには兵士達が集まっていた。負傷者が多い中で奇襲の可能性も否定出来ないので、心なしか動揺している。

「落ち着け！！　戦える者だけ念の為に迎撃用意！！　槍隊を先頭に構えろ！！　弓隊はいつでも撃てるように射撃準備を！！」

一喝しながら指示を出すと兵達は行動を起こし始める。

「的確ですね」
「さすがに慣れたさ」

副長と共に先頭に立ち、砂塵の舞っている方向に視線をやると確かに軍が接近してきていた。

「……敵？」
「どこの軍や！？」
「恋、霞」

いつの間に来たのか、２人もまた得物を持ち俺の隣に立っていた。

「距離が遠くてまだ確認出来てない」
「いや、少し見えてきたぞ」
「あれは……朱と皇甫の旗ですな」

……音もなく隣に立つのは止めようか？　華雄さん、ねね。

「朱と皇甫……洛陽の援軍かいな？」
「おそらくそうなのです」
「ほう、洛陽の将は腰抜けばかりだと思っていたがな」

霞とねねの会話を聞いた華雄さんが青筋を浮かべている。

「お願いですから暴れないで下さいね？　華雄さん」
「ふん。ヤツらの態度次第だ」
「……来る」

見る見るうちに接近してきた軍は俺達の目前で停止し、先頭に立っていた2人の将らしき人物が馬から降り拱手の礼を尽くしてきた。

「私は洛陽より董卓軍の援軍として参上しました皇甫嵩、後ろに控えているのは朱儁と申す。董卓殿へお取り次ぎ頂きたい」

皇甫嵩と名乗った妙齢の女性は、後ろに控えている同じく妙齢の女性を朱儁と紹介して月様との会見を求めてきた。

俺達も慌てて拱手の礼を取りそれぞれ自己紹介をする。

そのあと皇甫嵩将軍と朱儁将軍は月様と詠に会見し、董卓軍と共同で黄巾党撃破に当たる事を伝えてくれた。

ちなみに、俺達に散々威張り散らして洛陽へ帰還していった将軍は皇甫嵩と朱儁、盧植の3将軍に戦況について詳しく聞かれボロが出て免職されたそうだ。

その話を聞いた瞬間、月様以外の全員がガッツポーズで喜びを表

したのは言うまでもない。……古代中国にガッツポーズとかハイタッチって存在したんだな。

それはともかく、明日の戦いで黄巾党を殲滅する為の策についても入念に打合せをした俺達は、英気を養う為に今日は最低限の警戒だけで兵を休ませる事にした。黄巾党もさして動きを見せず、久し振りにゆっくりとした時間を過ごす事が出来た。

そして夜になり静かな夜が辺りを闇に包んだ頃、天幕の中で俺は寝付けずにいた。

「少し歩くか」

簡単に身支度を整えて気晴らしに陣内を見回っていると、陣の外に歩いて行く小さな人影があった。

「明日に備えて休んだ方がいいですよ？　月様」
「新さん……」

一瞬肩を大きく震わせるが、声をかけたのが俺と分かると安堵する月様。

話を聞くと月様もなかなか寝付けずにいたらしい。１人で歩くのは危険なので護衛として付いていくと言うと、嬉しそうに微笑んでくれる。

それからは、お互い取り止めのない事を話しながらゆっくり歩く。家族の話、子供の頃の話、得意料理や好きな食べ物なんて事まで本当に色々な話をした。月様も俺の話を笑いながら聞いてくれたし、月様の話も聞いていて楽しかった。

思えば天水から洛陽に来て黄巾党討伐に乗り出してから、こんな風に月様とゆっくり話した事なんてなかったかもしれない。……前はもっと沢山話す機会があったけどな。

洛陽へ戻ったら2人で皆に手料理を振る舞おうと提案すると、月様も笑顔で頷いてくれた。

それからも俺達は話し続けたが、月様が小さなかわいい欠伸をしたのをキッカケに陣へ戻る。……顔を赤くして恥ずかしがる月様マジ天使。

そして陣に戻った俺達を待ち受けていたのは……

「休めって言ったのに出歩くなんていい度胸してるじゃない？　新……」

「OH……」

バッチリ見える程の怒りのオーラを身にまとい仁王立ちをする天才軍師、賈文和だった。

「え、詠ちゃん。新さんは悪くないの、私の護衛で付いて来てくれていただけで……」

「それについては感謝してるわ。だけど、どうしてこんな時間に月は外を出歩いていたのかしら？　その辺もきっちり聞かせてもらわないとね」

「へぅ～……」

ここまで恐怖に満ちた『へぅ～』は聞いた事がない。

「ま、まあまあ詠。そんなに怒らないで下さい。何事もなかったんだし、いいじゃないですか」
「当たり前よ。アンタ程の武人が付いていながら月にもしもの事があったら……その時は分かってるんでしょうね……？」

……間が怖すぎるッ！！

「新……ちゃんと聞いているの……？」
「ハイ。チャントキイテマス」

……すげえ。人って静かに全力でキレる事が出来るんだな。

頭上に星が煌めき優しい闇が人を眠りに誘う静かな夜。

月様と2人で詠の説教を聞きながらそんな夜は更けていった。

「新……？」
「キイテマス……」

笑顔の花

「……眠い」

詠の説教をくらった翌朝、俺は黒王に跨がりながら猛烈な睡魔に襲われていた。

説教自体は短時間で終わったんだが、詠のあまりの迫力にビビってしまい寝台に横になってからもしばらく眠れなかった。

……情けないとか言わないでくれ。そんなの自分がよく分かってる。

「なっさけないな～新。いつも最前線で戦っとるのに詠が怖いんか？」

「武人が尻込みなどするな。賈駆の気迫なんぞ己の気迫で打ち破ってみせんか」

心底楽しそうにニヤニヤしながら俺を見てくる霞と、口では厳しい事を言いながら俺をからかう気満々の笑みを見せる華雄さん。

「……なら2人が手本を見せてくれよ。俺が適当な事言って詠を本気で怒らせてくるからさ」

「むっ、あそこが賈駆の言っていた場所か」

「せやな。確かに兵を隠すには良さそうな地形や」

……2人揃って露骨に話を逸らしやがったな。やっぱり詠が怖いんじゃないか。

いや、ここまで恐れられる詠を逆に褒めるべきなのか？

「……新、無理はしちゃ駄目」

「将が弛んでいると兵の士気に関わるのです。もっとシャキっとするのです！」

……恋の気遣いが身に染みるぜ。勿論ねねも。軍師としての忠告には違いないんだ。

「ありがとな2人共。お礼と言っちゃなんだが今度とっておきのお菓子を作るから楽しみにしててくれ」

「……美味しい？」

「そりゃあもう！　甘くて美味しいぞ！」

「ん。楽しみ」

「ねねは大人ですからな。菓子など子供が食べる物に興味はありませんが、新がどうしてもと言うなら食べてやるのです」

恋は目を輝かせて喜び、ねねは素っ気ないフリをしながらもソワソワして楽しみにしているのが伝わってくる。

さすが詠と並ぶ董卓軍の2大ツンデレ軍師だ。素直じゃないぜ。だがそれが良い！！

「ええ～！？　何で2人だけなん！？」

「2人だけじゃないぞ霞。ちゃんと月様と詠の分も用意するさ。ああ、あと兵の皆の分も出来るだけ作ろうかな？」

「どうして私と張遼の分を作らんのだ！？」

「真の武人である華雄さんと霞は菓子なんていらないかと思いまして」

華雄さんと霞の言葉は全部スルーだ。静かなること林の如し！
動かざること山の如し！

信玄公……あなたの教え、生かせていますか？

前世のゲームでしか会ったことのない偉人に問いかけていると、
目標地点にいつの間にか到着していた。

「馬鹿な会話をしてないでさっさと伏兵の用意をするのです。そろそろ本隊が動き始める頃合いですぞ」
「……失敗したら怒られる」

ねねが伏兵部隊の軍師として至極全うな意見を言い、恋の一言が決め手となって俺達は行動を始める。

今回の作戦では俺と恋、華雄さん、霞、ねねの5人が伏兵となり動く事になっている。

作戦の概要は、まず月様と詠が率いる董卓軍の本隊と皇甫嵩・朱儁の両将軍が率いる部隊が正面から黄巾党を攻める。ある程度戦い時間を稼いだら速やかに退却して黄巾党を釣り出し、伏兵部隊と挟撃して撃破するという詠が好む策だ。最も、好む好まないで策を練るような軍師ではないが。

ちなみに、伏兵として俺達が待機する場所は崖とまではいかないが小高い丘のような地形になっており、釣り出された黄巾党が進軍して来ると両側からそれを見下ろす事が出来る。確かに、この地の利を生かして両翼から伏兵が駆け下りてくれれば混乱は間違いない。

黄巾党から見て右翼が俺と恋、左翼が霞と華雄さんだ。

「新！　今回の戦でウチが頑張ったら、ウチの分も用意してくれるやろ！？」

抗議を全く相手にされなかった所為か、若干涙目になりながら霞が詰め寄ってくる。

……泣くなよ。

「ちゃんと全員分用意するって」

「ホンマやな！？　もし嘘やったら承知せんで！？」

「よし！　華雄隊、全速力で左翼へ向かうぞ！　私に続け！」

「張遼隊も行くで！　神速の異名に恥じない実力、見せてやりい！」

俺の返答を聞いた途端、嵐のような勢いで左翼へ向かう2人。付いていく兵士達も苦笑いだ。……お疲れ様です。

「全く、あんな勢いで進軍して黄巾党に気付かれたらどうするのですか！？」

「大丈夫だって。黄巾党が陣を敷いているのはもう少し先だろ？気付きやしないさ」

憮然としているねねを宥めていると、恋が近くにやってきた。

「どうした？　恋」

「……あとでたくさんお話ししよ？」

「え？」

急な恋の提案に気の抜けた声が出る。

「……昨日、月と新はたくさんお話しした。恋も新とお話ししたい。だからあとでたくさんお話しする」

とうとう疑問形ですらなくなったよ。

当然、嫌な訳がないけどな。

「そうだな。しばらく恋ともゆっくり話してなかったし、時間を作ってたくさん話そう。ねねも一緒にな」

自分も混ぜろと言おうとしたんだろう。俺に向けて口を開きかけていたねねも一緒にと返事をする。

「……ん」

「ねねを忘れなかった事は評価してやるのです」

少し微笑みながら頷いてくれる恋と、腕を組みながらふんぞり返るねね。

予想通りのリアクションを取る2人に少し笑いが零れる。

「何にしてもまずはこの戦いに勝たないとな」

「……頑張る」

「恋殿がいるかぎり負けはないのです」

そんな会話をしながら視線を下に向けると、月様達の陽動隊が進軍を始めていた。

「それにしても董卓軍には頭が上がらぬな」
「全くだ。黄巾軍の半数以下の兵力で戦線を維持していたのだから恐れ入る」

董卓軍と共に進軍しながら、皇甫嵩と朱儁は馬上で会話していた。

話の内容は董卓軍を賛賞する言葉ばかりだった。敵の半数以下の戦力で戦線を守り抜く事がどれだけ難しいか、歴戦の将軍である2人はよく理解していた。だからこそ、その困難な事をやってのけた自分達より年下の君主とその部下の者達への賞賛を惜しまなかった。

そして董卓軍への精一杯の敬意の表れとして、先陣をかって出たのだ。

「彼女達のように立派な者が少しでも朝廷にいてくれればな……」
「……それを言うな」

気持ちは分かるがな、と朱儁の呟きに苦い表情になりながら同意する皇甫嵩。

太守であるとはいえ地方の軍閥に過ぎない董卓とは違い、朝廷に直接仕える立場の2人は洛陽の腐敗と民の苦しみを嫌というほど痛

感していた。

民を救いたいとは思いながらも、何進と張譲のように絶大な権力を持たない2人にはどうすることも出来なかった。

不敗の将として名を馳せていようとも、兵権を握る大将軍と常に皇帝の傍に控える中常侍の前では唯の一将軍に過ぎない。

洛陽では盧植や王允、楊彪など真に民を想う者も僅かにいるが何進と張譲の権力になすすべもないのが現状だ。

「……今ここで嘆いても仕方あるまい。戦に集中しよう」

「そうだな。我らがしくじって軍師殿の策を台無しにする訳にもいかん」

皇甫嵩の言葉に朱儁が続き、背後に連なる兵士達に声をかける。

前方では官軍襲来に気付いた黄巾党が陣から雪崩を打って出てくる所だった。

「諸君!!　我らは黄巾党に数で劣る、だが恐れる事はない!!諸君には私と皇甫義真という不敗の将がついている!!」

朱儁に続き皇甫嵩も檄を発す。

「そして、我らよりも少数ながら見事に黄巾党と互角以上に戦い抜いた董卓軍という心強い友もいる!!　これだけの味方がついている諸君に敗北はありえない!!　黄巾という獣共に正義の鉄槌を下そうぞ!!」

『応！！』

2人の檄を聞いた兵士達は声高らかに雄叫びをあげる。

『全軍……突撃！！』

先頭で馬を走らせる将軍達に続き、兵士達は数の不利に怯むことなく黄巾党に突っ込んでいった。

「賈駆様！　皇甫嵩、朱儁の両将軍が戦闘を開始しました！」

「そう、ならボク達も進軍するわ。全軍に戦闘準備の通達を。それからいつでも合図を出せるように銅鑼の用意を忘れずにね」

「はっ！」

伝令兵に指示を出し、賈駆は一つ溜め息を吐く。あとは頃合いを見て敵を釣り出し、伏兵との三方向からの挟撃で殲滅するのみ。

そう自分に言い聞かせても賈駆の心には小さな不安が渦巻いたままだった。

いかに策を巡らせようとも戦場は何が起こるか分からないのが常だ。万全の下準備と打ち合わせを重ねても、ほんの些細な出来事から全て台無しになるかもしれない。

味方の被害を最小限に抑えて最大の勝利を得る。それが軍師の仕事だが一歩違えれば守るべき仲間が全滅する恐れもある。

軍師が不安や動揺を表に出せば全軍にそれが伝わり、最悪の結果を招きかねない。そう考えているからこそ賈駆は強気な姿勢を崩しはしないが、策の成功を見届けるまではどんな時も不安を拭い去れないのである。

「詠ちゃん……」

そんな心中の不安を察したのか董卓が声をかける。

「心配しなくても大丈夫よ、月。この本陣の守備には腕の立つ兵をつけてあるし、万が一の時のために策も練ってある。ここの安全はボクが保証するわ」

安心させるように笑いかけるが董卓はそうじゃないの、と首をふる。

「詠ちゃんの事はもちろん信じてるよ？　でも新さん達は大丈夫かなって……」

「月……」

今回の戦は今までとは敵の数が段違いなのだ。これまでは董卓軍より少ないか、多くても互角程度。だが今回は洛陽からの援軍を合わせても董卓軍は約１０万。１５万の敵軍の３分の２だ。

数で勝る黄巾党に仲間が斬り込み、そのまま生きて帰ってこない事を董卓は不安に思っているのだ。

「……新達の強さは月もよく知っているでしょう？　ちゃんと無事に帰ってくるわ」

「でも……」

まだ不安な様子を見せる董卓に更に言葉を続けて賈駆は励ます。

「それにあの5人は皆相当しぶといわよ。それこそ簡単に死んだりしないわ。特に新なんてどんなにボクに殴られてもピンピンしてるくらいなんだから」

賈駆の少しおどけた言葉に董卓はようやく少し微笑む。

「そうだね。私が不安に思ってたら兵の皆が不安がっちゃうよね」

「そうよ。それに月は不安な顔より笑顔の方が素敵なんだから、全員帰ってきたら笑顔で迎えてあげなさい」

それに、と賈駆にしては珍しい種類の笑みを浮かべ言葉を続ける。

「月が満面の笑顔で出迎えたら……新なんて月に惚れちゃうかもね」

あくまでもからかって言った賈駆だったが、董卓はそうは受け取らなかったようだ。

「へぅ～……そんな……新さんが私を好きになるなんて」

董卓は耳まで真っ赤になりながら両手で頬を押さえる。

この反応に驚いたのは賈駆だ。軽い気持ちで言ったのに思わぬ形で親友の心を知ってしまった。

「ちょっ、月……まさか……？」

「へぅ……」

相変わらず真っ赤なまま小さく頷く親友の姿に賈駆は絶句する。
だが董卓からの爆弾発言はこれで終わらなかった。

「で、でも私だけじゃないよ？　たぶん霞さん達もそうだし、詠ちゃんも新さんの事好きだよね？」
「なっ！？　ボ、ボクは別に！？」

董卓のやんわりした口調とは対照的に賈駆は動揺を隠せなかった。
あっという間に顔が朱に染まっていく。

「詠ちゃん、顔が真っ赤だよ？」
「ち、違うわよ！？　これは……その……」

しどろもどろになりながらも弁明をしようとする賈駆だが、出てくるのは言葉にならないような音ばかりでまともな文章になっていない。

そんな親友を見て董卓は形勢逆転の笑いを堪えられずにいた。

「新さん達が帰ってきたら詠ちゃんも笑顔で迎えてあげようね？
そうすれば新さんも詠ちゃんを大好きになると思うよ」
「うぅ～……分かったわよ」

仕方なしにという様子で頷く賈駆だが、その顔はどこか嬉しそうだった。

素直じゃないんだから、と思いながらも董卓は笑みをますます深める。

（皆さん、ちゃんと戻ってきて下さいね）

その胸に祈りを抱きながら……。

眼下で繰り広げられている戦闘を静観しながら、俺は気持ちが高ぶっていくのを抑えられずにいた。

俺達より多い軍勢に奇襲をかけるのだから緊張して当然なのかも知れないが。

「ねね、詠からの合図はまだか？」

「まだなのです。ですがそろそろ銅鑼を鳴らし始めるとは思うのです」

ねねの言う通り、陽動隊は少しずつ退却を始めていた。

黄巾党もその後を追って進撃している。

そして黄巾党がちょうど俺達の真下を通過した辺りで――――

――――

「……！　ねね！」

「分かっているのです！　弓兵隊、打つのです！！」

本陣から銅鑼の音が鳴り響き、それを合図に地の利を生かした両翼から雨のような矢が降りそそいだ。

放たれた矢は一瞬のうちに黄巾党の無数の屍を戦場に晒した。そして第2射、第3射と続く弓の雨は15万の黄巾党をどんどん減らしていく。

矢の雨が止まり黄巾党が安堵した瞬間、黄巾党に退却する姿を見せていた陽動隊も再び反転し、攻撃を再開する。

それに合わせて

「よし！　この戦を勝って終わらせ洛陽へ帰還するぞ！」

「……行く」

右翼から俺と恋が率いる部隊が、

「散々苦渋を舐めさせられた借り、キッチリ返してやれ！」

「ウチら騎馬隊のホンマの力、連中の身に刻み込んだりい！」

左翼から霞と華雄さんの部隊が黄巾党に雪崩れ込み戦局は完全に決した。

黄巾党の指揮官、孫仲は大混乱に陥っていた。以前までの戦闘で何度も追い込みながらも仕留めきれずヤキモキしていた所に再び官軍が攻めてきたのだ。今度こそ決着をつけてやろうと意気込み出陣したが、それがいけなかった。

いつも通りに退却を始めた官軍を追撃して周りを高地に囲まれた地点まで到達した途端に、突然雨のように矢が降りそそいだのだ。

誘い込まれたと気付いた時にはもう遅かった。両翼から伏兵が現れ、退却していた官軍の逆襲にも遭い兵は次々討たれていく。

せめて自分の命だけでも守り抜こうと僅かな部下を引き連れ戦場からの離脱を図っていた。

「ええい！　どけ！　どかんか！」

己の部下を跳ね飛ばし、時には斬り捨ててまでも孫仲は一心不乱に逃げ回っていた。

「孫仲様！　ここにおられましたか！」

「趙弘か！　韓仲はどうした！？」

そこへ腹心の1人である趙弘が兵を連れてやってきた。先鋒を任せていたもう1人の腹心である韓仲の行方を聞く。

「銀髪で大斧を操る女に討たれました！　俺も命からがら逃げてきたとこです」

「ちっ！　仕方ねえ、俺達だけでも逃げるぞ！」

そう言って孫仲が再び馬を走らせようとしたその時、

「逃がすか！　姜伯約がその首頂戴する！」

立派な黒毛の騎馬に跨り、槍を持った白髪の男が立ちはだかった。

一瞬ギョッとする孫仲達であったが、対峙する男が細身の優男で武の心得がある人間には見えなかったので警戒を緩めてしまう。

それなりの武の心得がある人間ならば、この男の放つ強者の雰囲気に気付けたのだろうが、生憎腕の立つ者が孫仲の周りにはいなかった。

「ああ！？　テメエみてえな小僧にくれてやる首はねえよ！！」

自分達の敵ではない。

そう真っ先に判断した趙弘が槍を構えて駆け出すが、姜伯約と名乗った男の槍が一瞬動いた瞬間……

趙弘の首が宙を舞い、頭部を失った体が鮮血を噴き出しながら馬上から落下した。

「……え？」

孫仲は目の前で何が起こったのか全く理解出来ずに呆ける事しか出来ない。それは部下の兵士達も同様だった。すぐ傍では未だに激しい戦闘が行われているのに、孫仲の周りだけは別空間のように静まり返っている。

だがそれも姜維が馬を駆け出させた事で戦場に変わる。

「……ハッ！？　な、何をしてる！　あの男を討ち取れ！！」

我に返った孫仲の指示に従い続々と兵士達が挑みかかるが、あっと言う間に亡骸に変えられる。

ある者は趙弘と同じく首を飛ばされ、ある者は眉間を貫かれ、またある者は喉を斬り裂かれる。

次々と兵を屠り、返り血で白髪を染めながらも孫仲に向かって突き進むその姿は……

「お、鬼だ～！！」

黄巾党の目には人外の存在にしか見えなかった。

あまりの強さに恐れをなし、兵士は逃げ出し始める。

「どこへ行く！？　おい、待て！！」

たった１人の存在に恐れおののき、孫仲の周りにいた１００人程の兵士は瞬く間にいなくなってしまった。

その間にも姜維は距離を詰め、孫仲に迫っている。

「覚悟！！」

「な、舐めるな！　この孫仲、易々と……」

たまらず剣を構え応戦しようとするが時すでに遅く、瞬き一つする間に姜維の槍は孫仲の心臓を貫く。

何が起きたのか分からぬまま孫仲の意識は闇に沈んでいった。

俺が孫仲を討ち取って間もなく、黄巾党は殲滅された。

今は月様の本陣に戻る最中だ。

これで洛陽から俺達に下された勅令は達成した訳だが、これから俺達はどうするんだろうか？

『黄巾の乱』の次に発生する歴史上大きな出来事と言えば反董卓連合だが、月様の命が狙われるような事になる前に洛陽から離れたい。

いや、それよりも何進暗殺を防ぐべきなのか？　そうすれば朝廷の混乱は防げるだろうしな。けど地方太守の部下がどうこうできる相手じゃないし、下手に動いて月様が睨まれるような事にはしたくない。もしかしたらそれがきっかけで連合が組まれるかもしれない。

そもそも洛陽で新しい勅令が出る可能性もあるからな。……何進が暗殺されるのは霊帝が崩御してからだ。霊帝が崩御するのは黄巾の乱終結後だから時間はある。

それまでに月様を守る方法を詠と相談しておこう。それと同時に諸侯についても情報を集めておくか。腐っても都なんだ、皇甫嵩将軍や朱儁将軍みたいにまともな人物も少しはいるだろうし、諸侯に詳しい人間もいるはずだ。

今後について考えを纏めた所で、気が抜けたのか大きな欠伸がもれる。

……よし、月様達に報告を終えたら少し寝よう。

そう決めて天幕に入った俺を出迎えたのは

「新さん、お帰りなさ……きゃああ！！」

「ちょっ、新！！　頭大丈夫なの！？」

「どうしたんですか月様！？　あと詠は何でいきなりそんな暴言吐くの！？」

月様の悲鳴と詠の毒舌だった。

「暴言じゃなくて！！　アンタ血で頭真っ赤よ！？」

「怪我したんですか！？　すぐに治療しないと！！」

真っ赤？　何で……ああ、そう言う事か。

周りにいた皆も不思議そうな表情で俺達のやり取りを聞いていたが納得したらしい。

「そう言えば、月殿と詠は普段本陣で指揮を取っているから前線の新を見ていないのです」

「ウチらは見慣れてもうたからなあ」

「まあ私達も最初は驚いたがな」

「……今日は拭ってこなかったの？」

「うん。眠くてすっかり忘れてた」

恋の疑問に答えつつも月様と詠に向き直り説明する。

「大丈夫ですよ2人共。これは怪我じゃなくて返り血ですから」

『え？』

俺の説明にキョトンとする2人。

……返り血ですからっていうのも事件の匂いしか感じさせないが、戦だから仕方ない。

普段は頭を拭ってから天幕に顔を出すのだが、今日はすっかり忘れていた。……どおりですれ違う兵士が皆ギョッとする訳だ。

その辺も踏まえて説明を続けると2人は安堵の溜め息をもらした。

「へぅ……そうだったんですか」
「心配させないでよ……バカ」

……涙目の月様超カワイイ!!　普段は強気な詠の弱々しい表情もいいね!!　バカってのもグッとくる!!　これがギャップ萌えか!!

不謹慎と分かっていながらも2人に萌えているとジト目の霞と恋に脇腹を抓られ、不機嫌な顔のねねと華雄さんに思いっきり両足を踏まれた。

何故だ……。

「……ほら詠ちゃん。ちょっと段取りと違ったけど……」
「……待って！　心の準備が……」

そうこうしていると月様と詠が小声で何やら相談している。……何だろう？

皆もちょっと前の不機嫌はどこへやら、急にニヤニヤしているし。

俺が首を傾げていると相談が纏まったのか2人が俺に向き直る。

「どうしたんで……」

『新(さん)。お帰りなさい』

疑問を投げかけようとした俺の言葉は続かず、花のような笑顔の月様と珍しく満面の笑顔の詠に見とれてしまった。

「……何か言いなさいよ」

「あっ!?　ええと……ただいま……？」

恥ずかしかったのか真っ赤になって睨む詠に急かされ言葉を紡ぐ。

「何や新、見とれてたんか？」

「えっ!?　いや……俺は……」

霞のからかいにどもってしまった俺は他の皆にも散々からかわれてしまう。

チクショウ!!　恥ずかしい!!

「新さん。詠ちゃんは戦いが終わってからずっと笑顔の練習をしていたんですよ」

「月!?　そんな事言わなくても!」

……これぞ天の助け!!

「へえ～そうなんですか。あの詠がね～」

ここぞとばかりに月様に乗っかる形で詠をからかい、話題のシフトチェンジを狙う。

「な、何よ新！　にやけるな！」

「別に～？　詠が俺の為に笑顔の練習をしてくれた事が嬉しいだけです～」

「違うわよ！　ボクは月に言われて仕方なく！」

「はいはい。ツンデレ乙乙」

「訳の分からない事言うな！」

俺に乗っかり霞や華雄さん、ねねやあの恋までもが詠をからかう。

……我が策成れり！

「詠は可愛いな～」

頭を撫でながらこの言葉を言うと詠は耳まで真っ赤になって俯いた。……今思えばこれがトドメになったんだろうな。

「……こんの……」

「……ヤッベ。詠、ごめんなさい！　ちょっと悪ふざけし過ぎました！」

俯いた詠から尋常じゃない闘気を感じた俺は即座に謝る。

だがこうかはないようだ……。

「マズい……。こんな時は……月様！　って居ねえし！？」

いつの間に退却したのか、月様を初めとした董卓軍の将達は天幕の外でこちらを伺っていた。

……我が天命、ここで尽きるか……。まだニヤケてる霞と華雄さんとねね、覚えてろよ。

「チクショウ!!　こうなりゃヤケだ!!　来いオラア!!」

覚悟を決めた俺を殺気じみた目で睨む詠。

……超怖え!!

「馬鹿新～!!!」
「えぶらっ!?」

……このハートブレイクショットが正確にリカ○ド・マルチネスに当たってたら……貴男が世界チャンピオンでしたよ……伊○さん……!!

俺は前世で泣けたワンシーンを一瞬思い出し、そして意識を失った。

教訓!!　何事も程々に!!

司馬懿仲達

ここは漢の都、洛陽の執務室だ。

東の窓からは暖かな日差しが差し込み、窓の向こうに視線を向けると、そちらには雲一つない青空が広がっている。

温暖な気候に誘われて、恋の家族である動物達が中庭で気持ち良さそうに昼寝しているのが見てとれる。

そんな平和な風景を視界の端に収めながら俺は――――

「マジで投げ出す5秒前……」

盛大に頭を抱えていた。

目の前の机には高く積まれた書簡の山。

おっかしいな？　ついさっき全部処理し終えたと思ったけど。

「呆けてないで手を動かしなさい」

「……いえすまむ」

詠はもう少し優しくなってくれてもいいと思うんだ。

そんな事を思いながら案件処理を再開させる。

「ごめんなさい新さん。警邏の仕事もあるのに私達の手伝いまでさせてしまって」

「いえ、気にしないで下さい。人手が足りなくて月様達が苦労しているのは承知してましたからね。少しでも助けになるなら嬉しいです」

そう言って笑うと、月様も笑い返してくれる。やっぱり女の子は笑顔が一番だ。

そもそも、なぜこうなっているのかというと、洛陽に戻ってきた俺達が新しい勅令として洛陽守護と治安改善の任を受けたからだ。

洛陽の治安を乱した連中の尻拭いなんてしたくないが、苦しむ民を見捨てるなんて出来る訳がない。勅令に従い、俺達は洛陽復興に取りかかった。

まず手始めに、今まで警邏と称して街で好き勝手に暴れていた何進の兵を警邏任務から外して、董卓軍の兵を警邏に回した。

当然のように何進から圧力が掛かりそうになったが、司徒の王允と大尉の楊彪が俺達の味方になり何進を宥めてくれたので事なきを得た。王允は董卓を謀殺した人物なので最初は警戒していたが、今では俺達に全面的に協力してくれている。この感じだと月様と敵対する事はないだろう。

その後、裏通りなどにたむろしていた、職のない浮浪者にアルバイト形式で仕事を与えて、街の活性化を図った。警備隊に入って治安維持に貢献してくれる者、董卓軍に入って兵になった者など、今では色々な人が様々な職に就いている。霞と華雄さんのスパルタ教育は効果てきめんだった。

これも給金の財源をどうするかで頭を悩ませたが、張世平さんに資金援助を頼んだり、洛陽の名士の王子服などの協力を仰いだりして、何とか資金を捻出した。その代わりに俺の前世の知識を利用した見返りを用意する事になったが別にそれは構わない。ギブアンドテイクってやつだ。

これら以外にも、衛生面を清潔に保つ為に改善案を考えたり一時的に税率を下げる為に王允さんや揚彪さん、侍郎の伏完さんに相談したりと戦以上に忙しい日々を送っていた。

この政策のほとんどが前世の知識を利用して考え出したものなので、効率よく成果を挙げている。完全復興とまではいかないが、それでも以前より街の人達の笑顔が増え、活気に満ちた街になったと思う。

最近は何進や十常侍の連中からの圧力もなくなった。それでも月様に何かあるといけないので、月様の顔が必要以上の連中に知られないよう詠とねねが策を巡らせている。政務の最中も、将軍達の誰かが出来るだけ護衛に就くようになっているから安全もバッチリだ。

だが、今は他に問題が発生している。

「それでも人手不足は深刻ですな。ねね達にもし戦後処理が回ってくる事があれば、今の人数ではとても処理しきれないのです」

そう。ねねの言うとおり、圧倒的に人手が足りないのだ。

元々洛陽に居た文官達は賄賂で職を得た人間ばかりで、政務を託すには実力が足りなすぎる。天水の文官達の方がよっぽど優秀だったくらいだ。

中には実力で職に就いた人も居るが、数が少なすぎる。少数精鋭どころの話ではない。

詠とねねが鍛え直しているので、優秀な人も徐々に増えてきてはいるがまだまだ絶対数が足りない。

そのせいで、月様達の負担が大きくなっている。王允さん達も手伝ってくれているんだけどな。

そういう事で、俺も警邏前や警邏後に政務の手伝いをするなど日常茶飯事だ。今日もこれから見回りだし。

「天水の文官を呼び寄せたらどうですか？」

「無理ね。あそこに残してきたのは、天水の政務が滞らない程度の人数よ。これ以上人数を減らすと今度は天水の政務が機能しなくなるわ」

それはマズい。本末転倒もいいとこだ。

「ゴメンね詠ちゃん。私がもっとしっかりしていれば……」

「そんな！？　月が悪い訳じゃないわ！　新がボーッとしてるのが悪いのよ！」

「酷いよ詠ちゃん」

「アンタが詠ちゃんって呼ぶな！」

場を和ませようと軽くボケただけなのにメッチャ怒られた……。

凹むわ……。

それはともかく、月様の沈んだ顔なんていつまでも見たくないな。

「大丈夫です。俺もこれからは時間が許す限りは手伝いますから。皆で頑張れば何とかなりますよ。そうですよね？　詠」

「当然よ。ボクを誰だと思ってんの？」

「ねねも更に頑張るのです！」

俺の意図を察したのか？　いや素だろうな。まあ、どっちでもいいか。

自信満々の詠と胸を張るねねを見て、月様が笑いを零す。

「うん。２人共、頼りにしてるね。新さんもよろしくお願いします」

「仰せのままに、我が主」

「似合わないのです」

「うっせ！」

言われなくても分かってたよ！　月様も詠もクスクス笑わないで！

ねねの一言に若干ふてくされ気味になりながら、俺は書簡の山に挑んだ。

「これは……驚いたな」

私にしては珍しく、思わず独り言を洩らしてしまう。

久し振りに訪れた洛陽は、以前の面影を微塵も感じさせないほど活気に満ちていた。

すれ違う民は笑顔を浮かべており、並び立つ店からは客を呼び込む威勢のいい声が響いている。

警備隊らしき兵達も、かつてのように威張り散らし己の欲のまま傍若無人な振る舞いをせず、民と笑顔で言葉を交わしながら職務を果たしている。だからといって気を抜いている訳でもなく、辺りを警戒するその眼は真剣そのもの。

そして、極めつけに子供達が楽しそうに街のあちこちを走り回っている。

どれも以前の洛陽では見られなかった光景だ。

「まさか本当に復興してきているとはね」

実家で姉から話を聞いた時は半信半疑だったが、こうして自分の

目で確かめたからには疑う余地など存在しない。

董卓とは優れた統治者のようだ。

「あとは果たして私が仕えるに足る器の人物かどうか……だな」

小さく呟くと私は歩みを進めるが、歩きながらも周りの観察は怠らない。

その中で更なる発見があった。

裏通りに溢れていた浮浪者が居なくなっていた。まさか処分したのだろうか？

いや、ここまで見事な統治手腕を見せている人間がそのような行動をとるはずがない。もしそうなら、民がこれほどの笑顔で生きられないだろう。だからといって、全ての浮浪者に仕事を与えて給金を支払うほどの財源を簡単に用意出来るものか？

「そこの美人のお姉さん！　出来たての饅頭はいらないかい？」

思考を巡らせていて、自分でも気付かぬうちに立ち止まっていたらしい。

恰幅のいい中年の女性が私に声をかけていた。

「そうだな。一つ頂こう」

「毎度あり！」

代金を支払い品物を受け取ると、一口食べた後に気になった事を

店主に聞いてみた。

「少々お聞きしたい事があるのだが」

「うん？　何だい？」

「少し前まで裏通りに居た大量の浮浪者が居なくなっているのだが、彼らはどうなったか知らないか？」

少々不躾な質問だったが、店主は気分を害した様子もなく答えてくれた。

「ああ、あの連中なら今は立派に働いているよ。警備隊に入ったり、董卓様の軍に入ったり、黄巾党に荒らされた村の復興を手伝っている奴も居るみたいだよ」

「何だと！？　本当か！？」

思わず声を荒らげて詰め寄ってしまう。

ギョッとした店主を見て、自分が何をしたのか気付いた私は謝罪した。

「すまない。つい興奮してしまった」

「いや、あたしは構わないが……急にどうしたんだい？」

店主の疑問に、給金がどのように支払われているのか気になった、と正直に答える。

「なんでも、董卓様の部下の姜維将軍が洛陽中の名士や大商人に頭を下げて援助を頼んだって話だよ。立派な人もいるもんだねえ」

姜維と言えば董卓配下の将で、宛の黄巾党の首領を討ち取ったと

評判の将だ。

噂だと最近では白夜叉の異名で恐れられているらしいが、武芸だけに秀でた人間でもないようだ。

「そうか……ありがとう」

店主に礼を言うと、私は饅頭を食べてから店を離れて近くに居た警備兵に話を聞いた。

どうやらこの兵も元々は浮浪者だったらしいが、姜維に勧誘されて警備隊に入ったようだ。

更に詳しく話を聞こうとすると

「兄貴！　今日もお勤めですか！」

「兄貴言うな！　妙な言い回しを止めろ！」

「すいません！　兄貴！」

「だ～か～ら……」

槍を持った白髪の青年が、民の視線を集めながらこちらへ向かって来ていた。

「もしやあの人が」

「ええ。姜維将軍ですよ」

「そうか……彼が」

警備兵に確認を取った私は改めて彼を見る。

身長は高く顔立ちも整っている。体つきは細めであり、少し見た

感じではとても武人には見えない。

だが多少なりとも武芸をかじっている者なら分かるだろうが、身のこなしに隙がない。

やはり噂通りの武人ではあるようだ。

「……少し話してみるか」

恐らく警邏の最中なのだろうが、道行く民や店主と笑顔で挨拶をしながら遠ざかって行く姜維に近づく。

「一緒に遊ぼう？」

「ごめんな。警邏の途中だから、ゆっくり出来ないんだ」

『ええ～！？』

どうやら子供達と話しているようだ。

「すまない。少しいいだろうか？」

「はい？　何でしょう」

子供達と会話をしていた彼は、私に笑顔で振り返った。

「君から話を聞いてみたくてね、姜維殿」

「はあ……どちら様でしょうか？」

そう言えばまだ名乗っていなかったな。

「これは失礼した。私は司馬懿、字は仲達という者だ。君に興味がわいてね」

話してみたかった、と続けようとしたが出来なかった。

姜維が端整な顔立ちに似合わない間の抜けた表情になったと思ったら――――――

「司馬懿～～～～～～！？」

街中に轟く程の大声で叫んだのだから。

ありのまま　今　起こったことを話すぜ！

おれは　警邏の最中　黒髪長身ボンキュッボンな美人のお姉さんに　話しかけられたと思ったら　その人は名軍師だった。

な、何を言ってるかわからねーと思うがおれにもわからねー。

「……そんなに私の名がおかしいか？」

「あ！？　そうじゃないんです！」

耳を押さえて顔をしかめている司馬懿さんだが、必死に謝ると気

を持ち直してくれた。

「……まあいい。では時間は大丈夫かな？」

「ええっと、警邏の仕事があるのでゆっくり話すのは無理なんですけど」

「構わないさ」

了承を得ると、次は子供達に話しかける。

「それじゃあ悪いけどまた今度な」

「うん！　わかった！」

「今度は一緒に遊んでね！」

「絶対だよ？」

「おう！　またな」

そう言って一人一人頭を撫でると、元気よく子供達は走り去っていく。

「随分慕われているようだね」

「警邏で見回りをしていると自然に接点が増えるんですよ。それにあの笑顔を見てると元気になれますしね。子供達は国の宝ですから笑顔の方が似合いますよ」

司馬懿さんと会話をしながら、再び警邏を始める。

「白夜叉と異名を取る程の武人ともなれば、やはり心根も高潔なのだな」

「俺はまだまだです。……ていうか白夜叉って何ですか？」

伝説の攘夷志士かな？

「君に付いている異名だよ。荊州での戦は有名になっているからね」

ああ、孫仲を討ち取った時のか。

「あの戦は董卓軍の皆や皇甫嵩将軍と朱儁将軍のお陰ですから。俺一人の力ではありません」

「謙遜しなくてもいいだろうに。君は大将首を取ったのだから誇ってもいいはずだ」

「本音ですよ。あと白夜叉って呼ぶのは勘弁して下さい。想像以上に気恥ずかしいです」

異名って実際に呼ばれると、かなり照れるな。

頬を掻きながらそう言うと、司馬懿さんはキョトンとしたあと微笑した。……この人笑うと更に美人やん。

「すまない。存外可愛らしい顔もすると思ってな」

「……男に可愛らしいって言っても喜びませんよ。それより、司馬懿さんが聞きたい事とは何でしょうか？」

何か嫌な方向に流れが傾き出したので、話を逸らしながら本題を切り出す。

「ああ、それは……」

司馬懿さんが俺に聞きたかった事とは、洛陽で実施されている政策についてだった。

いくら三国志で屈指の軍師と言えど、味方でもない以上全てを話

す訳にもいかない。曹操に仕えて俺達の敵になる可能性だって捨てきれないからな。

それでも、答えられるギリギリの範囲で質問に答えていく。

司馬懿さんは俺が答える度に驚いている。

しかし、諸葛亮と対をなす軍師の驚いた顔を見るのは貴重な体験じゃないか？

「そうか……姜維殿が洛陽復興の立役者だったのか」

「ええ！？　違いますよ！」

一通り質問に答え終わると、司馬懿さんから爆弾発言が飛び出した。

「政策を考え出したのは君だろう？」

「それはそうですけど……それも董卓様が俺の発案をしっかり聞いてくれたからです。董卓軍の皆、王允さん達や張世平さん、洛陽の名士の人達の協力があり、何よりも洛陽の民が俺達を信じて政策を受け入れてくれたから、今の日々があると俺は思っています」

……裏通りに居た人達は受け入れすぎてて少し困るけどな。兄貴って呼び方はやめてほしい。

それはともかく、このどれかが欠けていたら洛陽は荒廃したままだったはずだ。

自信を持ってそれだけは言える。

歩みを止めて視線にその意味を込めて司馬懿さんの目を見ると、彼女は不思議な色を瞳に浮かべて俺を見ていた。

姜維殿は私が思っていた以上の人物だった。

生きながら死んでいる民、絶望に染まった都、暗雲に包まれ空も仰げない場所。

比喩表現でもなんでもなく、かつての洛陽は地獄だった。

それが私が見て感じた印象だ。

だが今は違う。

何気ない日常を笑顔で暮らせる民、希望に満ち溢れた都、どこまでも澄み渡り広がる青空が望める場所。

これも私が見て感じた印象だ。

現在の洛陽は大陸で最も幸せな場所なのかもしれない。

私はもちろん、あの曹操でさえ考えつかないであろう政策で、姜維殿はあの暗い地獄をこのような輝く街に生まれ変わらせたのだ。

それなのに、己一人の力ではなく協力してくれた全ての人、そして民のお陰だと躊躇なく言い切る。

それだけの度量を持った人物が、はたしてどれほど世にいるだろうか？

かつて私に仕官を勧誘してきた曹操ならば、その度量もあるかもしれない。

だが、姜維殿には曹操ですら持ちえない革新的とも言える発想力がある。

何よりも、四半刻に満たない僅かな時間だが姜維殿の人となりが理解出来た。

彼に曹操のような王の器はない。

（だが、それでも……私は……）

仕えるべき相手を見つけた喜びで、今までにないくらい心臓が高鳴る。

「……雅（みやび）だ」

「はい？」

王の器がなくとも、誰にも想像できないような道を彼は進む。

確信を持って断言出来る。

その道の果てを私は見てみたい。

「姓は司馬、名は懿、字は仲達。真名は雅」

「は！？　いや、ええ！？」

覇道を歩まなくてもいい。

王道を進まなくてもいい。

君にしか歩めない、君だけの道を、君だけの歩み方で、君らしくどこまでも進んでくれればそれで構わない。

最後に辿り着いたその場所に華々しい栄華も万雷の賞賛も、例えなにもなかろうとも私は命尽きるまでついて行こう。

君が戦場で窮せば私が戦況を変える。

君が日常で迷えば私が背中を支える。

だから……

「私が学び培った全ての智の力、好きなように生かしてくれ」

共に歩むくらいは構わないだろう？

司馬懿仲達（後書き）

初のオリキャラ、司馬懿さんです。

イメージとしては諸葛亮（朱里）の真逆という事で、クールな大人のお姉さんです。

大人っぽさを出そうと頑張ったつもりですがまだまだですね。

これからいい味を出していけるように努力します。

不穏な気配

平和になった洛陽で、甲高い金属音が鳴り響いている。

その金属音は一向に鳴り止む気配が無く、打ち合えば打ち合う程に激しさを増していく。

金属音は、飛将軍と白夜叉の得物がぶつかり合う衝撃により発生していた。

「はぁぁぁ！！」

裂帛の気合いと共に、目にも止まらぬ速度で姜維の鋭い突きが放たれる。

「……まだ遅い」

しかし、呂布はそれを事も無げに捌ききると反撃の横薙を振るう。

「ぐっ！？」

修羅の柄で受け止めた姜維だが、その勢いを殺しきれず数歩後退してしまう。

「……隙あり」

姜維が後退した分だけ呂布は踏み込み、先ほどの姜維の突き以上の速さで猛攻をしかける。

淡々とした口調とは裏腹に、嵐のような勢いで方天画戟が左右から姜維に迫る。

「こ……のぉ！！」

だが姜維もそれ以上後退する事はなく、むしろ自分から前に出て直撃を避けた。

そして前進した勢いそのままに呂布に肩から激突する。

「……ん！」

体当たりをまともに食らった呂布は、この戦いの中で初めて後退する。

「もらった！！」

好機と見た姜維は、ここぞとばかりに真一文字に修羅を一閃した。

事実、この状況でなら確実に捉える。

そのくらい完璧な一撃だった。

しかし、相手は現時点で大陸最強の呂奉先だ。

そしてその強さは、名だたる武人達の精練された武とは一線を画す。

「……ふ」

「何！？」

受け止められないと見るやその場で跳躍してかわすと、空中で上段から方天画戟を振り下ろした。

「うあ！？」

修羅を素早く引き戻しその一撃を何とか受け止めた姜維だったが、前のめりに体勢を崩してしまう。

だが、呂布の攻撃はまだ終わらない。

「しまっ……！！」

振り下ろした方天画戟を切り上げる。

体勢を崩していた姜維に受けきる余力は無く、あっさりと修羅をその手から弾き飛ばされた。

そして姜維が気付いた瞬間には――――

「……恋の勝ち」

「……ああ」

喉元に方天画戟が突きつけられていた。

「くっそ～！　また負けたか！」

悔しさを胸に秘めて、政庁の中庭に大の字に寝転がる。

「……最後はちょっと危なかった」

隣に腰掛けながら恋が感想を言う。

俺としては完璧なタイミングだったんだけど、あれでちょっとか。

「恋は本当に強いな」

「……新も前より強くなってる」

そうは言われても一方的に負けた俺としては全く実感が湧かない。

「……まだまだ恋に勝つ日は遠いか」

武の頂は果てしなく遠い事を再確認した。

それが今日の収穫だな。

「私から見ると新も一流の武人だと言えると思うが」

「雅か。見てたの？」

「うん。廊下を歩いていたら、たまたま目に入ったからね。悪いとは思ったが見学させてもらったよ」

後方に飛ばされていた修羅を持って、雅がこっちに向かってきた。

「ほら、新」
「ありがとう」

礼を言って修羅を受け取り、寝そべっていた体を起こす。

「……お仕事は終わったの？」
「私の分はね。だが、霞と華雄は部隊の報告書やら何やらがかなり溜まっていたようだから、詠とねねに監視されながら机に向かっているよ」
「何してんだあの人達は……」

らしいっちゃらしいけどさ。

「それにしても、雅は相変わらず手際がいいね」
「政策立案者から直接手解きを受けたからには下手は打てないさ。何より主君の顔に泥を塗るマネはしないよ」

そう笑って恋と真逆の位置に雅は腰を下ろす。

雅が俺達の仲間になってから数日が経過した。

やはり雅は超一流と言える才知の持ち主だった。

洛陽で実施されている政策の内容を一度聞いただけで全て覚えて、なおかつ俺や詠をも超えるスピードで案件を処理している。

お陰で月様達の負担がかなり軽減されているし、俺も久しぶりに鍛錬する時間を作れたしな。

その上、軍略家としても超一流だ。

現代で言う将棋みたいな遊びで、董卓軍筆頭軍師の詠を完膚無きまでに叩きのめしてたからな。

その後にねねも挑んだが、これまたボコボコにしていた。

2人共、最後は半ベソかいてたぞ。

まあそんな事もあったが、今では皆と真名も交換して仲間として上手く付き合っていけていると思う。

だけど、敢えて一つ苦言を呈するならば

「ちなみに主君っていうのは……」

「新、君以外に誰がいるんだい？」

俺に仕えちゃってる所だな。

雅に敬語を使ってないのもそれが理由だ。

「俺は月様に仕えている身だから、主君じゃないと思うんだけど」

「もちろん月の為にも働くさ。ただ、私が心の主と定めているのは新だけという話だ」

そんなジャイ○ンみたいな事を言われても。

「……恋も新に仕える」

「仕えなくていいから！　今まで通り月様の為に一緒に頑張ろう！？」

「……恋、要らない？」

「違うよ！？　恋は俺にとって凄く大事な子だから！　泣きそうな顔をしないでくれ！」

チワワみたいな目で見つめないで！！

「……ん。良かった」

必死に恋の頭を撫でるとさっきまで瞳に浮かんでた大粒の涙もどこへやら、無表情に喜びの色を浮かべて擦りよってきた……ってオイ！

「れ、れれれ恋さん！？　なぜ私めに抱きついてらっしゃるのですか！？」

「……ダメ？」

「ダ、ダメじゃないけどさ……」

上目遣いは反則だチクショウ！！

そんなん断れる訳ないだろう！？

「ふむ、恋一人を特別扱いするのは良くないな。家臣の私も甘えさせてもらうとしよう」

「家臣じゃないから！　抱きつかないで！」

左腕に恋より大きいポヨポヨしたものが当たってますから！

前世を含めても異性にあまり慣れてない俺には刺激が強すぎる！

「姜維様、客人が参られました」

「副長！　良い所に来てくれた！」

嬉しいやら恥ずかしいやら、しどろもどろになっていた俺には副長が天使に見えた。

「……こんな日の明るい内から」

「誤解だ！？」

もとい、天使は実は悪魔でした。

俺の両腕を見た途端、見る見るうちに視線が絶対零度まで冷え込み、今ではゴミを見る目になっている。

俺が悪いのかな？

「言い訳は結構です。そんな事より王允殿がお待ちです。急いで部屋に戻って下さい」

「王允殿が！？」

司徒の位にある人がわざわざ会いにくるなんて普通じゃないぞ？

「恋、雅。そういう事だから放してくれ」

「……残念」

「まあ、今日はこれで満足しておこう」

渋々といった様子で腕を放す2人。

「それじゃあ俺は部屋に戻るな」

「粗相のないようにしてくださいね。迷惑かけちゃ駄目ですよ？」

副長は俺のお母さんか。

「……また後で」
「ああ」
最後に恋の頭を一撫でして小走りで部屋へ向かう。
「一体何の用だろうな……」

「お待たせして申し訳有りません」
「なに、突然訪ねたのはワシじゃからな。気になさる事はない」
王允さんは立派な白髭を蓄えた初老の男性だ。
客間の中で茶を啜り、髭をいじりながら待ってくれていた。
「本日はどのような御用で参られたのでしょうか？　董卓様は政務の最中ですが、所用ならばお目通り致します」
「董卓殿には既にお会いした。その後、姜維殿に会いに来たのじゃよ」
あれ？　月様には会ったのか。

なら本当に何の用だ？

疑問を浮かべながらも断りを入れて席に着く。

「それでは私にどのような御用でしょう？」

「うむ、単刀直入に言おう。……最近、宮廷の動きが妙にきな臭いのじゃ。現段階では何を考えておるのかまでは分からんが、どうにも嫌な予感がする。念の為に用心なされ」

「……十常侍でしょうか？」

おそらくのう、と頷く王允さん。

「この頃は私達に圧力をかけてくる事もなくなってきたので、安心していたのですが」

「儂もじゃ。じゃが、思い返して見ると連中にしては退き際が良過ぎる気がしての。いくら儂や揚彪がお主達に協力しているとは言え、あっさり退く連中ではないはずじゃ」

確かにな。自分達が権力を握る為ならどんな手段でも使う連中の集まりだ。

洛陽を実質的に動かしている月様を邪魔に思って当然か。

「それに十常侍だけではなく、何進も動き始めておる。狡猾さでは十常侍に劣るが、何進が持っておる軍事力は侮れん。幸い、何進配下の董承が儂に情報を流してくれておるから動きは掴めておるがの」

「……その情報を全て信用して大丈夫なんですか？」

万が一という可能性も充分ありえる。

「董承は常々洛陽を立ち直らせたいと考えておった。じゃが圧倒的な権力差にどうする事も出来なくての、胸を痛めておった。そこに現れたのがお主達じゃ」

そこまで言うと、王允さんは茶を啜る。

「十常侍と何進という権力者に臆する事なく、見事に洛陽を復興させた董卓殿を董承はいたく尊敬しておっての。己から董卓殿の力になりたいと今回のように情報提供をしてくれておる。それに、奴は昔から義に厚い」

「そんな方が不義理なマネをするはずないという事ですか」

「うむ」

王允さんがそこまで信頼を置いているなら大丈夫だろ。

史実でも董承は漢王朝に忠誠を誓っていた忠臣だし、月様に刃を向ける事もなさそうだな。

「今の話、董卓様には……」

「もちろん話しておる。賈駆殿も一層の警戒をすると言うておったわ」

「なら一安心ですね」

「あれだけの知恵者とお主達のような猛将が４人も付いておるのじゃ。董卓殿には下手に手出し出来んじゃろう。じゃが気を緩めすぎてはいかんぞ？」

「ええ。わざわざありがとうございました」

お礼を言うと王允さんは、何の何の、と首を振る。

本当に良い人だ。

「それでのう、今日はもう一つ用があってお主を訪ねたのじゃ」

王允さんはそう言うと、腰に掛けている宝剣に手をかける。

その剣は、煌びやかな装飾が施されてはいるが切れ味は些かも鈍っておらず、間違いなく名剣に数えられるであろう宝剣……

七星宝刀。

王允から曹操に手渡され、未遂に終わった董卓暗殺に使用された貴重な剣だ。

「お主に、この七星宝刀を受け取って貰いたい」

「え!?　そんな宝剣受け取れませんよ!」

何言ってんだこの人!?

「この洛陽を復興させたのは間違いなく董卓殿、だが影からそれを支え民に生きる力を与えたのは姜維殿じゃ」

「私は大した事は……」

「無論、賈駆殿や他の皆の力も充分あるじゃろう。それでも、政策を立案し実行の為に奔走した姜維殿の力が必要不可欠じゃったのは分かりきっておる。洛陽の民も董卓殿に感謝しておるが、それ以上にお主を称えておるのじゃよ」

「う……」

確かに、俺が政策を提案した事を何故か皆知ってるもんな。

感謝されるのは悪くないが、され過ぎると逆に腰が引ける。

「漢の司徒として、洛陽で生きる一人の人間として、お主に感謝の証としてこの剣を受け取って貰いたいのじゃ」
「しかし、その剣は王允殿の家系に伝わる大切な剣でしょう？　簡単には受け取れませんよ」
「構わんよ。過去も確かに大切じゃが、人が生きるのは現在じゃ。ならば、この剣を今を生きる人間として誰かに譲り渡しても問題あるまいて」

それに、と王允さんは言葉を続ける。

「この宝剣も素晴らしい武人に使ってもらえるなら本望じゃろう。是非とも戦場で役立て下され。切れ味は自信を持ってお勧め出来まする」

俺の目を見ながら紡がれる言葉。

その言葉の中からは、ひたすら真っ直ぐな王允さんの好意しか感じられない。

……ここまで言ってもらって受け取らないのは、かえって失礼だな。

「分かりました。ありがたく頂戴致します」

両手を差し伸べてしっかり受け取る。

「おお、そうか！　礼を述べますぞ」
「いえ、礼を言うのは私の方です。このような素晴らしい宝剣を頂けるだけではなく、王允殿からの感謝の御言葉が何よりも褒美とな

りました」

司徒から直接感謝されるなんて、身に余る光栄だ。

「このご恩に報いる為にも、より一層の働きを示しましょう」

「うむ！　儂も期待しておりますぞ」

そう言って王允さんは、心底嬉しそうに高らかな笑い声を上げた。

王允さんは上機嫌で屋敷に戻っていった。

「よし、それじゃあ鍛錬再開するか」

せっかく名剣を譲り受けたんだ。

それに恥じない腕前は持たないとな。

「それにしても、剣なんて素人だからな。どうやって鍛錬すればいいのやら」

母上から槍術を学んではいるが、剣術なんてさっぱり習っていない。

普通なら剣術を学んでから槍術に入るんだろうけど、『面倒くさ

いから教えん！』と言い切ってたもんな。

「……って中庭に恋と副長がいるじゃん」

武芸百般の恋と剣の使い手の副長なら、先生役にもピッタリだ。

「そうと決めたら善は急げだ」

さっそく教えてもらおう。

頭上に広がる青空のように晴れ晴れとした気分の中、中庭に向けて歩き出す俺の足取りは自分でも驚くくらい軽かった。

姜維の剣（前書き）

今回は量が少な目です。

前話の最後に付け足すつもりでしたが、キリが悪くなりそうだったので分割しました。

相変わらずの駄文ですが、楽しんで頂ければ幸いです。

姜維の剣

王允さんから七星宝刀を譲り受けた俺は、中庭に戻るとすぐに剣術の鍛錬を始めた。

幸い副長と雅が中庭に残っていたので、すぐに鍛錬相手を頼む事が出来た。

恋は動物達の食事を用意しに行ったらしい。

ちなみに先生役は副長だ。

だが、剣の鍛錬は想像以上に難航していた。

「はっ！」

「腕力だけで剣を振らずにもっと体重を乗せて下さい」

自分の感覚ではかなり力を入れて振り下ろしたつもりだったが、副長にあっさりと弾かれる。

「なかなか難しいな」

「そんな事ないですよ。初めてにしてはなかなか筋が良いです」

そうなのか？　前世じゃ物覚えは悪い方だったけどな。

でも良く考えたら槍術も割と早めにマスター出来たし、転生した事が関係してるのかもな。

「手が止まってますよ？」

「うおっ！？」

危ねえ！！　受け止めなかったらバッサリ斬られてたぞ！？

「よく止めましたね」

「当たり前だ！　て言うか本気で斬ろうとしたろ！？」

「峰打ちです」

「嘘だッ！！！」

明らかに刃の方だった！

そもそもアンタの剣は両刃だろうが！

「戦場では集中が途切れた者から命を落とします。今のは集中力が散漫になった姜維様に非があると思いますが？」

「ぐ……」

「それに鍛錬を始める前に私は言ったはずです。『まずは危険が少ない模造刀から始めましょう』と。それを断ったのは姜維様ではありませんでしたか？」

正論過ぎて反論出来ん。

だけど全て本当の事だもんな。

「そうだな、俺が悪かった。ごめん」

「ええ。そういう姜維様の素直な所、私は大好きですよ？」

「……からかうなって」

副長だって間違いなく美人に分類される女性なんだ。

冗談だと分かってても照れる。

「おや？　新、照れてるのかい」

「雅もこういう時だけ入ってこなくていいから！」

基本クールな癖に俺をからかう時だけニヤケるのはどうかと思う。

東屋でまったりしている雅にツッコミを入れる。

だがそこに……

「また余所見とは感心しませんね」

「！！　今度は突きかっ！？」

しかも顔面狙いかよ！

「さすがです。本当によく避けますね」

「そりゃどうも！」

よけなきゃ死ぬもん、必死にもなるさ。

俺は孫の顔を見るまでは死ねないしな。

七星宝刀を正眼に構え直して、副長に向かって駆け出す。

（体全体を使って……振る！！）

「せいっ！」

「む、今の袈裟切りはなかなか良かったです」

それでも止められるか。

けど大体のコツはなんとなくだが掴めてきたぞ。

振り下ろした刃を再び切り上げて逆袈裟切り、そこから連撃へと繋げる。

「くっ……これは……！」

ここで初めて副長の顔に焦りの色が浮かぶ。

あれ？　もしかして勝てるかも。

「悪いね。ようやく剣の動きに慣れたみたいだ」

「早すぎませんか！？　まだ鍛錬を始めて半刻も経ってませんよ！？」

そんな事言ったってしょうがないじゃないか。

（腰を落として……体重を乗せる！！）

副長から教えてもらった剣のイロハ、俺が叩き込まれてきた槍術の動き。

この２つの動きが俺の中でようやく噛み合った。

「ぐっ！」

一度思いっきり薙払い、副長との距離を無理やりこじ開ける。

そして噛み合った歯車から、槍術を取り入れた上で俺に最も適した剣の構えが導き出される。

「な、何ですか！？　その構えは！」

左手に七星宝刀を持ち、刃が地面に水平になるように構えて右手を添える。

「俺にとって一番シックリくるのがこの構えみたいだ」

驚く副長を余所に、集中力を高めて一気に距離を詰める。

「速い！？」

雅の驚きを耳にしながら俺は全力で平突きを打つ。

「はぁぁぁぁ！！！」

（牙〇壱式！！！）

心の中で技名を叫びながら放たれた平突きは……

「きゃあ！？」

狙い違わず副長の剣を弾き飛ばした。

「……信じられん」

俺が副長の剣を弾き飛ばして数十秒、この中庭を沈黙が包んでいたが、いち早く言葉を発したのは東屋で見学していた雅だった。

「新、君は剣を使うのは本当に今日が初めてなのか？」

「うん。生まれて初めてだ」

答えながら七星宝刀を鞘に納める。

即答した俺を見て、雅は初対面の時のように不思議な感情を瞳に浮かべて……

「ふふっ……あはははは！！」

クールな性格に全く似合わない笑い声をあげた。

……何故！？

「ど、どうしたの！？」

「これが笑わずにいられないだろう！？　今日初めて剣を持った人間が、何度も戦場で剣を振るってきた武将に勝ったんだぞ！？　くくっ……ははは！！」

目元の涙を拭いながら、なおも雅は笑い続ける。

「しかも相手はただの一兵卒ではない！　君の副将で恋や霞、華雄が認める程の使い手の高順だ！！　ふふふ……新、君はどれだけの可能性を秘めているんだ！！」

あ～、そう言われると確かに凄いのかも知れない。

「ってそうだ！　副長、大丈夫か！？」

雅の口から副長の名が出た瞬間、未だに放心状態で俗に言う女の子座りをしている副長を思い出す。

「あ……はい」

手を差し伸べるとそれを掴み、ようやく立ち上がる。

「驚きました。まさかこの短時間でここまで急成長するとは……」
「本当にごめんな。怪我なかったか？」
「はい、大丈夫です」
「良かった～」

仲間を傷つけるなんて絶対にしたくない。

まあ『普段から真剣を使って手合わせしてる癖に』って言われたらそこまでだが。

でもそれは皆一緒だからお互い様か。

「姜維様、改めて感服致しました。姜維隊の副将として恥じぬように今後も修練を重ねます」
「うん、俺も剣の鍛錬を続けるからまた手合わせしような」
「はい」

握手を交わす俺達を夕陽が照らしているのは間違いないだろう。

まだ昼過ぎだが。

「ところで副長、俺の剣術って実戦でも使えるかな？」
「充分使えますよ。しっかり体重移動も出来ていましたし、最後の突きも素晴らしい一撃でした」
「〇突だからね」
「？　何ですか？」

ヤベ、口が滑った。

「何でもない」

若干冷や汗をかいてしまった。

「ふう……」
「あ、落ち着いた？」
「ああ、ようやくね」

笑いが収まった雅が近くにやって来た。

「いくら何でも笑いすぎですよ、司馬懿様」
「すまない。だが、それも高順の腕前を評価していたからこそさ」
「まあ、お気持ちは分かりますが」

そこまで話した雅は、真剣な顔つきになると向き直り、俺の目を真っ直ぐ見据えた。

……あれ、デジャヴだぞ？

「全く、君はどこまで私を惹きつければ気が済むのかな」
「言い回しおかしくない？」
「やはり、君を主君と仰いだ私の目に狂いはなかったようだ。自分

の慧眼を誉めてやりたいよ」
「俺の話聞いてる？」
「この司馬懿仲達、より一層の忠義を持って君に尽くそう。今後ともよろしく頼むよ」
言いたい事を全て言い切った雅は、嬉しそうに政庁の中に戻っていった。
「……俺を主君って言ってる割に、主君の言葉全部無視してなかった？」
「そのくらい楽しかったんですよ」
剣を鞘にしまいながら副長が答える。
何か複雑な気分だ。
「まあいいや。俺達も戻るか」
「はい。どこまでもお供します」
「……そういうのいいから」
副長、お前もか。
雅と同じくらい嬉しそうな副長と共に、俺も政庁に足を進めていった。
「剣術も極めれば弐式や参式、零式も出来るかもな……」
「先ほども仰っていましたが、何の事ですか？」

「……何でもない」

姜維の剣（後書き）

まず謝罪を。

前話からの進展がなくてすいません。

どうしても牙〇を使わせてみたかったんです（笑）

次回はしっかり進展予定なので、もし良ければ読んでやって下さい。

ではでは。

詠を見ると心臓の音が高鳴る。

心拍数が上昇しているのが自分でもよく分かる。

詠の目を見ようとしても、直視できない。

不思議な高揚感が全身を包む。

だけど、俺はこの胸に広がるこの感情を知っている。

俺が久し振りに味わうこの気持ち。

そう、これは……

母に小遣いをねだる時のあの緊張感だ!!

「詠、もう少し部隊の予算を回して欲しいんですけど大丈夫ですか？」

軍師に届け、切なる願い！

「金額によるわね。どのくらい必要なの？」

「ざっと見積もってこの位なんですけど」

見積書を詠に渡し、返答を待つ。

これが俺の……ファイナ◯アンサーだ！

「……この程度の金額なら大丈夫よ。すぐに手配するわ」

「ＹＥＳ！！」

「え？」

「おっと何でもないです。ありがとうございます」

危ない危ない。

めっちゃ自然に英単語が出てしまった。

「まあいいわ。それより、この予算は一体何に使うの？」

俺が申請した予算の使い道。

それは鐙と鞍を開発するためだ。

そもそもこの時代には鐙が存在せず、騎馬隊の人間は太腿で馬の胴体を挟み込み、不安定な体勢で戦場を駆け抜けなければならなかった。

それゆえ騎馬隊は涼州や幽州などの一部を除き数が少なく、戦場で重宝されたのだ。

俺だって子供の頃から母上に馬術を叩き込まれていなければ、今こうして騎馬隊を率いるなんて絶対出来なかった。

鞍もあるにはあるんだが、材質が革製じゃないので尋常じゃなく尻が痛くなる。

いや、笑い事じゃないんだって。

けっこうな死活問題だ。

だが、俺の知識を活用したこの未来製の鐙と鞍があれば、騎馬隊の安定性は遥かに向上する。

そうすれば戦闘をもっと有利に進める事が出来るはずだ。

その辺を説明すると、詠も納得の様子を見せた。

「なるほど。確かにアンタの説明通りなら騎馬隊の活用の幅がうんと広がりそうだわ」

「ええ、洛陽で職がなかった人達を受け入れたとは言え、恋と華雄さんの隊が増員しただけですから」

「霞と新の隊は以前のままだから装備だけでも充実させようって事ね」

軍馬一頭買うだけでも、かなりの資金が必要になる。

さすがに今の俺達に相当数の軍馬を揃えるほどの財力はない。

「だけど、資金の目処は立っても装備を製作してくれる商人のアテはあるの？」

「それもバッチリです。定食屋のオッチャンに腕が良くて仕事も早い人を紹介してもらいましたから」

この洛陽の街で俺が知らない店なんてもう無いね。

市井の人間の情報網は侮れないもんだ。

「ならボクが言う事は何もないわ。完成したら見せてもらうわよ」

「もちろんです。楽しみにしてて下さい」

出来映えには自信があるからな。

それより気になっている事がある。

「ところで、月様はどこに居るんですか？　雅達の姿も見えませんし」

いつもなら月様とねね、雅も居るんだが今日はこの執務室には俺と詠しか居ない。

武官組が居ないのはいつもの事だが。

「ああ、月達なら……」

詠が答えようとした次の瞬間……

『こんな仕事、これ以上やってられるか～～～～！！』

『もう書簡は嫌や～～～～！！』

霞と華雄さんの悲痛な叫びが轟いた。

……両隣の部屋から。

「……華雄と霞の見張りをしてるわ」

心底疲れた顔で告げる詠。

「詠、もしかして……」

「アンタの想像通りよ。あの2人が溜め込んでいた仕事、まだ残ってるの」

マジっすか。

その話を雅から聞いたの3日前っすよ？

「3日かけて終わらないって……」

「……ボクもさすがに予想外だったわ」

どれだけ仕事サボってたんだよ……

「ねねと雅が見張りをするのは分からなくもないけど、月様まで隣に行っているのは意外ですね」

おっとりしてる月様に見張りなんて出来ない気がする。

「霞はともかく、華雄が唯一頭が上がらないのが月だからよ」

「納得です」

華雄さん対策か。

つうか月様達が居ないって事は詠が1人で政務を担当するのか？

さすがに無茶だろう。

「詠、俺の部隊の調練は副長に頼んでおくから一緒に政務を頑張りましょう」

「……そうね、ありがとう」

ツンデレ軍師の詠が素直にお礼を言うなんて、相当精神的にキてるんだな。

いたたまれない気持ちになった俺は、副長への伝言を侍女に頼んだ後、政務に取りかかった……

『董卓様、私はもう限界です！　少しでいいので休憩を下さい！！』

『へぅ～……ごめんなさい華雄さん。詠ちゃんに全部終わるまで部屋から出さないよう頼まれているんです』

『な……そんなぁ……』

『華雄の場合、自業自得なのです。喋る暇があるなら手をチャキチャキ動かすのです』

『陳宮……貴様、覚えていろよ…』

『忘れたのです』

『貴様ぁ！』
『へぅ～2人共喧嘩しないで下さい～！』

『霞、次はこの書簡だ』
『雅っち、後生や！　ちょっとでええから手伝ってえな！！』
『すまないがそれは無理だ。甘やかすなと詠にキツく言われていてね』
『……ふふ、そういう事かいな。せやけど詠もまだまだ甘い！　神速の二つ名が伊達や無いっちゅう事を見せたるで！』
『ほう、窓から逃げるか。確かに私では追いつかないだろうな。だが、戦とは常に万全の策を用意するものだよ』
『……霞、逃げちゃダメ』
『げ、恋！！　何でこないなとこにおんねや！？』
『……雅に頼まれた』
『ご苦労、恋』
『イタタ！　分かった、もう逃げへん！　逃げへんから腕放してや！　綺麗に極まっとんねん！』

少し騒がしすぎる作業用ＢＧＭを聞きながら。

「……賈駆、終わったぞ。これで文句あるまい」
「あら、思ったより早かったわね」

書簡を山ほど持って、疲れきった表情の華雄さんが姿を見せたのは、それから一刻後のことだった。

「お疲れ様でした、華雄さん」
「おお、姜維か？　久し振りだな」
４日ぶりに会いましたもんね。
「月様とねねもお疲れ様でした」
「はい、新さんもお疲れ様でした。詠ちゃんのお手伝いしてくれたんですよね」
「いえいえ、お気遣いなく」
「全く、猪の相手は疲れるのです」
「ねね、喧嘩になるぞ？」
「……黙れ、陳宮」
力なく椅子に座り込む華雄さん。
重症だな。
「え～い～、これでええやろ？　もうしばらく文字は見たないわ……」
「お疲れ、霞」
ここで霞も戻ってきた。
華雄さんに負けず劣らずグッタリしてる。
「新～ウチ頑張ったやろ？　褒めてえな」
「褒めるも何もない気がするけどな」
とか言いながら擦り寄ってきた霞の頭を撫でる辺り、俺も甘いん

だろう。

「ふふん、気持ちええなあ」

「……」

「……華雄さんも頑張りましたね」

「ふあ!?　き、気安く撫でるな!!」

羨ましそうな目で見てたから撫でたんだけど気のせいだったか。

「華雄、顔が緩みきってるよ」

「だ、断じて違うぞ！　司馬懿！」

「……かゆと霞だけズルい」

恋と雅も戻ってきて、執務室が更なる混沌に包まれる。

ようやく董卓軍っぽくなったな。

「……うん、不備はないわね。仕方ないから今回はこれで勘弁してあげるわ」

「本当か!?」

「いよっしゃあ！　久し振りにシャバの空気が味わえるで～!!」

点検し終えた詠の言葉を聞いた途端、飛び上がって喜ぶ2人を見て、皆苦笑いだ。

つうか霞はそんな言葉どこで覚えた？

「勘違いするんじゃないわよ？　もし次に同じようなマネをやらかしたら、この程度じゃ済まさないんだからね」

「当たり前だ。私とて二度と同じ愚は繰り返さん」

「分かっとるって。詠は心配性やな～」

今の浮かれてる2人を見たら誰でも心配するって。

「ほな新、お酒飲みに行こか」

「は？　いや、俺は仕事があるから無理」

そもそも、まだ昼過ぎだ。

飲むには早過ぎる時間帯だろ。

「待て張遼、姜維は私と手合わせをするのだから置いてゆけ。酒は一人で飲むがいい」

「だから仕事があるんですけど」

「何言っとんねん華雄！　新はウチと一緒に行くんや！　手合わせはいつでも出来るやろ！」

「武人たる者、腕を磨かずに何とする！　酒こそいつでも飲めるだろうが！」

俺の言葉を聞こうともせず、2人はヒートアップしていく。

「ふふ、新。人気者は辛いな」

「なんだろう、あんまり嬉しくない」

どうせなら、もっとキャッキャウフフなモテ方が良かった。

あ、俺なんかじゃ無理か。

「新！？　急に泣き出してどうしたのですか！」

「ううん、何でもない。自分の顔を思い出したら泣きたくなっただ

けだから」
「……大丈夫。新はカッコいい」
「恋、ありがとな」
例えお世辞でも嬉しいね。
「新さん、霞さん達と一緒に出かけてあげて下さい」
「え？　でも……」
恋に頭を撫でられ慰められていると、月様から予想外の言葉がかかった。
「洛陽に戻ってきてから、新さんはずっと働き詰めでしたから。今日はゆっくり過ごして下さい」
「働き詰めと言うなら月様達だってそうじゃないですか。俺だけ休むなんて出来ませんよ」
「ボク達は平気よ、ただアンタは少し働き過ぎだと思うわ。警邏もして政務もして兵の調練もして、なおかつ恋と模擬戦までしてるんだもの」
政務に関しては、最初の頃に詠が大分押し付けてきてた気がする。
「……その目は何よ？」
「何でもないです」
さすが軍師、鋭いな。
「そういうことなので、新はサッサと消えるのです。ここに居られても邪魔なのです」
「幸い、今日の政務はあまり量が多くないからね。君が居なくても

私達だけで直ぐに終わるさ」
「……新は一杯頑張った。今日は恋が頑張るから休んでて」

ヤベ、嬉しくて泣きそうだ。

皆良い人過ぎるだろ。

「……分かりました。お言葉に甘えさせて貰います」
「はい。ゆっくりしてきて下さいね」

ちょうど霞と華雄さんの話し合いも一段落したみたいだ。

「姜維、まず私と手合わせをしろ」
「その後は酒に付き合ってもらうで」
「御意です」

出来れば俺の意見も取り入れてもらえば嬉しかったな。

華雄さんと霞に両腕を掴まれ連行されながら、俺は顔が綻んでいるのを感じていた。

「詠、霞と華雄まで休ませて良かったのですか？」
「あれだけ浮かれてる2人に任せられる仕事なんて有る訳ないじゃない」
「やれやれ、素直じゃないね」
「何か言った、雅？」
「……詠は優しい」

「そんなのじゃないわよ！」
「ふふ、詠ちゃんったら照れちゃって」
「ゆ～え～」

「ぷは～、やっぱ酒はええな～！」
「うむ、久し振りだから格別だな」
「飲み過ぎないでね？　２人共」

華雄さんと模擬戦をした俺は、霞行きつけという酒屋を訪れていた。

最近学んだ剣を披露した事で霞の闘争本能に火が点き、霞まで乱入してきた手合わせは地獄のような辛さだったと述べておく。

気がついた時には夕餉時になっており、酒を飲むには良い時間になっている。

この酒屋にも人が溢れており、皆が今日という日の終わりを楽しんでいる。

……こういう光景もいいなあ。

「酒はいいね。酒は心を潤してくれる。人類の生み出した文化の極みだよ。そうは思わないかい？　張遼君」
「いいこと言うやんけ～新！　せや、酒は文化の極みや～！！」
「うおっ！？　馬鹿者！　酒が零れるわ！」

華雄さんの注意も何のその。

スーパーハイテンションの霞は聞く耳持たず、浴びるように飲んでいく。

……よっぽどストレス溜まってたんだな。

「まったく……はしゃぎすぎだ」

「まあ良いじゃないですか。それより華雄さん、御一献」

「すまんな」

酒を注ぐと華雄さんは一気に飲み干す。

「良い飲みっぷりですね」

「ふ、まあな。ほら、返盃だ」

「ありがとうございます」

俺も負けじと一気に飲み干す。

「姜維もなかなかやるではないか」

「村に住んでいた時に良く飲んでましたからね。そこそこ酒には強いと思いますよ」

酒も入っているせいか会話も弾む。

俺はツマミを時々口に運びながら、華雄さんと語り合っていた。

しかし、霞が一人で飲み続けるなんて有り得ないわけで。

「新〜！　華雄ばっかり構わんとウチの相手もしてや〜！　寂しい

わ～」
「分かってるよ。ささ、お嬢様。まず御一献」
「にゃはは～！　苦しゅうない！」
お嬢様と言われた事に満更でもない様子の霞。
結構な大きさの杯に注いだのだが、ものともせずに飲み干す。
「ほれ、新も飲みや！　お嬢様の労いの杯やで？」
「有り難く頂戴致します」
こんな豪快なお嬢様いねえよ。
そう思いながらも杯を空ける。
「いや～、にしても今日の酒はホンマに楽しいわ！」
「お前はいつも楽しんでいるだろうに」
「はあ、華雄は分かっとらんな。確かにウチは酒を飲む時はいつも楽しんどる。せやけど今日はその中でも特別楽しいっちゅう事や！」
霞の言いたい事も分かる気がする。
「この状況がそう思わせているんだろうな」
杯を置き、店内を見回す。
客の顔には一様に笑顔が浮かんでおり、見てるこっちも楽しくなってくる。
俺達が民を救えた。

俺達がこの笑顔を守れた。

「俺達が頑張った結果をこうして感じながら飲めるんだ。楽しくないはずが無いよ」

もしかしたら、もっと多くの民を救えたかもしれない。

もしかしたら、もっと多くの笑顔を守れたかもしれない。

その想いが全く無いとは言わない。

現に今も、この大陸のどこかで苦しんでいる人が居るだろうから。

「全てを守るなんて大それた事が簡単に出来るとは思わない。だけど、目の前で苦しんでいる人が居るなら俺は全力で助けたい」

それでも、目に映る範囲の人々を守れたんだ。

湧き上がってくる誇らしい気持ちに少しくらい浸っても良いだろ？

「そのためなら俺はいくらでも頑張れるさ」

転生当初はこんな道を進むなんて想像もつかなかった。

こんな風に考えるようになったのも皆の影響だろうな。

「……やっぱり新はええ男やな」

「うえ！？　急に何言ってんの！？」

俺なんてベストオブ凡人だぞ？

「姜維、お前が董卓様の配下になって良かったと心からそう思うぞ」

「華雄さんまで勘弁して下さいよ……」

基本的に俺は誉められるのに弱いんだ。

「姜維、どうかしたか？」

あんまり誉められると俺は……

「ごめんなさい。こういう時、どんな顔をすればいいか分からないの」

「笑えばいいと思うで」

「時空を越えて繋がった～～！？」

「本当にどうした！？」

まさかの名シーン再現ですよ！？

テンション上がらずにいられないっしょ！

「……ちょっと酔ってきたみたいです」

だけど、この時代の人間に通じるはずもなく。

案の定お客さんの注目を集めてしまった。

へぅ……恥ずかしい。

「そうか。ならいいが」

「シンドイなら休んでて構へんで？」
「いや、まだ大丈夫だよ。せっかくの機会だしね」
もう少し楽しみたいのが本音だ。
「よう言った！　ならウチが奢ったる！　どんどん飲みや！」
「霞が奢ってくれるなんて珍しいな」
「ならば張遼の気が変わらんうちに飲むとしよう」
「霞は気まぐれですもんね」
「何やて！？　どういう意味や！」
久し振りの休日はこうして過ぎていった。
次に酒を飲む時は董卓軍の皆揃って楽しみたいね。
ちなみにこれは蛇足だが、閉店ギリギリまで飲み続けた俺達は手持ちの合計金額では足りないほど飲んでしまった。
後日届いた請求書の金額を見た詠は烈火の如く怒りだし、俺達３人は当分の禁酒を言い渡されてしまった。
皆で飲むという俺の願いはしばらく叶わなそうだ。

集まる豪傑

大陸各地で発生していた黄巾の乱も終結に向かい始めていた。

黄巾党討伐の中で特に名を天下に轟かせているのは主に3人。

幽州で義勇兵を募り、民からの強い信望を集めながら戦い続けている劉備。

陳留で確実に力を蓄え、精兵を率いて連戦連勝し頭角を示し出した曹操。

淮南の袁術の元で、客将という身分でありながら武名を響かせる孫策。

この3つの勢力が特に名が売れている。

まあ、ここまでは想定の範囲内だ。

ここが三国志の世界である以上、この3名はこれからの乱世でも英雄として活躍していくんだろう。

だが、一つだけ歴史を知っている俺にも想定外の人物が居た。

「天の御遣い……ね」

俺の知っている歴史上の人物でもあり、この世界でも高名な占い師として名が知れている管路の予言に関わる人物だ。

『流星と共に天から舞い降り、天下に安寧をもたらす』

ざっくり説明すると、こんな感じの内容の予言である。

この天下に安寧をもたらすという『天の御遣い』が幽州の劉備の元に居るというのだ。

正直言って眉唾物の予言だとずっと思っていたが、行商人のオッチャン達が実際に見たと言っていたから本当に居るんだろう。

なんでも、見たこともない光り輝く服に身を包んでいたとか。

何者なんだろうな？

「……うん、考えても分かんね」

この目で見たこともないヤツについてウダウダ考えたってラチがあかない。

それに俺達には雅、詠、ねねという優秀な軍師が居るんだ。

難しい事は3人に任せよう。

……決して丸投げした訳じゃないよ？

「さて、警邏にでも行きますか！」

手元の書簡をまとめ、七星宝刀を腰に差して俺は部屋を出た。

今日も快晴、良い事がありそうだ。

「盗人だ～～！」
「刃物を持ってるぞ！　気を付けろ！」
「……そんな風に考えていた時期が俺にもありました」

街に出て直ぐにこれかよ。

どれだけツいてないんだ。

「言ってる場合じゃないか……警備隊の者です！　道を空けて下さい！！」

大声で呼びかけながら道を急ぐ。

普段から街の人に呼びかけているだけあって、こちらが声をかけると道の左右に寄って移動しやすくしてくれる。

事前の訓練って大事だね。

「っとアイツか。止まれ！！」

騒ぎが大きくなっている方へ向かうと、俺の真正面から短剣を持った男が走ってきた。

「ちっ！　どけ～！！」

案の定止まる事はなく、猛烈な勢いそのままにグングン距離を詰めてくる。

そしてその姿はどんどん近付いて来て……

「デカっ！！」

何コイツ！？

２メートル近く身長あるんですけど！

「邪魔だ～！！」

俺がサイズの違いに面食らっていると、大男がめちゃくちゃに短剣を振り回してきた。

しかしこの男に武の心得はないようで、本当に振り回しているだけだ。

だったらこの程度、恐れる必要もない。

体格の違いが戦力の決定的差ではないということを教えてやる！

「よっ」

当たらなければどうということはない！

短剣を振り回す腕を掴み

「ほいっとな」

そのまま後ろに回り込んで捻り上げた。

ついでに体重をかけて地面に抑え込み、身柄も確保する。

「ぐあああ！？」

「こんな街中で危ないもん振り回すんじゃねえよ」

こんなもんボッシュートだ。

男が取り落とした短剣を足で踏みつける。

「姜維将軍！」

ここでようやく他の隊員達が到着した。

「ちょっと遅いぞ？」

「申し訳有りません！」

「民の安全を第一に守るのが警備隊の仕事なんだ。だからこそ、何か起きた時には迅速に行動しなくちゃならない。皆もそれは分かってるだろ？」

『はっ！』

もしここに俺がいなかったら怪我人が出ていたかもしれない。

最悪、死者が出ていた可能性だってある。

そんな事態を防ぐために警備隊があるんだ。

「だったらいいけどさ、次は気をつけろよ」
『はい！』
「それじゃ、この男を詰め所まで連れて行ってくれ。怪我人の有無の確認も忘れずにな」
隊員達に指示を出し、大男を引き渡す。
「姜維様、ありがとうございました」
「いいよいいよ、気にしないで。それよりも、あの男に盗られたものは詰め所で確認した後に返却するから、申し訳ないけどそっちまで向かってくれ」
「はい。本当にありがとうございました」
被害者らしき女性と話したあと、周りの人達にも怪我人がいないか確認する。
「姜維将軍、どうやら怪我人は居ないようです」
「うん、俺も今確認した。それじゃあ皆も持ち場に戻ってくれ」
『はっ！』
戻っていく隊員達を見届けたあと、警邏を再開する。
街の人達も捕り物に驚いていたみたいだが、どうやら落ち着きを取り戻して普段の生活に戻ったみたいだ。
「いや～相変わらず見事なお手並みだね！」
「そんな事ないって。それよりも店は繁盛してるかい？　おばちゃん」
「当たり前さね！　ほら、出来たての肉まんだ。一つ持ってきな」
「おお！　ありがとう！」

「次は呂布のお嬢ちゃんと一緒に来なよ！」

「兄貴！　お久しぶりです！」

「だから兄貴って言うな」

「いくら兄貴の頼みとはいえ、それは聞けません！　兄貴は職もなく毎日フラフラしていた俺達に、立派な仕事を与えてくれたんです！」

「おまけに給金が支払えるようにアチコチで頭を下げてくれたと聞いた時には……ぅぅ」

「おい！？　こんな所で泣かないでくれ！」

『へい！　兄貴！』

「……もういいよ。好きにしろよ」

行きつけの店のおばちゃんから肉まんをもらったり、村の復興支援を終えて帰ってきたガテン系の兄ちゃん達に絡まれたり、相変わらずの警邏だ。

多分、ここまで騒がしい警備隊なんて洛陽にしかないだろう。

「まあ、こんな毎日も嫌いじゃないけどな」

鏡を見なくても分かる。

今の俺の顔は、きっと緩みきってるハズだ。

民と賑やかに会話しながら歩いていく姜維を、物陰から眺める人

影があった。

「なあ、あの姜維って人行っちまうぞ？　声をかけなくていいのか」

「ま、待て！　まだ心の準備が……」

「何回言ってるんだ、その台詞……」

呆れたように溜め息をつく茶髪を肩まで伸ばした女性。

実際呆れているのだろう、退屈だと言わんばかりに時々欠伸をもらしている。

その女性の足元で呆れ気味の視線を一身に受け止めているのは、腰まで伸ばした金髪を後頭部で括っているこれまた女性だった。

その顔は赤く高揚しており、両手で頬を抑えて道端にも関わらずしゃがみ込んでいる。

「大体さ、直接話した事もない相手に何でそこまで入れ込んでいるんだ？」

「あの方の人となりは雅……彼に仕えている友人からの文で聞き及んでいる。真っ直ぐな志を持ち民を想いやる、文武両道の人物だそうだ」

「ふ～ん。確かに盗人を取り押さえた時の動きを見る限りだと、男にしては腕が立ちそうだったな」

「そうだろう！？」

「うわ！？　急に叫ぶなバカ！」

茶髪の女性が抗議するが、金髪の女性はまるで聞き入れた様子がない。

むしろ、異常なまでに爛々と輝く眼差しのまま詰め寄り、更に熱弁を始めた。

「それに洛陽の民からも慕われているではないか！　私の友人からの評価、民に慕われている現状、これらを踏まえても仕えるに足る主とするに申し分はない！」

「わ、分かった！　分かったから少し落ち着け！　皆アタシ達を見てるから、な！」

「……ああ」

注目の視線を集めている事に気付き、居心地が悪そうにする金髪の女性。

実際、往来が激しい昼日中に叫ぶ美女2名は好奇の視線を集めるには充分だった。

金髪の女性は一つ咳払いをすると、今度は落ち着いた様子で喋り出した。

「つまり、彼になら我が戦斧を預けられる。そう思ったからこそ、わざわざ河内郡からこの洛陽へ来たのだ。最も、その途中でお前を拾ったのは予想外だったがな」

「まあ、そう言うなよ。アタシのお陰で楽しい道行きだっただろ？」

ジト目で見られたにも関わらず、胸を張って笑う茶髪の女性。

その拍子に大きな胸が揺れたのを見て、金髪の女性が歯を食いしばったのは秘密の話だ。

「……まあいい。早速私は姜維殿に仕官をお願いしてくる。お前は

どうする？」
「アタシも行くよ。元々仕える相手を探す為に旅をしていた訳だし、姜維って人が噂と違わない人間なら仕えても問題なさそうだ」
「そうか。では行くぞ」
そう言って歩み始める金髪の女性だが、ある一言を聞いて動きを止める。
「でもさ、警邏の最中にいきなり仕官を頼むんじゃなく、お前の友人ってヤツに話を通してからの方が確実なんじゃないか？」
「む……」
ピタッ。
そんな擬音が聞こえるような、それは見事な静止だった。
そのまま停止する事１０秒足らず。
振り返ると茶髪の女性に食ってかかった。
「何故それをもっと早く言わんのだ！」
「気付いてなかったのかよ！　本当はお前結構なバカだろ！？」
そのまま騒ぎ始める事数分、２人はようやく落ち着いたのか嘆息する。
「過ぎた事を振り返っても仕方がない。移動しよう」
「そうだな。アタシももう疲れた」
各々の得物を持ち、２人は移動を始める。

「それで徐晃、お前の友人ってのはどこに居るんだ？」
「おそらく今の時間なら政庁に居るはずだ。まず政庁へ行くぞ、太史慈」
徐晃と太史慈。
2人は政庁へ向かって歩き始めた。

「じゃあねお兄ちゃん！」
「また遊んでね！」
「……ああ。またな」
元気に手を振って走り去る子供達。
対照的にグロッキーな俺。
「子供は本当に元気だな。羨ましいぞ」
年寄りじみた台詞が自然に出る辺り、俺はもうダメなのかもしれない。
警邏の最中、いつものように子供達に囲まれた俺。
仕事だから遊べないと断りたかったが、純真無垢な瞳に晒され続

けて結局ガッツリ遊んでしまった。

警邏？　もちろん終わらせましたよ。

子供達を引き連れたままで。

「まさか引率の先生気分まで味わう事になるとは思わなかったな」

教職員の皆さんは偉大です。

古代中国で現代日本の教育について考える羽目になるとはね。

中国４０００年、侮り難し！

「……イカン。何考えてるんだ俺は」

疲労で頭が回らない。

「こういう時は、恋の動物達を愛でて癒されよう」

恋の事も愛でるけどな。

健全な意味で。

そうと決めたらやる事は１つ。

「ササッと報告書を仕上げますか」

まだ見ぬ癒やしが俺を待ってるぜ！！

そんな未来をウキウキｗａｔｃｈｉｎｇしていた俺が政庁に戻って見たものは……

「さすがは音に聞く張遼だ！」
「アンタもなかなかやるやんけ！」

霞と互角に打ち合いながら槍を振るう謎の女性だった。

「……誰？」

暫し呆然としてしまった俺だが……

「新、こっちだ」
「ん？　雅か」
「ええ！？　きょ、姜維殿！？」

雅の声が聞こえたのでそちらに向かう。

そこには雅の他に見知らぬ金髪の女性がいた。

近くへ駆け寄ると、見知らぬ女性は俺から目を逸らしてしまう。

……何もしてないのに嫌われた？

「雅、あの霞と戦ってる人は誰だ？　それと隣に居るのはどちら様？」
「それはあの２人の勝負が付いたら話すよ」

そう言って含み笑いをする雅。

隣の女性は相変わらず俺からソッポを向いたままだ。

……正直気まずい。

釈然としないまま雅の隣に腰を下ろし、霞達の試合を眺める。

客観的に見て、２人の実力はほぼ互角に見えるな。

てことはあの茶髪の女性と俺も、実力は互角という事になる。

ただ、彼女の槍術と俺の槍術はスタイルが違うようだ。

俺の槍術は母から習い、型を修得した上で槍を振るう。

しかし、彼女の槍術は型が無いように見える。どちらかと言えば、恋のように豪快な戦い方だ。

他の人の槍術を見るだけでも、結構勉強になるもんだな。

そんな事を考えていると、一際高い金属音が鳴り響き決着が着いていた。

「……アタシの負けか」

「いんや、引き分けや」

両者共に得物を取り落としている。

確かにこれは引き分けだ。

「予想以上に強かったよ。張遼」

「アンタもや。まさかここまでの腕の持ち主とは思わんかった。アンタら2人の実力はウチが責任持って報告しておくわ」
「ああ、ありがとう」

会話の内容から察するに仕官希望者か。

ここで2人が俺に気付いた。

「新、戻ってきてたんか」
「ついさっきね。それよりこの人達は誰なんだ？」

俺の質問を聞いた途端、霞の頭に猫耳が生えた。

いや、正確には生えたように見えた。

「それは本人達から聞いた方がええなぁ。その方が面白……じゃなくて手っ取り早いわ」
「待てコラ。面白いって何だ？」

確実にそっちが本音だろ。

「何の事やろな？　ほんじゃあ雅っち、ウチは月っち達に報告してくるから後よろしく」
「ああ、任された」

霞は最後までニヤニヤしたまま、中庭から去っていった。

……何なんだよ皆して。新手のイジメか？

「さて新。そろそろ紹介しよう。この2人は……」

「雅、待ってくれ。私が仕える相手には己の言葉で名乗りたい」
「アタシも同感だ」
「……そうか。分かった」

2人はそう言うと、俺の前に跪く。

……待て待て。嫌な予感しかしないぞ……

「姜維殿、お初にお目にかかります。私は徐晃、字は公明と申します。此度は姜維殿にお仕えしたく参りました」
「アタシの名は太史慈、字は子義です。徐公明と同じく姜維殿にお仕えしたく思います」
「チクショウ！　やっぱりか！！」

えてして嫌な予感は当たるもんだ！

しかも徐晃に太史慈だと!?

ビッグネームにもほどがあるだろ！！

「2人共待って下さい！　俺は月様に仕えているんで2人の主君にはなれませんよ！」
「董卓殿には既に許可を得ています」

月様、何故許可を出した!?

「聞けば司馬懿殿も姜維殿にお仕えしているとの事。我らも臣として加えて頂ければこの上ない喜びでございます」

雅め、余計な事まで喋ったな。

そんな非難も込めて雅を見ても、返ってきたのは微笑だけ。

「新、私からも詳しく説明しよう。だから話だけでも聞いてくれ」

「……分かった」

そして雅から詳しい事情が説明された。

それによると、徐晃と雅は同郷の出身で昔からの友人だった。昔の雅は誰に仕官の勧誘を受けても断ってきたらしい。その雅が俺に仕官したと言うのを文で知り、俺に興味を持ち会いに来たとか。

そして、太史慈は仕える主君を探す旅の途中で路銀が底を尽き、空腹で行き倒れていた所を徐晃に助けられて一緒に洛陽へ来た。

その後、洛陽内の評判や雅からの評価を加味した上で俺に仕えようと決めたとか。

「……前から思ってたけど、俺の噂を流してるのは誰なんだ？」

なまじ真実である上に悪評でもないから対策も立てられん。

「姜維殿、何卒お願い致します」

「必ずやお役に立ってみせましょう」

「私からも頼む。この2人は必ず君の力になるはずだ」

……雅からもそこまで強く言われたら拒絶しにくいだろ。

「俺は董卓様の配下という立場を変えるつもりは一切ありません。徐晃さんが主に望むような大功を立てる事はないと思いますよ？」

「私は立身出世に興味ありません。ただ、私が認めた御方のために我が武を役立てたいだけでございます。そして何より、董卓殿と姜維殿ならば多くの民のために力を尽くしてくれると確信しております」

次いで太史慈に目を向ける。

「俺以上に太史慈さんの主君に相応しい人物は居るはずです。後々後悔する可能性もあると思います」

「確かにそのような人物も居るかもしれません。しかし、いくら器が大きく文武に優れていようとも、姜維殿のように民と共に生きられる人物は少ないと存じ上げています。ならば出会えぬやもしれぬ主君を探すより、今ここで出会えた姜維殿に我が槍を預けたいと思います」

なら最後に大事な確認だ。

「俺の主である董卓様のためにも、２人は力を尽くしてくれますか？」

「もちろんです。私の戦斧にて、董卓様もお守りしてみせます」

「董卓様に害なす者があれば、我が槍にて貫き通してみせましょう」

月様のために戦ってくれるなら、俺が言う事は何もない。

いや、本当は沢山あるがそれはいい。

「……なら２人の力を俺に貸して下さい。俺の真名は新です」

俺の返事を聞き、２人は満面の笑みを浮かべた。

「はっ！　私の真名は椿（つばき）です！　どうぞお受け取り下さい！」
「アタシは夕（せき）です！　宜しくお願いします！」

こうして俺達の元に勇将が加わった。

正確には俺の元に、だが。

この2人が俺の臣下になったと聞き、恋が暴れて何故か俺がねねに説教を食らったのは別の話だ。

そしてこの日の翌日、洛陽に火急の報せが届いた。

その内容は『曹操が黄巾の乱の首謀者である張角、張宝、張梁を討ち取った』というもの。

洛陽が歓喜に包まれる中、俺は心から喜べずにいた。

黄巾の乱の終結、すなわち乱世の幕が開いた事に相違ないのだから。

曹操

曹操、字は孟徳。

言わずとしれた三国志の英傑で、群雄割拠の戦乱の世で勝利を収めて魏の礎を築き上げた人物だ。

だが、この世界では美しいものをこよなく愛する同性愛者で、配下の夏侯姉妹も百合っ子らしい。

歴史家が知ったら多分泣く。

それはともかく、そんな英雄に俺はこれから会いに行く。

黄巾党首領を討ち取った恩賞として、豫州刺史に任命するという勅令を与える使者に選ばれたからだ。

もっとも俺は副官で、正式な使者に選ばれたのは恋だけどな。

でも、恋を使者に選んだのは人選ミスだと思う。

何でかって？

「……新、お腹減った」

「もう少しで陳留に着くから、ちょっとだけ我慢してくれ」

「ん。分かった」

これで理解して頂けたと思う。

恋にとっては使者の仕事よりも食欲を満たす方が大切だからだ。

使者の仕事は俺が代わりに果たす事になるんだろう。

だけど恋は許される。

だってかわいいもん！！

「それより恋、ねねを置いてきて良かったのか？」

「……いい。ねねはお仕事がある。それに新が一緒だから大丈夫」

それ恋の分の仕事だけどな。

今頃は恋と離ればなれになったショックで泣きながら仕事をしてるはずだ。

ねね、頑張れ。

そうこうしている内に陳留の城門が見えてきた。

「英雄が治める土地はどんなもんか、お手並み拝見といきますか」

「……ご飯」

俺は期待に胸を膨らませながら、恋は食事に胸を膨らませながら城門をくぐった。

「へ～、やっぱり賑わっているな」

陳留の街は予想以上に栄えていた。

馬から降り、手綱を引きながらゆっくり見回す。

恋や兵士達も俺と同じように既に下馬している。

さすがに『乱世の姦雄、治世の能臣』と評されるだけはある。

政治手腕も一流だな。

感心しながら街を眺めていると、袖を引かれている事に気が付く。

「……ご飯食べたい」

「そうだな、どこか適当な店に……」

恋の懇願を受け、食事が出来そうな場所を探しているとふと気が付いた。

恋に今食事させると、勅令を伝えるの大分遅れるんじゃね？

いや、確実に遅れる。

朝廷からの使者が職務怠慢なんて、ぶっちゃけ笑えない。

下手したら、月様の悪評につながりかねない。

今更責任の重さがのしかかってきたぞ。

「……恋、ごめんな。先に使者としての仕事を終わらせよう？　食事はその後に好きなだけしていいから」

非常に心苦しい中、どうにか言葉を絞り出して恋を見ると……

「……」

トレードマークのアホ毛もしおれて、この世の終わりかと思うような沈んだ表情をしていた!!

心が！　心が痛い!!

「本当にごめんな!?　後で好きなだけ食べていいから、今は先に仕事を終わらせてくれ!」

「……分かった」

神様仏様呂布様!!　と言わんばかりに拝み倒すと、いつもよりたっぷり間を空けて頷いてくれた。

かなり葛藤があったっぽい。

そんな……恋にこんな悲しい顔をさせるなんて……俺って奴は……

「姜維は悪い子！　姜維は悪い子!」

「何してるんですか姜維将軍!?　落ち着いて下さい!」

「離せ～！　恋を悲しませた俺なんて頭かち割って大地を真っ赤に染め上げればいいんだ～!!」

「恐ろしい事を往来で叫ばないで下さい!」

……後で兵に聞いた話だが、俺は突然地面に頭を打ちつけ始め、取り押さえられるまで錯乱していたらしい。

俺の心をここまで乱すなんて……！

恋……恐ろしい子！

「それではお通り下さい」

何とかド〇ー状態から回復した俺は、陳留の城の玉座前まで通されていた。

「ヤバい。緊張してきた」

「……頑張って」

「うん、本当なら恋が口上を述べなきゃならないんだからね？」

「……？」

首を傾げてもダメなもんはダメだ。

「いや、アリだな」

「……何が？」

「何でもないよ。行こう」

重々しい音を立てて扉が開く。

中に踏み出してまず目に入ったのは、玉座に座る金髪ドリルの小柄な少女。

（雰囲気から察するにあれが曹操だな）

ただ座っているだけなのに、とんでもない存在感を放っている。

これは間違いなく英雄だわ。

それに呑まれぬように歩みを進める。

次に目に入ったのは、一番手前に控えている三人組。

一番左には、この時代にしてはオシャレな格好をした眼鏡の少女。

その隣には全身に傷を負った少女が鋭い目で俺達を見据えている。

更に隣には、髪を括って水着を付けて工具をぶら下げた少女が立っていた。

（あんまり将っぽくないけど、彼女達も腕が立つんだろうな）

三人組を通り越すと、今度はやけに小柄な少女達が目に入る。

（2人共子供じゃねえか！？　でも月様達の例もあるもんな）

本人達が聞いたら確実にブチ切れる事を思いながら、玉座の近くまで辿り着く。

曹操から一番近い位置には黒髪長髪オールバックと青髪短髪片方バックの女性達、俺をめっちゃ睨んでる猫耳フードがいた。

（この2人が夏候姉妹だな。そして俺は何故睨まれている？）

とりあえず職務を果たすか。

「お初にお目にかかります。私は何進大将軍の名代として参りました、姜伯約と申します。そして隣が」

「……恋は呂布。呂奉先」

「私が陳留太守の曹孟徳よ」

曹操は俺達を値踏みするかのような視線で眺めていた。

……正直言って、あんまり気分が良い類のものじゃない。

さっさと本題に入ろう。

「陛下の御言葉をお伝え致します。『此度の黄巾党討伐の任、大儀であった。黄巾党首領を討ち取った褒美として、曹孟徳を豫州刺史に任命する。今後もより一層の忠義を持って漢王室に尽くすように』との事です」

よし！　噛まずに言えたぞ！

内心ガッツポーズをかましながら、曹操の返事を待つ。

「豫州刺史の任、謹んで拝命するわ」

「はっ。陛下もお喜びになられるでしょう」

うっし、お仕事終わり。

恋と飯食って帰ろう。

「それでは、所用があるのでこれで失礼致します」

恋と一緒に踵を返し、出口へ向かう。

しかし、背を向けながらも背中に刺さる視線を、俺は部屋を出るまで感じていた。

「春蘭、秋蘭。貴女達は武人としてあの2人をどう見るかしら？」

姜維と呂布が退室した後、真っ先に口を開いたのは曹操だった。

「はっ！　例え白夜叉だろうが飛将軍だろうが、華琳様の覇道を妨げるのならば私が斬り捨ててご覧に入れます」

「姉者、華琳様が仰られたのはそのような意味でではないぞ。……私が見た限りでは、姜維には動きの中に隙がありませんでした。呂布の方は何とも言えません。ですが、ただ者ではない事だけは確かでしょう」

姉である夏候惇のどこかズレた意見を述べるが、妹の夏候淵が軽く窘めつつ己の見解を告げる。

割と日常でよく見る光景である。

「そう。少なくとも異名に恥じない人間ではあるという事ね」

「はい」

愛する部下の意見を聞き、曹操は楽しげな笑みを浮かべる。

「華琳様、御安心下さい！　馬鹿で下衆で汚らわしい男など、私の策にて必ずや討ち取ってご覧にいれます！」

曹操の軍師である荀？は大の男嫌いであるため、主の前であろうともこのように過激な発言が飛び出るのだ。

「桂花、姜維を策に嵌めるとしてもそれは難しいわよ？　何せ彼には、私が欲したほどの才の持ち主である司馬懿が仕えているというじゃない」

「そんな！？　華琳様直々のお誘いを断り男に仕えるような女などに、私は引けをとりません！」

荀？の意見はもちろん本気で言っている。

だが、その裏には自分以外の知恵者を曹操が欲したという事に対する嫉妬が隠れている事を、曹操は理解していた。

「もちろん貴女には期待しているわ。もしその時が来たならば、私の愛する軍師として相応しい知略を見せてもらうわよ」

「華琳様……」

敬愛する主からの信頼により、荀？は恍惚の表情を見せる。

しかし、そんな荀？を見て嫉妬を燃やす人物がいた。

「華琳様！　私も華琳様の剣として、功を打ち立ててみせます！」

「ええ、もちろん貴女も信頼しているわ。私の大剣としての武、存分に発揮なさい」

「はい！！」

夏候惇も荀?と同じく、頬を紅潮させる。

「ね～ね～琉流。どうして春蘭様と桂花様は顔が赤くなってるの?」

「え!?　ええと……わ、私に聞かないで!」

「あれ?　琉流も赤くなってるよ」

「き、季衣の気のせいよ!」

階下では天真爛漫な許緒の質問に、彼女よりも精神的に少々大人の典韋がたじろいでいた。

「にしても白夜叉なんて呼ばれとるからどんなゴッツい男が来るかと思ったら、拍子抜けやなあ」

「そうなの～。飛将軍だってあんまり強そうじゃなかったの～」

李典と于禁が楽観的な見方をするが、2人の幼なじみであり、3人の中で唯一生真面目な楽進が黙っているはずがない。

「真桜、沙和。外見だけでは人の強さなど測れないぞ。気を緩めすぎるな」

「凪は相変わらずお堅いなぁ～」

「もう少し力を抜いてもいいと思うの～」

「お前達は抜き過ぎだ!」

やいのやいのと玉座の間が一気に騒がしくなる。

曹操はその光景を満足げに眺めていたが一息つくと立ち上がった。

その瞬間、再び空気が引き締まる。

「今すぐ一戦交える訳でもないわ、戦の話はひとまず置いておきましょう。それよりも私達には為すべき事があるはずよ」

眼下に連なる配下を見回し、王としての資質を見せつけながら言葉を繋げる。

「袞州刺史に任命された以上、私達の仕事は更に増えるでしょう。しかし、今この時期に力を蓄えれば後々訪れる戦乱の世で優位に事が進められる」

曹操は愛用の武器である絶を振るい、切っ先を天に向ける。

「つまり、我が覇道を成し遂げる為には、この雌伏の時にどれだけ地盤を固めるかが鍵になる」

天に向けていた絶を真正面に向け、配下に檄を飛ばす。

「さあ、我が優秀なる部下達よ！　共に覇道を歩む為、共に大陸に平和をもたらす為、我らが責を果たそうではないか！！」

主の檄を受け、臣下達は跪き意を示す。

『御意！！』

一糸乱れぬ意志を聞きながら、曹操は胸の高まりを感じ取っていた。

（我が覇道の前に立ちふさがるのは劉備か孫策か、あるいはそれ以外の諸侯か？　いや、誰であろうとも構わない！　共に乱世で踊ろうではないか！！）

これまで出会った好敵手、そしてまだ見ぬ好敵手を思い浮かべながら、曹操はこれから始まる乱世の舞台を待ちわびていた。

「ヘックション！」
「……大丈夫？」
「ああ、大丈夫だ。それよりも恋、ご飯は美味しいか？」
「……ん」
「そうかそうか！　ほら、これも食べていいよ？」
「……ありがと」

くう～！

癒されるぜ！！

「姜維将軍、洛陽へ戻らなくて良いんですか？」
「少し寄り道したって構わないだろ。仕事だって終わらせたしな。そんな事より皆も食え食え！　今日は奢りだ！」
『ありがとうございます！！』

うんうん、いい返事だ。

やっぱり食事は大人数で食べるに限るな。

「ところで恋、曹操を見てどう思った？」

「……小さいけど大きい人」

なるほど、分かりやすい表現だ。

一番曹操を端的に表している言葉かもしれない。

二言程度しか言葉を交わさなかったが、彼女の器の大きさはそれだけで感じ取れた。

間違いなく乱世で生き残り、魏を築くだろうな。

あれ？　実際に魏を建国したのは曹丕だっけか？

「う～ん……皇帝になったのは曹丕だった気が……でも」

「……新」

「ん？　どうしむぐ！？」

恋さん！？　何故急に焼売を口に突っ込んだんですか？

「……大丈夫。月も詠も、新もねねも、霞達も恋が守る」

「恋……」

「だから心配しなくていい」

……食事中の恋に気を遣わせるくらい、俺は考え込んでたのか。

「そっか、ありがとな恋」

乱世が始まったからって過敏になりすぎてたみたいだ。

確かに、未来について考えたってどうしようもない。

俺達が生きているのは今なんだから、今できる事をやらなくちゃな。

王允さんだってそう言っていた。

「でもさ、男の俺が守られてばかりってのも情けないだろ？　だったら俺だって恋を守るさ」

恋だけじゃない。

月様達も、雅も椿も夕も守れるくらい強くなる。

「……ん」

嬉しそうな恋を見ながら、俺は決意を改めて固めた。

……とりあえず、今この瞬間に出来る事。

それは……

「ほら、恋。気付かせてくれたお礼だ。沢山食べな」

「……もっと食べていい？」

「おう！　た～んと食え！」

恋が満足するまで食事に付き合う事だ！！

曹操（後書き）

董卓軍以外の原作キャラを初めて書きました。

口調などにおかしな所がありましたら、ご連絡下さい。

崩壊の足音

司州河東郡。

黄巾党討伐の任を受け、初めて黄巾党と合戦をした因縁の土地に再び俺は出向いていた。

最近この辺りで活発に活動している白波賊を討伐する為である。

宛での戦闘以来の久し振りの戦なので、例によって霞と華雄さんのバトルジャンキーの血が騒ぎ出して、誰が討伐に行くかを決める段階で揉めに揉めたが結局は俺と椿と夕、軍師として雅という姜維ファミリーで向かう事になった。

まあ、椿と夕も部隊を持つ事になったとはいえ、その半数以上が新兵で構成されている部隊だから、一度本物の戦を体験させておきたかったんだろう。

有事の際のフォローの為に機動力のある俺の騎馬隊が駆り出されているし、白波賊自体も大した数ではないらしいので、間違えても全滅という事にはならないと思う。

それでも油断は禁物だ。

白波賊の中には、多少なりとも兵法を学んだ人間がいるようで、粗末ながらも陣を立てて抵抗しようとしている。

ただ、兵の数も質もこちらが上回っているので、俺達の優位は変わらないだろう。

「にしても、まさか俺が大将なんてな」
「当然の流れだ。この討伐軍の中で戦闘経験が最も多いのは君なのだから、これ以上の適任者はいないよ」
それはそうかもしれないが、ぶっちゃけ柄じゃない。
仲間が前線で戦ってるのに、俺だけ後方で待機なんて歯痒すぎる。
(月様もいつもこんな思いをしていたのかもな)
大将の背負う責任の重さを感じていると兵に隊列を組ませていた椿が戻ってきた。
「新様、全軍戦闘準備が完了しました」
「分かった。直ぐに向かう」
椿の報告を受け、待機している兵達の方に移動する。
「少々いいですか、新様」
「夕か、どうした?」
「実は、少し兵が浮き足立っているんですよ。調練を積んできてはいるんですけど、初めての実戦という事で萎縮しているみたいなんです」
確かに、戦場の空気は独特だからな。
いくら調練を重ねていても、殺意を撒き散らしながら突っ込んでくる集団の恐怖は実戦でしか感じられない。

新兵が多い部隊では浮き足立つのも当然か。

「ならば新、総大将である君が戦闘前に一声かければいい。兵の志気を高揚させるのも大将の務めだ」

「……そうだな。上手く皆を落ち着かせる事が出来るか分からないけど、やれるだけはやってみるよ」

思えば、俺も初陣の時は怖かった。

あの時の気持ちを皆が味わっているというのなら、それを乗り越えた人間として一言かけなきゃならない。

「では新様、よろしくお願いします」

「アタシと椿は自分の隊に戻ります」

「ああ、2人も気を付けてな」

『御意』

2人が自分の隊に戻り、先頭に立ったのを見届けた後、討伐軍の前に立つ。

黒王に跨がりながら皆の顔を見回すと、確かに全軍の半数ぐらいの兵達が不安そうな顔をしていた。

初めて人を殺す恐怖、自分が死ぬかもしれない恐怖、色んな感情が頭の中を巡っているんだろう。

「全員、聞いてくれ！！」

少しでも多くの兵の心に届くように、言葉の中にありったけの気持ちを込める。

「今回の戦いが初陣という者達は、恐らく胸の中に恐怖心を持っているだろう！　だが、その恐怖は断じて恥ずべき感情などではない！！」

命を失う事、命を奪う事を恐れるのは人間として当然だ。

恐れがあるから、人は戦える。

戦って生き残る事が出来る。

「その恐怖心は、皆が命の重みを理解しているからこそ感じている感情だ！　そして戦場で最も生き残る事が出来る人間は、命の重みを忘れず己を保つ事が出来る人間だ！！」

だけど、恐れを抱き自分を見失わない者が必ず生き残るかと言われたら、それは否。

「だが、皆には恐怖するだけではなく、ほんの小さな勇気と覚悟を持って欲しい！　今、隣に立つ友の命を守る為に力を振るう勇気！　今、故郷で待つ家族の元へ帰る為に命を奪う覚悟！！」

俺が初陣の時には、家族の為に戦って欲しいと訴えかけた。

だけど、あの時に俺が率いていた兵は実戦経験のある者達ばかり。

あの時のあの言葉は、自分で自分を奮い立たせる為の言葉だった。

「身の回りに溢れる些細な日常を守り、その日常に帰還する為に！　生き残る力を得る為の訓練を皆は重ねてきたはずだ！！」

修羅を一閃し、更に声を張り上げる。

「奪った命の重みを！！　消えた命の尊さを！！　決して忘れず敵を討て！！！　友や家族と過ごすかけがえの無い日常を守る為に！！　平凡でありふれた平和な日常へ帰る為に！！　この戦、必ず勝利で締めくくるぞ！！！」

俺が伝えたい事は全て伝えた。

その後に訪れるのは、水を打ったような静かな静寂。

（マズい！　スベったか！？）

表面上は冷静を装いながらも、俺の背中には尋常じゃない量の冷や汗が流れていた。

堂々と胸を張って皆の前に立つことが恥ずかしくなり、スゴスゴと下がろうとした俺の耳に届いたのは

『――――――

雅の助言を聞き、急いで指示を出す。

「攻撃……開始！！」

『――――――

「もう伝令を出すのか？　いくら何でも早すぎるだろ」
「なに、最後の仕込みをしただけさ」
伝令が出発したのを見届けると、雅は俺に向き直った。
「我が主よ、完全なる勝利を得る為には君の力が必要だ。白夜叉の名に恥じない力を新兵達に見せつけてあげてくれ」

「徐公明が双戦斧、止められるものなら止めてみよ！！」
徐晃が左右の手に持つ大斧、霧雨を振り回し文字通りの血の雨を降らしている。
右の大斧で真一文字に両断し、左の大斧で敵を突き崩す。
迫る剣戟を受け止め、返す刃で次々と敵を屠っていく。
戦闘開始直後に、韓暹を一刀両断した実力が本物である事を示すには十分過ぎる働きであった。
「どうしたどうした～！？　その程度の腕前じゃこの太史子義は討ち取れねえぞ！！」

徐晃に負けじと、太史慈も自慢の槍術を披露する。

愛槍の閃で突き、薙ぎ、時には力任せに頭上で振り回すという只それだけで、確実に敵を討ち取る。

本来ならば石突きとなっている部分にも刃が付いていること可能な戦い方だ。

先ほど、李楽と名乗る将らしき人物が太史慈に一騎打ちを挑んだが、呆気なく腹部を貫かれて果てた。

「うぉぉぉ！」

「この！」

徐晃と太史慈の圧倒的な武力、戦前の姜維の鼓舞により、新兵達も日々の調練で培った力を存分に発揮する。

血の臭いと鉄の臭いが入り混じった、鼻をつく刺激臭が充満する戦場で、必死に恐怖と戦いながら眼前の敵を討つ。

「伝令！！」

戦の流れが討伐軍側に傾き始めた頃、軍師である司馬懿が送った伝令が徐晃達の元へ届いた。

「……そうか！　承知した！」

「雅の指示か！？　どんな内容だ、椿！」

顔を徐晃に向けながら、己の背後を狙った敵の胸板を器用に貫き、太史慈が内容を確認する。

「……何だそりゃ！？　このまま押し続ければ勝てるだろうに！」
「私もそう思うが……軍師の指示を無視する訳にもいくまい！」

斧頭の一撃で敵兵の頭蓋を砕きながら、徐晃は部下達に命令を下す。

太史慈もそれに倣い、声を張り上げた。

「徐晃隊！　速やかに右翼へ展開せよ！」
「太史慈隊は左翼だ！　遅れるな！」

将の指示を聞き、兵達は慌てて左右へと展開する。

正面から激突していた両軍だが、討伐軍が左右に分かれた事により、戦場に大きな空間が出来た。

普段から賈駆や陳宮の厳しい陣形調練を受けていた討伐軍側は、大きな混乱もなく移動して再び攻撃を再開する。

しかし、白波賊は急な動きに付いていく事が出来ずに陣形を崩してしまった。

それでも戦闘を続けようと各個で挑みかかるが、連携が取れていない状況下での戦闘なので成果は上がらない。

さすがにマズいと白波賊が徐々に後退し始めた時、戦場に地響きが鳴り響いた。

両軍の兵が音の鳴る方向に眼を向けると

「じゅ、純白の姜の旗だと!?」
「白夜叉だ～!!」

純白の姜旗を風に靡かせながら、姜維率いる騎馬隊が突撃をしかけていた。

「新様!?　何て無茶を!」
「総大将が突撃なんて何考えてんだ!」

徐晃と太史慈の驚愕をよそに、姜維は騎馬隊の先頭に立ち、白波賊へと斬り込んだ。

賊徒の集団の中で、黒王で敵を踏み砕きながら槍術を振るう姜維。
「はぁぁぁぁ!!」

その技は流麗の一言に尽きる美しいものだった。

修羅を高速で突き、右腕を返して下から切り上げて再び切り下ろす。

たったそれだけの動きで、１０人程の兵が血飛沫を上げながら倒れ伏す。

それを意にも介さず、修羅を斜めに大きく一閃し前方の兵を斬り伏せ、愛馬が駆け抜ける空間を創ると、左手に修羅を持ち替えて高速の乱れ突きを放つ。

手本通りとも言える槍術だが、それ故に隙もなく近付く兵は瞬く

間に肉塊と化す。

「そこまでだ白夜叉！」

「貴様を討てば戦況も変えられる！　ここで死ね！！」

中には、近付けないなら射抜けばいいと言わんばかりに馬上から弓を放つ者もいた。

「黒王！！」

しかし、最初に放たれた矢を愛馬への一声だけで方向転換する事で避けきり、

「ふっ！！」

時間差で放たれた次の矢を腰に差していた七星宝刀を抜き放ち、難なく叩き落とす。

「何！？」

「嘘だろ！？」

確実に仕留めたと思っていた射手だが、一瞬動きを止めたその瞬間に首が飛んでいた。

すれ違いざまに修羅と七星宝刀の一撃を受けたのである。

白波賊の中にその動きを見極める事が出来た者はいなかった。

また、姜維に続けとばかりに騎馬隊員も加速した勢いそのままに、白波賊の集団へ斬り込んでいく。

「さすが姜維様です。副長の私が無様な醜態を曝す事は出来ませんね！」

姜維隊副長の高順は、得意の剣術を生かして正確に敵を切り裂く。

姜維の武芸を目の当たりにしたばかりの白波賊は、まともな反撃をする事も出来ずに蹂躙される。

嵐のような騎馬隊の突撃はさほど長くは続かず、陣形を崩した白波賊の中心を駆け抜けただけだった。

それでも被害は甚大である。

人的被害もそうだが、精神的な面でも白波賊は心が折れてしまっていた。

『白夜叉の噂以上の実力、未だに両翼で暴れ続けている2人の猛将、調練が行き届いた兵と、全ての面で自分達が勝てる要素はない』

こう思ってしまったからこそ、武器を捨てて降伏するしか道はなかった。

「雅！　何で総大将の新様に突撃なんてさせやがった！？」

「そうだ！　納得のいく説明を聞かせてもらうぞ！」

戦闘終了後、本陣に戻ってきた夕と雅の第一声がこれだった。

……普通に考えたら当然のリアクションだよな。

俺だって、戦闘中に月様の部隊が突撃なんて始めたら絶対に詠を問い詰めるだろうし。

「2人共、少し落ち着いてくれ。きちんと説明するから」

怒気を撒き散らす2人とは対照的に雅は冷静そのもの。

普段通りの調子で説明を始めた。

「新の隊に突撃してもらった理由は、この戦闘で勝利を確実に収める為、つまり後詰めとして決定打になってもらいたかったからだ」

「後詰めなんかいらないくらいにアタシと椿の部隊は押してたじゃねえか！」

「あの時点ではね。だが、2人の隊のあの勢いは長くは続かなかったはずだ」

「……どういう意味だ？」

意味が分からないといった顔をする椿。

「確かに2人の部隊は新の激励によって高い戦意を保っていた。実際に今回の戦での戦果は、新兵が中心とは思えないくらい素晴らしいものだったよ」

それに関しては、報告を聞いて俺も驚いた。

討伐軍全体での死傷者は合計で3分の1程度。

死者と負傷者を合わせてこのくらいだから、分けて考えた場合はもっと少ない比率になる。

対して白波賊の死傷者は全体の7割程、残りの3割もほとんどが降伏したので、正に完全勝利と言える。

「だからこそ、あの勢いは長く保たない。いくら戦意が高くとも、新兵達は初めて人を殺した者、初めて友を失った者が殆どだったはずだ。本人は無自覚だったかも知れないが、人を殺した事や友を失った事による精神的な疲労はかなり溜まっていたのは容易に想像出来る」

雅のこの想像は的中している。

今、ほとんどの新兵達が疲労困憊状態でまともに動けない。

万事上手く行けば今日中に洛陽へ戻れたはずだが、兵があの状態なので今日はここで野営する事にした。

詳しい戦果の報告や野営する経緯などは全て書簡にしたためて、副長に渡してある。

その副長は、現在その書簡を持って少数の兵と共に洛陽へ帰還している最中だ。

「要するに、あのまま戦っていてもいずれ押し切られていた可能性があったって事だ。そうなれば、俺達の被害だって甚大だったかもしれない」

「我が軍の損害を最小限に抑える為には、どうしても最後の一押しが必要だったんだ」

椿と夕は黙って考え込んでいたが、ようやく口を開いた。

「……そういう事なら致し方有るまい」

「……悪かったな雅。いきなり怒鳴りつけちまって」

「気にしていないさ」

天幕が和やかな雰囲気に戻ったところで戦闘中から気になっていた事を聞く。

「ところで椿、あんな大斧を2本も振り回すなんて芸当、どうやったら出来るんだ？」

華雄さんの金剛爆斧並みの大斧を片手で持って、尚且つ2本振り回すような腕力があるようにはとても見えない。

「気の力です。体内で気を練り全身に行き届かせる事で身体能力を高めているんです」

「へ～。気って本当にあったんだな」

夕も感心している。

俺もビックリだ。さすが中国だな。

「俺にも気の使い方を教えてくれないか？」

「構いませんよ。気は本来全ての人間が体内に持っている力です。それを発現出来るかどうかは個人差がありますが、私に出来る事ならお手伝い致します」

よし！　これで男の夢である波〇拳とかかめ〇め波が使えるようになるかもしれない！

いや、椿のように身体能力を高める事が出来れば、恋にだって勝てるかもな！

「オラ、ワクワクすっぞ！！」

「落ち着け新」

おっと、そうだな。

ドキがムネムネして興奮してしまった。

「それじゃあ、暗くならない内に野営の準備を始めようか。兵のみんなもゆっくり休みたいだろう」

『御意』

新兵達にとって大変なのはこれからだ。

時間が経つにつれて、人を殺したという罪の意識が芽生えてくる。

それに潰されないようにして欲しい。

「……これぱっかりは自分で乗り越えるしかない」

天幕を出ると、既に日は傾き始めていた。

俺の呟きは西日の中に流れて消えていった。

「と、董卓様！　一大事です！！」

政庁の中庭で談笑している董卓と賈駆の元に、慌てた様子で兵が駆け寄って来た。

「何よ、騒々しいわね」

「一体どうしたんですか？」

その兵の口から語られた言葉は、２人の想像を絶するものだった。

「こ、皇帝陛下が……崩御されました……！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2543x/

真・恋姫†無双～姜維伝～

2011年12月22日00時31分発行